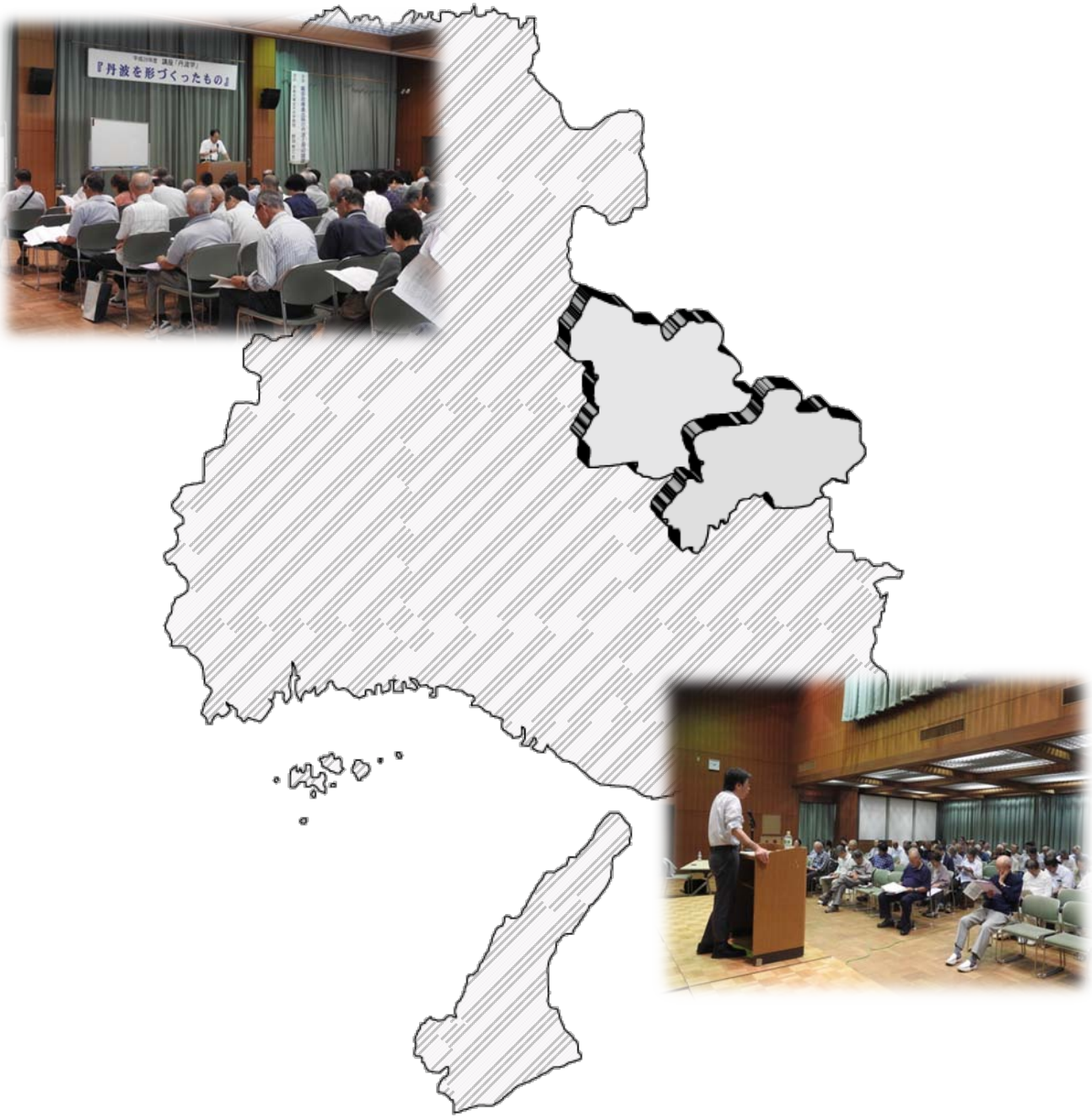
平成 28 年度 講座「丹波学」

丹波を形づくったもの



（公財）兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑

１　講座「丹波学」の開講にあたって

１　丹波の森構想（「丹波の森」づくり）

兵庫県丹波地域は、県の中東部に位置する森の国です。篠山市と丹波市からなり、阪神大都市圏から50～70㎞の近郊にありながら、森林面積が約75%を占めています。豊かな自然や田園風景が今も残され、「心のふるさと」ともいうべき大きな価値を持つ地域です。また、播磨、京都、大阪、日本海側からの街道が交差し、加古川、武庫川、そして、由良川の源流をなすことから様々な文化が入り交ざり、まさに文化の十字路として独特の文化を育んできました。

ところが、近年の社会情勢の変化は、この豊かな丹波の姿を急激に変えることになり、現在では、人口減少や少子高齢化が急速に進む中で、衰えつつある地域の活力を維持することが大きな課題となっています。

このような課題に直面した今こそ、時代に応じた新しい丹波地域を創造するための取組が必要となってきています。

丹波地域では、昭和63年9月、人と自然と文化の調和した地域づくりを目指す「丹波の森宣言」が21,616世帯の同意署名を得て採択されました。そして、丹波の森宣言を実現する指針として「丹波の森構想」が策定されました。丹波の森構想では、丹波地域を「丹波の森」と位置づけ、地域の資源や特性を生かしながら、人と自然と文化、産業の調和した地域づくりを、住民、事業者、行政が一体となって推進することをめざしています。以来、安らぎと活力に満ちた新しい丹波地域の創造に、丹波をあげて取り組んでいます。

２　講座「丹波学」の開設

講座「丹波学」は、「丹波の森宣言」の中でも、「丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。」という提言を具現化するために、平成８年から開設しています。

今年で２１回目を迎える本講座は、単なる郷土史等の講座ではなく、丹波地域の伝統、文化、歴史、風俗、人物、地理、言語などを総合的に学ぶことを通して、丹波の資源や特性を生かした地域づくりに資することを目的とした講座です。

３　平成２８年度のテーマ

平成２８年度は、テーマを「丹波を形づくったもの」としました。時代区分を限定せずに丹波地域の足跡をたどり、より多角的に丹波の歴史を捉えながら、現在の丹波がどのように形づくられてきたのかを考えることにより、その地域性についてより深層的な理解を図るための講座としました。

丹波の森宣言

丹波の自然と文化は、現在及び将来にわたる住民共有の財産であって、これを維持発展させることは私たちに課せられた重大な責務です。

今、私はこの責務を強く自覚し、お互いに力を合わせ、自然や文化を大切にしながら、これらを生かした「丹波の森」づくりを次のように進めることを宣言します。

1　丹波の健全な発展をそこなうような自然破壊は行わず、森を大切に守り育てます。
2　丹波の自然景観を大切にし、花と緑の美しい地域づくりを進めます。
3　丹波の文化景観及び歴史的遺産を大切にし、個性豊かな地域文化を育てます。
4　丹波の素朴さと人情を大切にし、安らぎと活力に満ちた地域づくりを進めます。

２　講座内容

■ テーマ　　丹波を形づくったもの
■ 期　間　　平成２８年９月１０日（土）～平成２８年１２月１７日（土）
■ 場　所　　丹波の森公苑　多目的ルーム
■ 日　程

開催日	学習テーマ	講 師 等
平成２８年 ９月１０日 （土）	織田政権進出時の丹波と周辺諸国	京都光華女子大学　教授 野田　泰三　氏
９月２４日 （土）	大坂の陣と真田丸 －丹波の武将たちの活躍－	(株)歴史と文化の研究所代表取締役、歴史学者 渡邊　大門　氏
10 月 1 日 （土）	中世荘園の遺産 －丹波国大山荘を中心に－	大手前大学　教授 小林　基伸　氏
11 月 26 日 （土）	丹波柏原の織田家から見る信長評価	文筆家、旧・柏原藩織田家 19 代当主 織田　信孝　氏
12 月 17 日 （土）	戦国期丹波の城郭とその防御施設	城郭談話会　会員 福島　克彦　氏

第１回
織田政権進出時の丹波と周辺諸国

京都光華女子大学教授　野田　泰三

はじめに

本日は､｢織田政権進出時の丹波と周辺諸国｣というテーマでお話しさせていただきます｡“織田政権と丹波”といいますと、明智光秀による八上攻め・黒井攻めなど、丹波の大名達が織田政権という外部勢力に侵攻され屈服させられるというイメージを抱いてしまいがちです。昨年度は織田政権よりも３、４０年早い時代の講義を致しましたが、周辺諸国と連携した丹波の武士が畿内に進出して政権を掌握する手前まで行ったという内容でした。今日は、織田政権の進出に抵抗する赤井氏・荻野氏ら丹波衆が広く国外勢力との連携を試みていたという点にご注目いただければと思います。

織田信長が足利義昭を擁して上洛する永禄１１年（１５６８）から､織田政権による丹波･播磨の攻略、あるいは摂津での荒木氏の謀反が鎮定される天正８年頃までを視野に入れて、この間の丹波武士の動向をいくつかの時期に区切りながら見ていきたいと思います。そうしますと、時期ごとに丹波衆が織田政権とどのように向き合っていたか、あるいは織田政権に反発する他の勢力とどのように連携していたかが見えてくるように思います。お話の大半は既にお聞きになったことがある内容だと思いますが、近年新しい史料もいくつか発見されていますので、そういうものも紹介しながらお話しさせていただければと思います。

１　永禄１１～天正初年の動静

まず、信長が上洛してまいります永禄１１年から天正の初年辺りの丹波衆の動向を追いかけていきたいと思います。

信長が足利義昭を擁して上洛してくるのは永禄１１年９月のことです。妹婿である浅井長政とともに数万の軍勢で美濃から西上して、途中南近江の六角氏を一蹴した後、京都に入ります。信長は京都には留まらずに、摂津に進み、摂津や河内・和泉にいた三好勢を駆逐して四国に追い落とします。その後あらためて入京し､足利義昭を将軍の座につけます｡信長の上洛戦はあっさりと成功しました。翌年には足利義昭のために二重の堀と石垣をともなった四方 200mを超える二条城を造営します。歴代室町将軍の城館としては非常に防御性に富んでおり、それまでの居館ではなく、石垣、堀、櫓をともなう城郭造りになります。今、京都に行きますと徳川家康の築いた二条城がありますが、あれとは別物で、現在の京都御所の西南にあった城で、“古二条城”とも呼ばれます。この造営のために、信長の本国であった尾張、美濃を始め、伊勢、三河、近江、五畿内、若狭、丹後、播磨など畿内周辺の国々の人夫が動員されますが、その中に丹波も見えます。｢信長公記｣という信頼性の高い記録に出てまいります。二条城の造営に丹波衆も動員されていることから、信長が入京すると、丹波の武士も概ねこれに従ったと考えられます。

永禄１３年、この年は改元して元亀元年になり、さらに元亀４年に再び改元して天正元年になりますが、この元亀年間の４年間は織田信長に対する外部からの締め付け、いわゆる信長包囲網が機能した時期で、信長としては周囲を敵に囲まれ、非常に苦心することになります。東の方では上杉謙信、武田信玄、北陸の朝倉義景、近江の浅井長政、南の方では大坂の本願寺、紀伊の雑賀衆・根来寺、四国の三好一族、西の方では毛利、これらが将軍足利義昭の示唆を受け、信長包囲網を形成して四方からじりじりと締め上げるのが元亀年間です。元亀元年の正月には、義昭が信長から離反する動きが顕著になり、上洛した信長が義昭に五ヵ条からなる誓書を突きつけて、それを遵守することを誓わせます。諸国に御内書（書状）を出す場合は必ず信長の副状を付けること、義昭がこれ以前に出した「御下知」はすべて無効とすることなど五ヵ条を呑ませて義昭の行動を制限したのが元亀元年（永禄１３年）の正月。４月には越前の朝倉攻めに向かいますが、その途中で妹婿の浅井長政に裏切られて、信長はかろうじて帰京します。その朝倉・浅井連合軍と６月に北近江姉川に戦いますが、この時は決着が付きません。８月には大坂の本願寺が蜂起して、一向宗も信長の敵になります。このように、元亀元年以降、信長に対する攻勢が強まります。

この時期、丹波武士はどうしていたかというと、表面だって信長に刃向かうという動きは見られません。永禄１３年３月に奥丹波の盟主である赤井忠家が、信長から丹波の奥三郡を安堵されているのが確認出来ます。史料①の織田信長朱印状写です。赤井家は江戸時代にも旗本として続きます。江戸幕府が各家に系図を提出させ、それをまとめたのが『寛永諸家系図伝』です。赤井忠家のところに｢赤井忠家。五郎、生国丹波。忠家若年の時、父（家清）にはなれしゆへ、伯父直正に国の事をとりおこなハしめて、忠家丹後（波）の奥

三郡を領し、信長の朱印をたまはる。」という説明に続けて、信長からもらった永禄１３年３月付けの朱印状が引用されています。「丹波奥三郡の儀、当知行の筋目を以て御下知を帯するの条、その旨に任せ、前々の如く領知を全うし、相違有るべからずの状件の如し。」宛所の蘆田五郎は赤井忠家のことで、従来の所領丹波奥三郡を忠家に安堵しています。奥三郡というのは氷上・天田・何鹿の三郡です。丹波六郡のうち都に近い方が内三郡、遠い方が奥三郡です。赤井氏は丹波半国の支配を認められ、信長政権下では丹波最大の大名として認定されたことになります。

その後、１１月には多紀郡八上城の波多野秀忠が信長に太刀・馬を献上して帰順の姿勢を示しており、元亀元年頃には丹波衆は信長の配下という立場を甘受しています。信長包囲網が締め付けを強めていた元亀３年の８月に至っても、京都の松尾社の領地である雀部荘（福知山市）を赤井忠家が横領して年貢を納めないので、当時京都奉行を務めていました羽柴秀吉が忠家に対して、どうか松尾社に年貢を納めてやって欲しいという要請をしています。京都の荘園領主に対して年貢未納という不正行為は働いていますが、表だって織田政権に反抗するということはしていません。秀吉も赤井忠家が織田政権麾下の大名だからこそ、要請を行ったのです。この段階でも、まだ丹波衆は織田からの離反の姿勢は見せていないことになります。ところが、元亀３年末あたりから翌年にかけて状況が変わってきます。

史料②は元亀４年正月、大坂の石山本願寺の門主である顕如が越前（福井県）の大名朝倉義景に宛てた書状です。朝倉から本願寺へ書状が来て、その返信になります。これを見ると、黒井城の荻野直正が京都へ出陣するという噂が立っているようです。「荻野惣右衛門京表の儀、承り候。」“惣”という字と“悪”という字の崩しは似ていますので、“悪右衛門”の読み間違いだろうと思うのですが、荻野直正が「京表」、足利義昭に味方して信長に刃向かう姿勢を見せており、それが朝倉らの知るところとなっています。ただ、続けて顕如は皮肉なことを言っています。「丹波勢の働き、年来差したる儀なく候。」丹波衆はこれまで大した働きをしていない。「殊に国侍、奥・口共に以て不和の国に候条、難しき事と候か。信用に足らず候。」丹波の国侍というのは、奥の地方と口の地方とで仲が悪くて、この両者が共同して信長に反旗を翻すのは難しいだろう。だから荻野が織田に弓を引くといっても信用に足らない、と辛辣なことを言っています。当時丹波衆がどのように見られていたかが分かる史料です。ともあれ、荻野氏がこの頃信長から離反する傾向を見せていて、それが周知のこととなっていたことは疑いがありません。なぜこの時点で荻野氏が信長から距離を置きだしたかということですが、元亀４年正月は信長に対する圧力が一番強まった時期です。その前の年、元亀３年には武田信玄が上洛の途に着いており、１２月に遠江の三方ヶ原（浜松市）で徳川家康の軍勢を完膚無きまでに叩きのめしました。さらに武田軍は三河まで進んで、元亀４年２月には三河の野田城（新城市）を落とします。この書状の認められた正月末というのは、武田勢が三河までじりじりと進んで来ていて、徳川家康は防戦しきり、信長の運命も風前のともしび、そういう世評が飛び交っている状況でした。そうした状況を受けて、京都の将軍義昭も信長に対する反意を明らかにして、２月には二条城に拠って挙兵するのですが、信長絶体絶命という状況が、荻野氏以下の丹波衆を動かしたのだろうと思われます。

ところが丹波衆には残念なことに、武田信玄は野田城攻略中に病を得て撤退することになり、上洛はなりませんでした。武田勢の上洛をあてにして挙兵した足利義昭ですが、織田方の軍勢に二条城を包囲されて、結局蜂起は失敗しました。信長に詫びを入れて何とか和睦しますが、７月に再び宇治の槇島城で挙兵します。この時も織田勢の前にあっさりと敗北し、槇島城を追われた義昭は河内から紀伊へと流浪することになります。この義昭再蜂起の際には、丹波の国衆はこぞって足利義昭方につきました。史料④は２年後の天正３年に、信長が丹波の川勝氏に宛てた書状です。「内藤（ジョアン）・宇津（頼重）事、先年京都錯乱の刻、こなたに対し逆心未だ相休まず候や。」とあって、先年の京都の錯乱とは元亀４年（天正元年）の義昭の挙兵を指しますが、その時に八木城の内藤氏と宇津城の宇津氏、東丹波の有力二氏が信長に対して反旗を翻したと言っています。赤井・荻野氏らも義昭方についたようですので、元亀４年の段階で丹波衆は一斉に反織田となったということです。

この時期、黒井城主の荻野直正は、甲斐の武田氏と音信しています。史料③は天正２年に武田勝頼から荻野直正に出した返信です。武田信玄は前の年に亡くなっており、勝頼が跡を継いでいます。「十月十七日の芳翰、十二月廿一日到着」とあって、荻野直正が１０月１７日付けでしたためた書状が勝頼の手元に１２月２１日、ほぼ二ヵ月かけて届いています。「則ち披閲、なかんづく使者の口説、具さに聞き届け、その意を得候。」書状を拝見し、使者の口上も聞き、了解しました。「そもそも信長に対し怨敵の色を顕わされ、既に鉾楯に及ばるるの由候。誠に武勇と云い戦功と云い、かたがた以て比類無き次第候。」鉾楯に及ぶとは合戦することで、

信長を怨んだ荻野が信長と既に戦争になっているということだが、武勇といい戦功といい比類無き働きである、と荻野の勇猛果敢さを賞しています。天正元年１０月の段階で、荻野と武田の間でやりとりが始まっており、荻野氏が単独で蜂起したのではなく、武田氏などの反織田勢力と連携しながら動いていたことがわかります。それに対して翌年２月に勝頼が、信濃境の雪が消えたのでこれから尾張・美濃に向けて乱入・侵攻するつもりだと荻野に報じたのです。西と東で連携して信長を挟み撃ちにしましょうということでしょう。

この段階での丹波衆の動向をまとめますと、信長が上洛した永禄１１年から元亀元年までは、丹波衆は信長の麾下に入っていて、なかでも奥３郡の領地を安堵された赤井忠家が丹波で最大の大名として認定されました。ところが、元亀争乱の最後の段階になって、信長絶体絶命の噂が流れると、丹波衆の荻野・宇津、あるいは内藤氏らが反旗を翻しました。なかでも赤井忠家の後見役であった荻野直正は、甲斐の武田氏とも音信して連携していました。決して丹波国内だけの局地的な動きではないということがわかります。

２　天正３・４年の動静

丹波の国衆の離反が明らかになりましたが、織田政権には手当てしなければいけないところがたくさんあったので、すぐに丹波の敵勢力の掃討ということにはなりませんでした。織田軍が本格的に丹波に攻めてくるのが天正３年６月のことです。先ほどみた史料④には内藤や宇津が昨年信長に弓を引いたと述べた後で、「出仕無く候はば誅罰を加うべけんがため、明智十兵衛（光秀）を指し越され候。」とあります。丹波衆は永禄年間に信長に帰服した後も上洛･謁見をしておらず、国元で模様眺めをしていたようです。一旦は弓を引いた内藤や宇津が上洛して信長に御礼言上しなければ討伐する。そのために明智十兵衛を派遣した、と述べています。史料⑤も天正３年６月の織田信長の書状です。宛所は園部辺りに本領を持っていた小畠氏。「今度その国案内者につき、そなた肝煎を以て明智十兵衛指し遣わし候処、」明智十兵衛を丹波討伐のために派遣する。あなたはその案内者をつとめなさい。要するに丹波土着の小畠氏は現地の事をよく知っているだろうからよろしく頼む、と言っています。実際、小畠永明は、こののち明智光秀の侍大将として活躍することになります。天正３年６月頃、明智光秀がいよいよ丹波へ侵攻してきますが、このときはまず口丹波（東丹波）に向かいました。

その間、西丹波でも動きがありました。黒井城主荻野直正が、１１月に但馬の竹田城（最近は雲海の城、天空の城として有名です）を攻めるという事件を起こしています。史料⑥、但馬の八鹿郡（現在養父市）に八木という町があります。そこを本拠にしていた但馬の有力国衆八木豊信が、毛利元就の弟である吉川元春に出した長い書状です。「信長へ出石（山名祐豊）・竹田（太田垣輝延）より連々懇望を為すにより、惟任日向守（明智光秀）丹波に至り乱入候。即ち荻悪（荻野直正）、竹田表より引き退かれ黒井城に楯籠もられ候。」黒井城が史料に出てまいります。「かの城の廻りに十二・三ヶ所付け置かれ相陣候。この内近くは城々尾崎一陣執り堅められ候。兵糧等相続くべからず候間、来春は一途たるべき様風聞候。丹波国衆、過半残る所無く惟日（光秀）一味候。」出石の山名氏、竹田の太田垣氏が、荻野が攻め込んで来たので何とかして欲しいと信長の方に泣きついてきたので、信長はそれを受けて明智光秀を西丹波に派遣した。それを聞いた荻野は、竹田表から引き返して本城である黒井城に籠城した。明智方は黒井城の回りに１２、３ヶ所の付城を築いて包囲した。そのうち近い所に設けた付城は黒井城の尾根続きだ。黒井城としては回りを包囲されてしまったので、兵糧が続かないだろうから、年が明けた頃には落ちるだろう。丹波の国衆はほとんど残るところ無く明智方についた。こういう内容を但馬の八木氏が毛利家の家老である吉川元春に報じています。光秀の丹波進攻により丹波衆の大半が光秀に味方し、荻野氏が孤立している状況が判明します。

なぜ荻野が但馬へ出陣して竹田城を攻めたのかということですが、少し前からの経緯があります。出雲の月山富田城を本拠とした大名尼子氏晴久は一時期は山陰・山陽地方の８ヵ国を支配する大大名に成長しましたが、毛利元就によって滅ぼされます。尼子晴久が滅ぼされた後、永禄１２年に一族の尼子勝久がお家再興を目指して鳥取県の西部にあたる伯耆地方で軍事蜂起し、天正元年に至って東隣の因幡まで侵攻してきます。有名な山中鹿之介（幸盛）らが支えていました。慌てたのが山名氏の惣領である但馬の山名祐豊（出石城主）です。因幡・伯耆も山名領だったのですが、そこで尼子勢が暴れ出したために手に負えなくなって、毛利氏と共同して両側から攻めようと同盟を結びます。これが天正３年５月のことで、「芸但和睦」、安芸（毛利氏）と但馬（山名氏）の和睦と当時いわれた事件です。１１月には毛利勢が尼子勢の拠点である因幡国の若桜鬼ケ城を攻めます。鳥取県の若桜町にある山城で、ここから東に進んで氷ノ山を越えると但馬になり、但馬との国境に近い要衝でした。ここを当時尼子勢が拠点としていて、そこを毛利勢が攻めました。但馬側の八木豊信（八木城主）も毛利勢を支援するために出陣して、

氷ノ山の通路、若桜と八木を結ぶ街道を押さえました。このように、尼子攻めのために八木豊信が出陣するなど但馬国内が混乱していました。地図をみていただきますと、黒井城から街道を西北に進むと梁瀬、梁瀬から少し南へ下ったところが竹田です。竹田から西に進むと八木、八木から西へ因幡へ抜ける街道が通っていて、これがいわゆる氷ノ山越になります。八木氏は八木城から西へ進んで氷ノ山越のルートを押さえていました。当然竹田城の太田垣氏らも連携していると思いますが、但馬国内が混乱している隙を突いて、荻野氏が竹田を襲いました。これが但馬に更なる混乱をもたらすことになったために、但馬の山名氏は信長に泣きついて明智光秀を派遣してもらうことになった訳です。この時は、年が明けたら黒井城は落ちるだろうという予測が為されていた訳ですが、実際のところは、翌天正４年正月に八上城主の波多野秀治が寝返り、光秀に叛旗を翻したため、光秀は惨敗して京都まで逃げ帰ってしまいます。明智勢による丹波攻めは失敗しました。黒井城が追い詰められ絶体絶命といわれている時に、なぜ波多野氏が叛旗を翻したのかいうことについては、後で考えてみたいと思います。

この時期、但馬衆は因幡で蜂起した尼子氏の鎮定に追われていました。その隙を突いて荻野氏が但馬に侵攻しています。丹波衆は天正年間には他国に侵攻するのですね。何も国内にじっと座して織田信長に平定されるのを待っている訳ではなくて、いろいろと隙を突いて策動しています。荻野氏が但馬の竹田城を襲った理由はよくわかりません。『丹波氷上郡志』という大正年間に編纂された書物では、元亀２年の冬に出石城主の山名祐豊らが氷上郡に侵攻して山垣城の足立氏を攻撃しており、これに対する反撃だという風に解釈しているようですが、実際のところはよくわかりません。

それはさておき、黒井城は落城寸前、丹波の国衆も大半が光秀に一味したと報じられるような状況のなかで、なぜ波多野氏が敢えて光秀に叛旗を翻したのかということです。その鍵は史料⑤にあります。さきほどみた小畠左馬助（永明）宛の織田信長の書状です。「このうえにて丹後表へ近日出勢すべく候条、先手仕り稼ぎ申すべく候。」丹波が平定したら丹後にまで軍を進めるので、その時は先鋒を務めてください。「そなた本領の儀は申すに及ばず、多喜（紀）郡一円に指し遣わすべく候。両国平均に属するにおいては、かの地に至り入部仕るべく候。いよいよ忠節を抽んずるにおいてはひとかど加増を遣わすべく候間、油断有るべからず候。」丹波・丹後の２ヵ国を平定したら、あなたの本領とともに多紀郡すべてを与えましょう、と述べています。恐らくこれが波多野の耳に入ったのでしょう。このまま黒井城の荻野直正が鎮圧されて、丹波一国が織田政権の手に入ると、多紀郡は小畠氏に与えられ、多紀郡八上城を本拠にしている波多野氏は追い出されてしまう。このままでは本領が奪われると危機感を持った波多野が、敢えて明智軍に対して離反する行動を取ったのだろうと思います。

もう一つ考えられることは、天正４年正月に波多野秀治は突如謀反するのですが、翌２月には京都を追放された足利義昭が河内や紀伊を経て、備後鞆（現在、広島県福山市）に移ってきます。毛利氏はこれを庇護せざるを得なくなり、義昭は以後、備後の鞆に腰を落ち着けます。この前後から義昭は反信長勢力にしきりに書状を送っては信長討伐を働きかけています。足利義昭や毛利氏からの調略の手が恐らく播磨や丹波にも伸びていたと思われます。さらにこの頃、備前の岡山を拠点にしていた宇喜多直家が播磨へ侵攻してきます。毛利方の先鋒たる宇喜多勢が西播磨の龍野まで進出してきており、織田方の前線が破られつつありました。織田方の形勢が不利になっており、波多野氏の離反により光秀による最初の丹波攻略は完全な失敗に終わりました。

ところで、この時期、南九州の大名である島津氏の一族が丹波国を旅行しています。天正３年、島津家久による丹波縦断行です。島津家久（1547～87）は薩摩・大隅・日向３ヵ国の領主である島津義久の弟です。鹿児島県西北部の串木野城主でした。２９歳の時、島津家が南九州の３ヵ国を治めていられるのは伊勢神宮をはじめとする神仏の加護のお陰だということで、京都の諸社寺や伊勢神宮を参詣します。その時に家久が残した記録が東京大学史料編纂所が所蔵している『中務大輔（島津家久の名乗った官名で、中国風に言うと中書とも言います）家久公御上京日記』です。天正年間の西日本各地の情勢がわかるということで、近年とみに注目されています。家久は島津家分家の殿様ですから１００人ほどの家来を連れて上京します。多数の武士が武装して旅行すると各地でトラブルを引き起こしかねないので、全員巡礼姿に身をやつし、刀なども極力持たずに、山伏らに案内されながら京都へ向かいました。

２月２０日に地元の串木野を立った一行は、有明海沿いに陸路を北上し、３月９日に小倉に着きます。翌日関門海峡を船で渡って赤間関（下関市）に至り、山口県・広島県内を陸路、瀬戸内海沿いを東へ進みます。３月２３日・２４日には宮島に渡って厳島神社に参詣しました。その後、本土に渡り返して陸路を進みますが、途中広島県三原市の沼田にあった新高山城（毛利家の家老である小早川隆景の居城）を眺めながら三原

に出、鞆に至ります。鞆から船に乗った家久は香川県の塩飽諸島、岡山県の牛窓、兵庫県の室津・兵庫を経て、４月１５日に西宮に着津。ここから陸路をとって４月１６日大山崎に至り、４月１７日に京都に着きました。家久一行は京都に約４０日間滞在し、現在でも京都を観光する時に行くような名所旧跡、洛中はじめ洛西・洛東・洛北・洛南、京都のほぼ全域の観光地を回った後、よくやく伊勢に向けて出立します。伊勢は１日の滞在で切り上げ、伊勢神宮に参拝を済ますと早々に奈良に入って、興福寺・東大寺といった寺社や松永久秀の多聞山城を見ると、京都にもどります。京都には６月６日に着くのですが、翌７日は祇園御霊会（祇園祭）当日にあたり、山鉾の巡行を楽しんでいます。ついで大坂に下り、堺・住吉を見物したあと、道を北にとって、６月１１日に有岡城下（伊丹）に入ります。ちょうど荒木村重が城の石蔵（石垣）の工事をしていたようで、荒木殿の石蔵の普請を見たと記しています。そこから丹波路にかかって、６月１２日槻瀬、１３日明野、１４日小倉を経て１５日に但馬の八木に至ります。更に氷ノ山を越えて因幡の若桜、坂本（浜村）と進み、伯耆大山に参詣した後、米子を経て出雲に入ります。杵築大社（出雲大社）に参拝し、毛利氏が経営する石見銀山を見、石見銀山で産出する金・銀の積み出し港であった温泉津（ゆのつ）から船に乗ります。浜田に寄港したのちは、一挙に平戸まで渡っています。平戸には唐船（中国船）が入港しており、家久は唐船に乗り込んで虎の子を見ています。平戸から海路で串木野に帰り、５ヵ月間に及ぶ旅を終えました。

この旅の中で、６月に数日をかけて丹波国を東南から西北に縦断しています。史料⑧ですが、当時の人がどういうルートを取っていたのかがわかり、非常に面白い。「十二日、夜を籠て打立、池田の宿を通、たゝ（多田）のうちはつか（羽束）の郡なから、夕の空の月の瀬（槻瀬）といへる村、北林彦左衛門といへるものゝ所に詠臥佇ぬ。」６月１２日、夜明け前に発足した一行は池田宿から多田を経て夕刻に槻瀬（三田市）に着きます。「十三日、朝立行に、高平関とて二所ニ有。其折しも、この前に山たち（山賊）有とて所の者走行を、我が身の上かとおそろしく、然共何事なく行々て」高平というところに関所があり、少し前に山賊が出た由。家久は大勢の家来を引き連れているのですが、それでも恐ろしかったようです。幸い無事に通過することができました。「然共何事もなく行々て、丹波の内大野原一見し、其より名ハ駒くら（小枕）越なれハ、わらちさしはきかちより過行けハ、は（端）城とも有。さてあけの（明野）といへる市場有。通ちやうの田村予三次郎といへるものゝ所へ一宿。」いよいよ摂津から丹波へ入ります。小枕は篠山盆地の東南方、明野市場は篠山盆地の西端です。明野市場の予三次郎というものの所で一泊した。「十四日、辰刻（八時頃）ニ打立、おひれ（追入）といへる村にて加治木衆山本坊ニ合候。」追入で薩摩の加治木衆である山本坊に行き会った。山伏でしょう。「軈而（やがて）はこや（箱谷）に着しためし。其よりかね（金）山を越して、ひかミ（氷上）の郡の内猪の山とて城有。」鐘ヶ坂峠を越えると氷上郡で、猪の山という城が有った。「かいた（貝田）・あした（芦田）の城有。」貝田城、芦田城があった。「さて小倉の町、茶や彦三郎といへる者の所へ一宿。」小倉はこの会場の近辺です。町と出てきますから、それなりに町屋があったのでしょう。小倉町の茶屋の彦三郎という所でその日は泊まった。「拾五日、打立、三里坂といへるを越え、但馬の内太田垣の城（竹田城）有。」地図を見ると、小倉町から梁瀬市場までずっと山道になっている。この辺りを三里坂越えと言っているようですが、三里坂を越えて但馬に入り、太田垣の城（竹田城）の側を通った。「其よりやなせ（梁瀬）の市場を通り、垣屋とのゝ持たかた（高田）の町にやすらひ出行に、一日坂といへるを越、八木殿の町（八木）に着。善左衛門といへるものゝ所へ一宿。」梁瀬市場から垣屋氏の支配する高田町を抜けて、八木氏が治めている八木城下に着きます。先ほど尼子勢を東西から挟み撃ちにするために八木氏が氷ノ山の通路を塞いだと言いましたが、次に氷ノ山が出てきます。「十六日、ひほの山（氷ノ山）とて大山を越、つくよね（春米）といへる村なれと、しつ（賤）のまかなひもなく、其辺の仏にかり枕。」氷ノ山を越えて因幡・鳥取県に入ります。因幡側の最初の村がつくよね（春米）ですが、宿が無かったため、その辺りの仏堂に仮り寝をしたと記しています。更に翌１７日、「若狭（桜）の町を通りけるに、其城（若桜鬼ヶ城）の有主、二三日前ニ山中鹿助謀略を以生取、若狭の城を知行し、さし籠らるゝ人数に行合候。」尼子勢が蜂起して拠点としたのが若桜鬼ヶ城です。但馬との国境に近い要衝にある城だと申しましたが、島津家久がここを通りかかる２、３日前に山中鹿之助ら尼子勢が計略を巡らして城主を生け捕りにし、若桜城を占拠して軍勢を籠めおいた。その軍勢に行き会ったと書かれています。この後も家久一行は帰国の旅を続けますが、丹波地方を通過した際の記述は以上です。

島津家久が丹波を南から北へ縦断した時期には、ちょうど明智光秀が内藤・宇津氏を征伐するために東丹波に派遣されていました。亀岡やその北の宇津周辺は軍事的に緊迫した状態だったと思うのですが、西丹波ではこの日記を読む限りさほど緊迫感は感じられません。普通に旅行が続けられる状況であったようです。

一方、丹波・但馬を経て因幡に入ると、尼子方の山中鹿之助（幸盛）による若桜城の奪取・占拠が２、３日前に起きていたということが生々しく語られています。若桜城は、翌年の５月までほぼ１年に亘って尼子方の拠点となりますが、尼子勢が若桜城を占拠した直後に家久一行が通りかかったことになります。丹波にしても因幡にしても、島津家久は戦闘の合間をうまくすり抜けるように旅行したといえるでしょう。以上、天正３・４年の動向を第二期としてみました。

３　天正４～８年の動静

次は天正４～８年の状況です。この頃になりますと、丹波だけでなく周辺の播磨、摂津でも反織田の動きが出てまいります。レジュメの年表では、播磨・但馬に関わる事項を▲、摂津に関わる事項を●で表しています。各地で様々な動きが出てきますので状況が複雑になってきます。

京都を追放された室町幕府最後の将軍である足利義昭は、天正４年２月に毛利氏の庇護を受けて備後の鞆に居を構えます。鞆は瀬戸内海に面した風光明媚な港町ですが、足利義昭が御所にしていた安国寺というお寺がいまも残っています。足利義昭は鞆を拠点にして反織田勢力を炊きつけます。

５月には、丹後加悦の領主である石河繁俊が吉川元春へ書状を送っています。加悦は但馬や丹波の国境から程遠からぬところです。史料⑨の冒頭「未だ申し通さず候といえども、啓上せしめ候。」今までお手紙を差し上げたことはありませんでしたが、初めてお便り申します、という文章で始まります。「公方様（足利義昭）御供奉として火急御出馬あるべき趣、伝え承り候。」吉川殿が公方様にお供して、近々御出陣される由うかがいました。「我等事、連々信長に対し遺恨のみ候。」私はこれまで信長に対しては遺恨ばかり持っております。「この刻幸い候条、荻野悪右衛門尉・赤井刑部少輔（幸家）と相談し、随分忠切を致すべき心素候。当国（丹後）の面々、異議無く候。」そちらが出陣されるのを好機として、丹波の荻野・赤井氏と相談し随分と忠節を致すつもりです。石河氏は荻野・赤井氏と連携して吉川氏と共同戦線を張る申し入れをしています。

同じ年の９月、本願寺の坊官であった下間頼廉が荻野氏のもとに書状を送っており、荻野直正が丹後の石河氏、大坂本願寺など反織田勢力と広く手を取り合っているのがわかります。⑩の史料ですが、「内々是より申されたきの刻、遮って貴簡、殊に太刀一腰・馬一疋進せらるの趣、披露を遂げ候。」当方からご挨拶申すべきところ、貴方様から先にお手紙と太刀・馬をお贈り下さいまして、門主（顕如）には披露致しました。荻野の方から本願寺に働きかけをしたようです。「誠に連年籠城の儀、御高察有るべく候。」本願寺が信長との戦いで数年に亘って籠城を続けていることをご高察下さい、また中国（毛利氏）と申し合わせているのでご安心下さいとも述べています。その後、下間頼廉は荻野直正に諸国の情勢を伝えています。詳しくは述べませんが、一向一揆が蜂起している加賀へは下間頼純が下向して指揮にあたり、上杉謙信の指南によって能州（能登国）も支配下におさめたと書かれています。紀伊国では織田方の小倉（津田）監物が高野山へ退去したので根来寺と申し合わせて和泉へ進攻する、芸衆警固衆（毛利方の水軍）が渡海し次第、連携した味方が蜂起する予定だ、ともあります。諸国の反織田勢の動向を記した後で、「随って貴国（丹波）・丹後・雲・伯の儀、吉川殿御行の由、かたがた以って目出たく候。」「雲・伯」は出雲・伯耆のことですが、丹波・丹後・出雲・伯耆が連携して吉川殿が軍事行動に及ぶのは目出たいことだ。先ほどの石河繁俊の書状と同様、丹波・丹後衆が吉川・毛利勢と共同歩調を取ることになっており、本願寺にも伝わっていたのです。ただし、この時丹波衆がすぐさま行動に移ったわけではありません。一旦撤退した明智光秀が再度進攻してくるのを待ち受けているというのが当時の状況です。

年が明けて天正５年になると、先度の失敗に懲りた明智光秀は丹波国内に織田方の拠点を築くことを始めます。天正５年正月に光秀が亀山惣堀の普請を命じており、この頃亀山城（現在の亀岡城）の築城が進められていました。ここが丹波攻略の拠点となります。ほぼ同じ頃、赤井氏・荻野氏が吉川元春に書状を送っています。史料⑪は赤井幸家の書状ですが、「よって御出張の事、去年仰せを蒙る時分、既に火急候条、目出存じ候。その刻随分忠節を致すべく候。」吉川殿出陣のことは去年既に承っておりますが、その時期が近づいたということで、非常に目出たく存じます。その節には私も随分忠節を尽くします、と述べています。史料⑫荻野直正書状もほぼ同趣旨です。史料⑪赤井幸家書状は吉川氏の当主春元に宛てていますが、史料⑫荻野直正書状は吉川氏の家臣宛てです。赤井家が惣領（本家）筋、荻野はその補佐役ですので、このような形になっていますが、赤井・荻野氏は吉川氏に協力すると、天正５年正月にあらためて申し送ったのです。

その冬に、明智光秀の二度目の丹波攻略戦が開始されます。今回は本格的な丹波攻めです。天正５年１０月に光秀は「モミヰ（籾井）之館」（篠山市）を攻めています。年が明けて天正６年３月、織田信長は細川藤孝（幽斎）に、あらためて丹波奥郡・多紀郡の道普請、つまり軍事行動に先立って軍勢が通る道路を整備して

おくように命じています。奥郡と多紀郡が並列に出てきますので、多紀郡は奥郡には含まれません。奥郡というのは先に述べた氷上・天田・何鹿郡の三郡です。これに多紀郡を合わせた四郡の道路整備を命じていることから、信長が本腰をいれて丹波制圧を目論んでいたのが分かります。同じ３月には、播磨の攻略を命じられた羽柴秀吉が播磨入りしています。秀吉は３月上旬に加古川で評定を開きますが、別所長治以下播磨衆の離反が明らかになったため、秀吉は急遽姫路に進んで北郊の書写山（姫路市）に陣を張ります。史料⑬には当時の様子が記されています。

播磨での戦いは“三木合戦”と呼び慣わされ、三木城に籠もった別所長治が織田方の大軍を前に果敢に戦ったというイメージが強いのですが、実際は播磨の国衆・国人が一斉に反旗を翻し、その最大の抵抗拠点が三木城だったというのが実像のようです。史料⑬は本願寺方の清次・光吉という人物が連名で和歌山の雑賀衆に宛てた書状です。天正６年３月８日の時点で、「三木・高砂・明石、そのほかの国衆皆々此方へ一味仕り候て、即ち討ち果たすべき調略これ在る事に候。」三木の別所氏、高砂の梶原氏、明石の明石氏、そのほか播磨の国衆達が皆々本願寺に一味をして、織田方を打ち果たす計略があります、と述べています。三木別所氏だけではなく、梶原氏、明石氏ら諸将も一斉に離反したことが分かります。光秀による丹波攻めが始まった段階で、播磨では反織田勢力が蜂起したことになります。

４月に信長は滝川一益・丹羽長秀らを増援として丹波に派遣しますが、史料⑭は丹波在陣中の丹羽長秀が別所重棟に宛てた書状です。別所重棟は別所長治の叔父ですが、唯一織田方に付いた人物です。播磨加東郡の豊地城を居城としていました。遠路はるばるの書状を忝けないという挨拶のあと、「今度、御諚により丹州へ相働き、荒木山城守（氏綱）城（細工所城）五間十間に取り詰め、水の手相止め候条、落居五三日中たるべく候。」この度信長様の命令によって丹波へ出陣し、荒木山城守が守る細工所城を包囲して水の手を止めました。数日中には落城させることが出来るでしょう、と報告しています。さらに「その国（播磨）清水寺の儀承り候。その表へ相勤める（働くヵ）においては随分馳走申すべく候。」別所重棟から長秀に、播磨加東郡の清水寺（加東市）に被害が及ばないようによろしく頼むというような要請があったようで、長秀は、了解した、その方面へ進発した際には骨を折ろう、と回答しています。清水寺は播磨・丹波・摂津３ヵ国の国境近くにある西国三十三所のひとつ。篠山盆地の東端に位置する細工所城から街道（現在の国道３７２号線）を姫路の方へ西に進みますとすぐ左手（南）にあたります。豊地城を守る別所重棟は、丹波の戦線が拡大して播磨に及ぶことを危惧していて、領内の清水寺の安全に配慮してくれと言っているようです。織田方では、丹波の赤井・荻野氏、波多野氏と播磨の三木別所氏らが連携し共同戦線を張ることを警戒していました。『別所記』など軍記物によれば、別所長治が三木城に籠もって蜂起した際に同じく挙兵したとされるのが、志方城、神吉城、野口城、高砂城、それに美囊郡の淡河城と明石郡の端谷城です。淡河城や端谷城のような山間部の城と多紀郡・氷上郡の勢力が山道伝いに連携する可能性は十分ありました。そのことがわかるのが史料⑭です。

この頃、西からは毛利勢が美作・播磨に進攻し、有名な上月城の包囲戦が行われます。総帥毛利輝元以下、吉川元春・小早川隆景ら毛利勢が総力を挙げて播磨西北部の上月城を攻めます。先ほど尼子勝久以下が因幡・伯耆で蜂起したと申しましたが、尼子氏は織田氏を頼り、当時は尼子勢が上月城の守備に就いていました。尼子勢が籠もる上月城は毛利勢によって厳重な包囲下に置かれます。秀吉は荒木村重などの援軍を得て救助に向かうのですが、打つ手が無く、信長の指示もあって結局上月城を見殺しにしてしまいます。史料⑮は上月城攻囲中の吉川元春が国元の家臣に宛てた書状です。「上月取り詰めの様躰ならびに後巻として打ち下り候敵陣の趣、先日度々御報ながら申さしめ候。今日に至り何たる行（てだて）も申し付けず候。」上月城を包囲している我々毛利方の様子と、援軍として京都から下って来た織田方の様子はこれまで度々報告していますが、今に至るまで特段の動きはありません。「荒木・羽柴以下罷り居る迄候。」救援に駆けつけた荒木や羽柴は、只々在陣しているだけです。「城内の儀、この比はひとしお相弱り候。第一兵粮これ無き由候条、落居程有るべからず候。」上月城内は兵粮が無いこともあって最近は一段と弱っている。落城は間近だろう。「責め口の儀、城麓に帰鹿垣・乱杭・逆虎落・荒堀等随分手堅く申し付け、幾重も詰め寄り候条、その段御校量の前候。」城の麓に鹿垣や乱杭・逆茂木を結い回し堀を掘って厳重に包囲している、と書いてあります。上月城攻めの様子を生々しく伝える貴重な証言です。丹波の状況にも触れて、「丹波表の儀、赤井・波多野・荻悪七申し談じられ、明智領分に至り相働き、勝利を得られ候や。尤も珍重候。今度当方に対し別して馳走有るべしとの内証、その聞こえ候や。然るべく候、然るべく候。」赤井・波多野・荻野氏らが相談して明智領に攻め込み勝利を得たとのこと、我々に一段の協力をすると内々の約束があり尤もなことだ、と述べています。

結局７月に織田勢が撤退したため上月城は開城降服、尼子勝久は自害、山中鹿之助は捕らえられたのち首を打たれました。実は播磨国内まで攻め込んだこの時が毛利方の絶頂期で、このあと一気呵成に東に攻め込んで丹波・播磨の反織田勢力を糾合すれば織田方もあわやの事態となったと思うのですが、毛利氏は上月城から東には動きませんでした。毛利氏は天下を狙う絶好の機会を逸したというべきでしょう。

しかし、上月城救出戦の失敗や丹波攻めの難航などが影響して、今度は摂津の荒木村重が１０月に謀反を起こします。信長から摂津一国の支配を任されていた荒木村重の本城は有岡城（伊丹市）ですが、国内の支城もこれに呼応します。高槻、茨木、吹田、花熊、池田、大和田、多田、能勢、三田、これらはすべて荒木方の城ですが、これが一斉に反織田に転じます。これら諸城が反織田に転じますと、丹波・播磨・摂津の三つの戦線が接続してしまいます。信長も泡を食っただろうと思います。特に三田城（三田市）はちょうど丹波・東播磨・摂津の中間に位置し、三田城を結節点として三つの戦場が結びつく可能性がありました。信長は明智光秀にこの三田城攻略を命じました。光秀は八上城攻めを家臣に任せ、自身は三田に向かいます。史料⑰は三田出陣以前、京都滞在中の光秀が八上攻めを指揮している小畠永明に宛てた書状です。八上攻めの付城を厳重にせよと指示するとともに、「荒平太（荒木重堅）の類、山越えに自然来候とも、指したる義これ有るべからず候。」三田城を守る荒木重堅らが山越えして来てもさしたることは無いと言っているのですが、逆に言うと、三田の城兵が山越えをして丹波に現れる恐れが十分にあった。荒木勢と丹波勢が手を結ぶ可能性があり、そのため八上城攻めの用心をしっかりせよと命じたのが史料⑰です。

信長も摂津全域で火の手が上がったことを非常に警戒し、１２月になると各城に対して付城を築かせ、とくに本城の有岡城は完全な包囲下におき、自ら摂津へ下って有岡攻めを督励することとなります。光秀も１２月に三田城に向かい、八上城・三木城と三田城を結ぶ通路を遮断しています。光秀は大丈夫だと言っていますが、荒木氏が叛旗を翻し摂津国内の諸城が反信長となることによって、播磨・丹波・摂津の三つの反織田勢力が連携して抵抗する可能性が出てきた。しかも背後には毛利氏や本願寺も控えている。信長にとっては最大のピンチですから、自ら摂津まで出馬して戦争指揮を行ないました。こういう状況下で、毛利勢が播磨から畿内に侵攻していれば、織田信長もどうなっていたか分かりません。天正７年正月には八上城を攻めていた光秀の右腕小畠永明も討ち死にしました。

ところが、天正７年には織田方が徐々に挽回していきます。

３月には、毛利方の先陣を務めていた岡山の宇喜多直家が織田方に転じます。織田氏は備前・美作に勢力を張る宇喜多氏を防波堤として毛利氏と対陣することができるようになりました。５月には氷上城が陥落、更に秀吉は三木城の支城である淡河城を落とし、これによって瀬戸内海を臨む花熊城から丹生山・淡河城経由で三木城に至る兵粮・弾薬の補給路を断つことに成功します。６月には八上城が陥落して、波多野親子が捕えられます。７月には東丹波の宇津氏が没落、８月には赤井忠家の拠る黒井城が陥落。９月には丹波の最後の抵抗拠点である国領城が落ち、丹波は平定されました。このように天正７年には、丹波にしても播磨にしても反織田勢力が退勢となり、織田方の優位が動かなくなります。摂津では、荒木村重が９月に有岡城を脱出して嫡男村次の守る尼崎城に入ります。毛利氏や本願寺・紀伊雑賀衆との連携を図ったものと思われますが、主人を失った有岡城はこの後２ヵ月程して降服します。翌天正８年正月には別所長治が自刃して三木城が落ちました。大坂本願寺も勅命によって信長と和睦し、４月に門主顕如が本願寺を退去。播磨では宇野政頼・祐清父子が拠る宍粟郡の長水山城が５月に落城して、秀吉によって播磨が平定されました。尼崎城の荒木村重は３月に海路西国へ落ちており、最後まで抵抗を続けていた支城花熊城も７月に降服開城。これで丹波・播磨・摂津の反織田勢力は平定されました。

天正４年から８年にかけての動きを見てまいりましたが、大きな転機はやはり天正６年だろうと思います。丹波に加えて播磨・摂津でそれまで織田方だった諸将が反織田に立場を変えました。加えて、これ以前から大坂本願寺の抗戦が続いていました。瀬戸内海の制海権は本願寺に味方する毛利氏や紀伊雑賀衆によって大阪湾の入口までほぼ押さえられていました。播磨の英賀、淡路島最北端の岩屋、それから兵庫、尼崎といった港は全て毛利方の水軍が押さえていました。陸上では織田方が優勢ですが、瀬戸内海は広く反織田方が押さえており、海上では反織田方が圧倒的に有利でした。こういう状況に加えて、足利義昭や毛利氏から調略の手が伸びて、別所長治以下の播磨衆が離反します。但馬では垣屋氏が織田方の宵田城を攻めました。

史料⑯は足利義昭の家臣小林家孝が毛利家臣に宛てた書状ですが、荒木村重の調略を担当していたことが記されています。「態と一筆申し入れ候。よって摂州表調略の儀につき、我等境目に至り罷り出で候。」荒木氏を調略するために私は国境まで行きました。「然らば当御番衆の内末国左馬助方、馳走を以て同道有るべきの

由候条、同心候。」摂津の国境まで行ったところ、毛利家御番衆の末国左馬助が同道を申し出ましたので、一緒に摂津に行き（村重を調略し）ました、と記されています。これまでも村重は足利義昭あるいは毛利氏によって調略されていたのだろうと推測されていましたが、この書状の発見により、荒木村重が義昭・毛利氏による調略を受けていたという事実が確定しました。播磨衆が離反したうえに、上月落城の影響もあって摂津の荒木村重も離反しました。丹波・播磨・摂津一帯が反織田方になりました。更に淡路島北端の岩屋、尼崎、花熊、兵庫という瀬戸内海の港が毛利方によって押さえられていて、花熊や兵庫は三木城への補給基地としても機能していました。羽柴秀吉は西播磨で孤立しますし、これらの地域の押さえのために織田軍の大兵力が割かれることになって、信長が危機的状況に立たされたのが天正６年です。

ところがこの後、織田方は巻き返しに成功します。鳥取県西部の伯耆に南条氏という有力な国衆がいますが、これが織田方の調略を受けて寝返る。更に岡山県北部、美作の国衆草刈氏も織田方に寝返る。吉川元春が非常に長文の書状を残しているのですが、毛利勢は山陰（日本海）ルートで京都へ入ろうとしていた。因幡の若桜から氷ノ山を越えて但馬の八木から竹田に進み、更に丹後との国境に程近い竹野へ至る。竹野は当時毛利方水軍の前線基地となっていましたので、その竹野まで進んでそこから南下するルートを考えていましたが、伯耆南条氏や美作草刈氏が織田方に寝返ったことによって、山陰ルートが使えなくなった。以後、毛利氏は山陽道ルートで京都へ攻め上ることを考え、これが後に備中高松城の戦いなどに繋がっていく訳です。ところが、山陽道ルートにしても備前の宇喜多直家が織田方になりますので、スムーズには進まなくなりました。その間に織田方によって丹波・播磨・摂津が個別に攻略される。織田方は当初この三勢力が連携することを恐れていましたが、三田城攻撃が功を奏するなど、三つの戦線が結局は連動できずに各個撃破されて、最終的には織田方が勝利することになりました。

反織田勢力の立場からすると、勝利をつかむ機会はありながら、その機会を逸しました。丹波衆にしても東の武田氏と音信を通じ、西の吉川氏とも連携し、織田氏を挟み撃ちにする体制はできていたのですが、いまひとつ詰めが足りず、最終的には光秀に制圧されることになりました。

おわりに

この時期の丹波をめぐる攻防についていいますと、八上城や黒井城落城の悲劇が表に立って、孤立無援ながら良く頑張ったという評価があるのですが、戦国期の丹波衆は、実は現代の我々が想像する以上に活発に国外勢力と連携していました。ことに毛利氏と連携し吉川勢の先鋒となって働くという構想は広く周知されていたようです。史料を見ていますと、１６世紀半ば、1500 年代半ば以降というのは、地方の国衆といえども全国規模で音信を行い、他地域の大名・国衆と繋がる、そういう動きをする時代です。ですから、一つの地域だけ見ているのではなくて、西日本とか本州とか、視野を広くもって歴史を見直しますと、丹波武士の意外な働きといいますか、地域を越え、国を越えて広く活動していた武将達の動きが見えてまいります。近年興味深い史料が見つかったり、再発見されたりしていますので、ご紹介を兼ねてお話しさせていただきました。ご清聴、有り難うございました。

【第１回 野田　泰三 氏 資料】

講座「丹波学」　　２０１６．９．１０

織田政権進出時の丹波と周辺諸国

野田泰三（京都光華女子大学）

１．永禄～天正初年の動静　－信長包囲網の一翼として－

１）丹波の政治情勢

永禄 11 年（1568）

９月　織田信長、上洛する。

永禄 12 年（1569）

２月　二条城の造営に尾張・美濃・近江・伊勢・三河・五畿内・若狭・丹後・播磨衆と共に丹波衆も動員される。

永禄 13 年（元亀元、1570）

３月　赤井忠家、信長から丹波奥３郡（氷上、天田、何鹿）を安堵される。【史料①】

11 月頃　波多野秀忠、信長に太刀・馬を献上する。

元亀３年（1572）

８月　羽柴秀吉、赤井忠家に押領する松尾社領雀部荘年貢の納入を要請する。

元亀４年（天正元年、1573）

正月　荻野直正が京都に出陣するとの風聞。【史料②】

２月　足利義昭、二条城に拠って信長と敵対。

７月　義昭、槙島城で挙兵するも降服。京都を落ち河内若江へ

→内藤ジョアン、宇津頼重、赤井忠家、荻野直正らは義昭方に

10 月　荻野直正、武田勝頼に音信する。【史料③】

天正２年（1574）

２月　武田勝頼、荻野直正へ尾張・美濃への出陣予定を伝える　【史料③】

２）丹波国衆の動向

・信長上洛後、いったんは信長麾下に

・のち足利義昭と信長の対立が顕在化すると荻野・赤井・宇津氏らは反信長に。荻野氏は甲斐武田氏とも音信、連携を企図。

２．天正３・４年の動静　－但馬進攻と織田政権からの離反－

１）丹波・但馬をめぐる状況

天正３年（1575）

５月　但馬の山名祐豊（出石城主）、対尼子戦のため毛利輝元と和睦する（芸但和談）

←尼子勝久、永禄 12 年伯耆で蜂起し天正元年に因幡（山名豊国）へ進攻

６月　光秀、内藤・宇津退治のため丹波へ。【史料④⑤】

11 月頃　毛利勢、尼子勢の籠もる因幡の若桜鬼ケ城を攻撃。但馬衆の八木豊信（八木城主）も参陣し氷尾山通路（若桜－八木）を差し留める。

荻野直正、竹田城（太田垣輝延）を攻める。信長、出石（山名祐豊）・竹田からの懇望により光秀を丹波へ派遣。荻野は竹田より撤退し黒井城に籠城。光秀　は付城を築いて包囲。丹波国衆は過半光秀に一味するという【史料⑥】

天正４年（1576）

正月　波多野秀治（八上城主）の離反により光秀敗戦、近江坂本へ帰陣。【史料⑦】

２月　足利義昭、備後鞆へ

２）丹波国衆の動向

・因幡の尼子氏鎮定に追われる但馬衆の隙をついた荻野氏の但馬侵攻

←元亀２年 11 月山名祐豊と一族の磯部豊直（夜久野城主）が氷上郡に侵攻し、山垣城の足立氏を攻撃（『丹波氷上郡志』）

・「丹波国衆、過半残る所無く惟日一味候」となった時点での波多野氏の離反

←多紀郡が織田方についた小畠永明に与えられることへの危惧【史料⑤】

足利義昭・毛利方からの調略／備前宇喜多氏の播磨西部侵攻

３）天正３年島津家久の丹波縦断

①島津家久（天文 16・1547～天正 15・1587）

・島津貴久の４男、義久の弟。串木野（鹿児島県いちき串木野市）城主。

天正 12 年３月肥前沖田畷の戦いでは龍造寺隆信の大軍を破る。のち日向佐土原（宮崎市）城代に。

・「中務大輔（中書）家久公御上京日記」（天正３年、29 才）

2/20 串木野出立～3/9 小倉～3/10 赤間関～3/23･24 宮島･厳島社参宮～沼田新高山城（小早川隆景居城）～3/29 三原～4/2 鞆…塩飽…牛窓…4/7 室津…4/14 兵庫…4/15 西宮～4/16 山崎～4/17 京都着＝5/27 京都出立～6/1 伊勢参宮・山田～6/4 奈良（筒井城、多聞山城）～6/5 寺田～～6/6 京都＝6/7 祇園会～6/9 堺～6/10 住吉社～6/11 有岡（荒木とのの石蔵の普請）～6/12 槻瀬～6/13 明野～6/14 小倉～6/15 八木～6/16 氷ノ山越え～6/17 若桜城～6/18 坂本（浜村）～6/20 大山参詣～6/21 米子～6/23 杵築大社参詣～6/24 金山（石見銀山）～6/25 温泉津（出雲の歌とて舞うたひたる見物）…6/27 浜田（～7/9）…7/12 平戸（唐船乗船見物、虎の子）…7/20 串木野帰着

②丹波国内の行程　【史料⑧】

・6/12 池田→6/13 多田→高平関→大野原→駒くら越（小枕）→6/14 明野市場→追入→金山越→猪山城→かいた・芦田城→6/15 小倉町→三里坂越→竹田城→梁瀬市場→高田町→一日坂越→6/16 八木城下→氷ノ山越→6/17 春米→若桜城下

・６月、内藤・宇津退治のため、光秀が丹波に派遣される。

因幡では山中幸盛による若桜城奪取。以後尼子氏の因幡の拠点に（～天正４年５月）

３．天正４～７年の動静　－丹波・播磨・摂津－

１）丹波と周辺諸国の状況　　▲：播磨・但馬　●：摂津

天正４年

２月　足利義昭、備後鞆へ

５月　丹後加悦の石河繁俊、荻野直正・赤井幸家と共に忠節を致すことを吉川元春に申し送る。【史料⑨】

９月　本願寺坊官下間頼廉、荻野直正に諸国の戦況を報じる。【史料⑩】

天正５年

正月　光秀、「亀山惣堀普請」を命ずる（この頃から亀山築城）。

赤井幸家・荻野直正、吉川元春に「御出張」時には忠節を致すことを申し送る。【史料⑪⑫】

10 月　光秀、「丹州モミヰ（籾井）之館」（篠山市）を攻める。

天正６年

３月　信長、細川藤孝に丹波奥郡・多紀郡の道普請を命ずる

←天正３年９月　信長、藤孝に桑田・船井２郡を与える。

▲羽柴秀吉、播磨入りし書写山へ進む。別所長治ら播磨衆の離反。【史料⑬】

４月　滝川一益、丹羽長秀、明智光秀、丹波に出陣し「荒木山城（氏綱）居城」（細工所城、篠山市）を攻め落とす。【史料⑭】

▲毛利勢、尼子勝久・山中幸盛らの籠もる上月城を包囲。秀吉、荒木村重、上月城救援に向かう。滝川、佐久間信盛も後詰めに。【史料⑮】

７月▲織田勢の撤退により上月城陥落。

９月　光秀、亀山から八上城に着陣

10 月●荒木村重の謀叛。高槻、茨木、吹田、花熊、池田、大和田、多田、能勢、三田の諸城も与同。

光秀は八上城の包囲強化を命じるとともに、荒木重堅（三田城主）の「山越」を警戒。自身は摂津へ。【史料⑰】

12 月●信長、塚口・食満（尼崎市）、倉橋・原田・刀根山（豊中市）、古池田（池田市）、加茂（川西市）などに付城を築き有岡城を包囲する。

●光秀、秀吉・佐久間信盛らと摂津三田城に向かい、付城を築いて三木・八上との通路を断つ。のち多紀郡へ進む。

天正７年

正月　八上城攻囲中の小畠永明が討ち死する。

３月　光秀、八上に着陣。

▲備前宇喜多直家の毛利氏離反が明らかとなる。

５月　氷上城が陥落し、波多野宗長・宗貞父子が自害する。

▲秀吉、三木方の補給ルートである淡河城を落とす（兵庫津－花熊城－丹生山－淡河城－三木城）。毛利・三木方は魚住城を補給拠点とするが、秀吉は三木城を付城で包囲して対抗。

６月　八上城が落ち、波多野秀治・秀尚ら捕縛される。

７月　光秀、桑田郡に進攻し宇津頼重を追う。ついで細川藤孝とともに丹後に進攻し、弓木城の一色義有を降服させ、丹後を平定。

▲垣屋豊続、八木豊信、太田垣輝延ら但馬衆、吉川元春に但馬出兵を懇請する。

８月　赤井忠家の拠る黒井城が落ちる。

９月●荒木村重、有岡城を脱出し嫡男村次の守る尼崎城に移る。

国領城（丹波市）が落ち、丹波平定される。

10 月▲秀吉、三木城の包囲網を縮める。

11 月●有岡城、降服する。

天正８年

正月▲別所長治自刃、三木城が落ちる。

２）天正６年の転機

①播磨・摂津衆の織田方離反

・大坂本願寺の抵抗、毛利・雑賀衆による瀬戸内制海権の掌握

西丹波衆の抵抗

＋足利義昭・毛利方による調略　→播磨国衆の離反、垣屋豊続の宵田城攻撃

＋上月落城＋足利義昭・毛利方による調略　→荒木村重の離反　【史料⑯⑱】

・影響

丹波西部、播磨東部、摂津西部一帯が反織田方に

岩屋（淡路島北端）に加えて尼崎・花熊・兵庫が毛利警固衆（水軍）の拠点に

花熊・兵庫は三木城への補給基地

西播磨進出中の羽柴勢が孤立

３地域の抑えに織田勢の大兵力が割かれる

②反織田勢力、頽勢へ

・伯耆南条氏の離反、美作草刈景継の織田方内応

吉川元春は八橋・鹿野（因幡）→若桜→八木・竹田（但馬）ルートでの侵攻を計画するも断念。以後、山陽道ルートでの進攻が主眼に。

・備前宇喜多直家の離反

毛利勢の山陽道ルートでの侵攻が妨げられる

・織田方により播磨勢、丹波勢、摂津勢が個別撃破

①【織田信長朱印状写】（寛永諸家系図伝）

赤井忠家〈五郎、生国丹波〉、忠家若年の時父（家清）にはなれしゆへ、伯父直正に国の事をとりおこなハしめて、忠家丹後（波）の奥三郡を領し、信長の朱印をたまはる。

丹波奥三郡の儀、当知行の筋目を以て御下知を帯するの条、その旨に任せ、前々の如く領知を全うし、相違有るべからずの状件の如し。

永禄十三

三月日　　信長朱印

蘆田五郎（赤井忠家）殿

②【本願寺顕如書状】（顕如上人書札留）

御札の趣、披見せしめ候。荻野惣右衛門京表の儀、承り候。丹波勢の働き、年来差したる儀無く候。殊に国侍、奥・口共に以て不和の国に候条、難しき事と候か。信用に足らず候。その上は兵粮の儀、その沙汰に及ばざる事に候。但し三好家と相談せられ、事調うにおいては珍重たるべく候。なお頼充法眼申し入るべく候。｜

（元亀四年）

正月廿七日　　｜｜

左衛門督（朝倉義景）殿

③【武田勝頼書状】（赤井文書）

十月十七日の芳翰、十二月廿一日到着。則ち披閲、なかんづく使者の口説、具さに聞き届け、その意を得候。そもそも信長に対し怨敵の色を顕わされ、既に鉾楯に及ばるるの由候。誠に武勇と云い戦功と云い、かたがた以て比類無き次第候。漸く信濃境の雪消え候の条、尾・濃に向け無二乱入せしめ、手合いに及ぶべく候。御心安かるべく候。委曲、釣閑斎（長坂光堅）・跡部大炊助（勝資）所より申し届くべく候の間、具さあたわず候。恐々謹言。

（天正二年カ）

二月六日　　勝頼

荻野悪右衛門尉（直正）殿

④【織田信長朱印状写】（記録御用書本「古文書」）

内藤（ジョアン）・宇津（頼重）事、先年京都錯乱の刻、こなたに対し逆心未だ相休まず候や。出仕無く候はば誅罰を加うべけんがため、明智十兵衛（光秀）を指し越され候。連々馳走の条、なお以てこの時忠節を抽んずべき事、専一候也。よって状件の如し。

天正三

六月七日　　信長朱印

川勝大膳亮（勝氏）殿

⑤【織田信長朱印状写】（小畠文書）

今度その国案内者につき、そなた肝煎を以て明智十兵衛指し遣わし候処、相違無く申し付くの由、御感に思し召し候。このうえにて丹後表へ近日出勢すべく候条、先手仕り稼ぎ申すべく候。そなた本領の儀は申すに及ばず、多喜（紀）郡一円に指し遣わすべく候。両国平均に属するにおいては、かの地に至り入部仕るべく候。いよいよ忠節を抽んずるにおいてはひとかど加増を遣わすべく候間、油断有るべからず候。なお明智十兵衛申すべきもの也。

天正三

六月十日　　信長御朱印

小畠左馬助（永明）とのへ

⑥【八木豊信書状】（吉川家文書）

別紙御返札拝見、快然候。頃日の躰、定めて方々より申せらるべく候といえども、承り及ぶ通り、一書を以て申させしめ候。

一、御下りにつき、若桜要害殊の外相究め候。ことに郷内百姓等罷り出るにより、本意の様申し触れらる事、御推量有るべく候。然りといえども、御人数等残し置かるる儀候間、珍しき行（てだて）これ無く候。御心安かるべく候。

一、当国（但馬）事、御下国により宵田・西下心持ち相替わり、手前然留べき様取り成し存じ候。氷尾山通路事、剰つさえ度々申され候といえども、申し談ずる筋目を以て今に差し留め候。最前申し理わり候如く、この方手前方々相支えるにより、行に及ばず候。その御意得に預かるべく候。

一、信長へ出石・竹田より連々懇望を為すにより、惟任日向守（明智光秀）丹波に至り乱入候。即ち荻悪（荻野直正）、竹田表より引き退かれ黒井城に楯籠もられ候。かの城の廻りに十二・三ヶ所付け置かれ相陣候。この内近くは城々尾崎一陣執り堅められ候。兵糧等相続くべからず候間、来春は一途たるべき様風聞候。丹波国衆、過半残る所無く惟日（光秀）一味候。

（二ヵ条略）

一、播州事、池田信濃守（荒木村重）、宗景（浦上）へ兵粮少々指し籠められ、十月五日打ち入られ候。信長在京につきて、屋形（赤松則房）・龍野（赤松政秀）・御着（小寺政職）・宗景・三木（別所長治）、そのほか礼のため上洛候。

一、当国無事取り扱いのため、信長より朱印を以て惟日より使を差し越され候。強いて申さるるにおいては宵田・城崎・田結庄・西下背かれ候あいだ、相整うべく候や。

一、鹿介（山中幸盛）、そなた懇望を相捨てられざる由候。如何御返答成され候や。相替わる御思案候はば、預かり知りその意を成すべく候。

（一ヵ条略）

（天正三年）

十一月廿四日　　豊信（花押）

吉川駿河守（元春）殿　御宿所

⑦【兼見卿記】天正四年正月条　　※吉田兼見

十五日（中略）丹州黒井の城、荻野悪右衛門在城なり。旧冬以来、惟任日向守（光秀）取り詰め在陣なり。波多野（秀治）別心せしめ、惟日在陣敗軍せしむと云々。

⑧【家久公御上京日記】（東京大学史料編纂所所蔵）

（天正三年六月）

一、十二日、夜を籠て打立、池田の宿を通、たゝ（多田）のうちはつか（羽束）の郡なから、夕の空の月の瀬（槻瀬）といへる村、北林彦左衛門といへるものゝ所に詠臥侘ぬ。

一、十三日、朝立行に、高平関とて二所ニ有。其折しも、この前に山たち（＝山賊）有とて所の者走行を、我が身の上かとおそろしく、然共何事なく行々て、丹波の内大野原一見し、其より名ハ駒くら（小枕）越なれハ、わらちさしはきかちより過行けハ、は（端）城とも有。さてあけの（明野）といへる市場有。通ちやうの田村予三次郎といへるものゝ所へ一宿。

一、十四日、辰刻（八時頃）ニ打立、おひれ（追入）といへる村にて加治木衆山本坊ニ合候、軈而（やがて）はこや（箱谷）に着しためし、其よりかね（金）山を越して、ひかミ（氷上）の郡の内猪の山とて城有。かいた（貝田）・あした（芦田）の城有。さて小倉の町、茶やの彦三郎といへる者の所へ一宿。

一、拾五日、打立、三里坂といへるを越え、但馬の内大田垣の城（竹田城）有。其よりやなせ（梁瀬）の市場を通い、垣屋とのゝ持たかた（高田）の町にやすらひ出行に、一日坂といへるを越、八木殿の町（八木）に着。善左衛門といへるものゝ所へ一宿。

一、十六日、ひほの山（氷ノ山）とて大山を越、つくよね（春米）といへる村　なれと、しつ（賤）のまかなひもなく、其辺の仏にかり枕。

一、十七日、若狭（桜）の町を通りけるに、其城（若桜鬼ケ城）の有主、二三日前ニ山中鹿助謀略を以生取、若狭の城を知行し、さし籠らるゝ人数に行合候。其より行てたち井（丹比）殿の城（市場城）有。亦半廻の城とて有。軈而石井大膳介峯入ニとて、　山法師支度にて出たゝるゝ所に行合、彼人亦跡のことく帰り、舟岡（八上郡）といへる　町にて、夜終いにしへの事共語。宿助左衛門。

⑨【石河繁俊書状】（吉川家文書）

未だ申し通さず候といえども、啓上せしめ候。よって　公方様（足利義昭）御供奉として火急御出馬有るべき趣、伝え承り候。我等事、連々信長に対し遺恨のみ候。この刻幸い候条、荻野悪右衛門尉・赤井刑部少輔（幸家）と相談し、随分忠切を致すべき心素候。当国（丹後）の面々、異義無く候。御出張次第、その覚えを成すべく候。拙者儀、毎篇荻悪まで申し送るに付き、又御内証申し聞かせ候間、愚札を捧げ候。随って御太刀〈一腰〉・御馬〈壱疋〉進運候。しかしながら向後尊意を得べきため候。恐々謹言。

（天正四年）

五月十四日　　繁（花押）

吉川駿河守殿　人々御中

⑩【下間頼廉書状】（赤井文書）

内々是より申されたきの刻、遮って貴簡、殊に太刀一腰・馬一疋進せらるの趣、披露を遂げ候。一段喜び入れられ候、誠に連年籠城の儀御高察有るべく候。随分中国と申し合わせ、越度無き様才覚せしむべく候間、御心安かるべく候。先々牧雲斎へ御書中懇慮の至り、謝す所を知らず候。加州へは同名侍従法橋、去る二日無事に下着せしむの由注進候間、これ又御心安かるべく候。謙信御指南に任せらるる事に候。能州の摸（模）様、御勝手に属すの由候間、珍重候。謙（謙信）御人数、加州に至り御加勢の儀候。それにつき、去る十一日一戦を遂げ、敵八百計ばかり加州へ討ち捕るの由候。定めて貴辺その隠れ有るべからず候条、懇筆能わず候。次いで紀州小倉監物と申者一城ばかり計候を、去る廿四日懇望せしめ高野へ罷り退き落去せしめ候間、残る所無く存分に任せ候。この上に根来寺申し合わせ、泉州へ出張たるべく候。芸州警固衆渡海次第、計策の方々色を　立つべき旨候間、公儀御入洛程有るべからず候。随って貴国（丹波）・丹後・雲・伯の儀、吉川殿御行の由、かたがた以って目出たく候。いよいよ貴殿御一身御分別を相極め候。返えずがえす思し食し寄せられ、御懇書本望の至りに候。やがて是より申し入れらるべく候。後慶を期師候。恐々謹言。

（天正四年）

九月廿六日　　頼廉（花押）

荻野悪右衛門尉殿　御返報

⑪【赤井幸家書状】（吉川家文書）

旧冬は御墾報、忝なく存じ候。

肇年の嘉祥、漸く事旧り候といえども、なお以て休期有るべからず候。そもそも御太刀一腰・御馬一疋、進献致し候。まことに祝儀を表すばかりに候。よって御出張の事、去年仰せを蒙る時分、既に火急候条、目出存じ候。その刻随分忠節を致すべく候。かたがた御様子承るべきため、安国寺（恵瓊）辺へ委曲申し送り候。連々御訴訟の事、この砌無異に仰せ付けらるべき事、最も畏悦たるべく候。しかしながら不調法に進退候といえども、早や累年に及び憑み奉るうえ、一命を顧みざるほか他無く候。万々慶事近日貴意を得べく候。恐惶謹言。

（天正五年カ）

正月廿六日　　幸家（花押）

吉川駿河守殿　参人々御中

⑫【荻野直正書状】（吉川家文書）

猶々、向後無二御意を得べき心底候間、別して御取り合い祝着たるべく候。

去年、使者を以て申し候処、御取り成しにより元春公御墾報、拝悦の至り候。よって御出張の事、仰せを蒙る時分、既に火急候条、御様子承り、その覚悟を成すべく候。重ねて使者を企て候。なお趣においては安国寺へ申し入れ候。仰せ談じられ、然るべきの様、御

取り合い憑み存じ候。随って青銅百疋進らせ候。誠に祝儀を表すばかりに候。委曲、広田左馬助口上に任せ候。恐々謹言。

（天正五年カ）

正月廿八日　　直正（花押）

市川雅楽丞（経兼）殿　御宿所

⑬【清次・光吉連署書状】（鷺森別院文書）

（尚々書略）

態と啓せしめ候。よって葉筑（羽柴秀吉）播州表へ差し下し候につきて、ここもと湊の警固、有り次第岩屋まで仰せ下され候。然かる処、三木・高砂・明石、そのほかの国衆皆々此方へ一味仕り候て、即ち打ち果たすべき調略これ在る事に候。その方へ上様より御はやうちを以て仰せ下され候条、その表の人数三百程岩屋まで早速に御立ち然かるべく候。大事の手筈これ在る由仰せ出ださる御事候。申すに及ばず候へども、御由断有るまじく候。我等両人の儀も岩屋まで参るべく候。御暇申し候へども、先ず先ず四、五日逗留の儀仰せ出され候の間、かくの如く候。誠に稀なる所と内心存じ候。　恐々謹言。

（天正六年）

三月八日　　光吉（花押）

清次（花押）

雑賀御坊御惣中

⑭【丹羽長秀書状】（清水寺文書）

遠路の処、早々示し預かり畏み存じ候。内々これより申し入るべきを、万取り紛れ延引、所存の外に候。よって今度長井表落居の由、尤もに存じ候。それにつき、［　］（貴所カ）御手負いの旨、御心元無く存じ候。しかしながら薄手の由承り候へば然かるべく存じ候。次いで今度　御諚により丹州へ相働き、荒木山城守（氏綱）城（細工所城）五間十間に取り詰め、水の手相止め候条、落居五三日中たるべく候。時宜においては御心安かるべく候。はたまた、その国（播磨）清水寺の儀承り候。その表へ相勤める（働くカ）においては随分馳走申すべく候。この書状、羽筑（羽柴秀吉）へ御届け候かい給うべく候。恐々謹言。

（天正六年）　　惟五左

卯月十七日　　長秀（花押）

別孫右（別所重棟）　御返報

⑮【吉川元春書状】（牛尾家文書）

この表の趣、具さに御聞き有りたきの由候て一人差し越され候。それにつき御紙面銘々披見申し候き。

一、（中略）上月取り詰めの様躰ならびに後巻として打ち下り候敵陣の趣、先日度々御報

ながら申さしめ候。今日に至り何たる行も申し付けず候。荒木・羽柴以下罷り居る迄候。城内の儀、この比はひとしお相弱り候。第一兵粮これ無き由候条、落居程有るべからず候。責め口の儀、城麓に帰鹿垣・乱杭・逆虎落・荒堀等随分手堅く申し付け、幾重も詰め寄り候条、その段御校量の前候。

一、丹波表の儀、赤井・波多野・荻悪七申し談じられ、明智領分に至り相働き、勝利を得られ候や。尤も珍重候。今度当方に対し別して馳走有るべしとの内証、その聞こえ候や。然るべく候、然るべく候。

（一ヵ条略）

一、出石（山名祐豊）の御事、今に敵とも味方とも相澄まざるむ□（きカ）と候や。去る比、宵田表へ豊続（垣屋）相戦われ候時も出石より少しの人数なりとも差し出され候はばいよいよ勝利たるべく候処に、その儀無きの由候。世上を見合わさるる趣候や。（後略）

（三ヵ条略）

一、上月よりの落人、田結庄表へ罷り越し候や。かの者口上の趣、兵粮一円これ無き由申し候や。この表へ落ち来たり候者も同前に申し候。兎角当表の儀、勝利眼前迄候条、一途においては但州表の行、翌日申し付くべく候。その表の儀も只今より内々その御嘆息・御支度専一候。申すに及ばず候、申すに及ばず候。

一、城介（織田信忠）方陣所へも忍等差し上さるべきやの由承り候。かれこれ御心遣いの段、申すも疎かに候。そのほか五畿内・荒信（荒木村重）なとへも涯分御調略肝要候。肝要候。申すに及ばず候といえども、あさとに候わぬ様、御賢慮専一候。専一候。（後略）

（天正六年）

六月二日　　元春（花押）

古因（古志重信）　御返申し給へ

⑯【小林家孝書状写】（萩藩閥閲録）

態と一筆申し入れ候。よって摂州表調略の儀につき、我等境目に至り罷り出で候。然らば当御番衆の内末国左馬助方、馳走を以て同道有るべきの由候条、同心候。かの条相調うにおいては末国方事をもひとかど御褒美肝要候。内々かの仁の事、無二の馳走候。数度雑談の時も、御弓矢の御用に立つ儀においては一命を捨つべく候由、その隠れ無く候。この子細においては御番衆、なかんづく清水長左衛門尉（宗治）方、淵底存じ候間、申し入れらるべく候。何れも行相調い、これより御吉相申すべく候。返すがえす末国方の事、向後のため候条、よくよく御心を付けらるべき事肝要に存じ候。これより申し入るべく候。恐々謹言。

（天正六年）

十月十四日　　家孝判

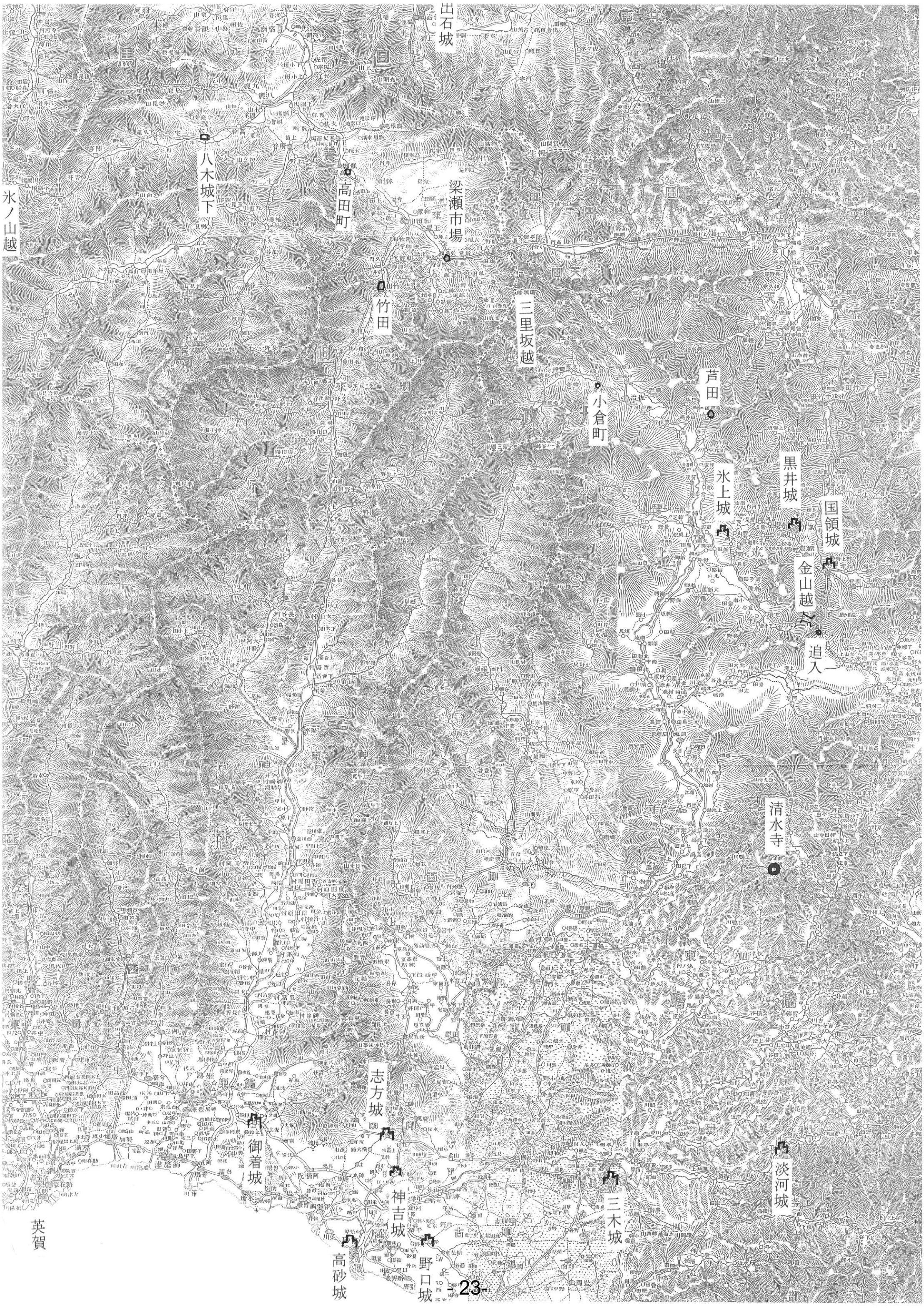
（口羽通良・福原貞俊あて）

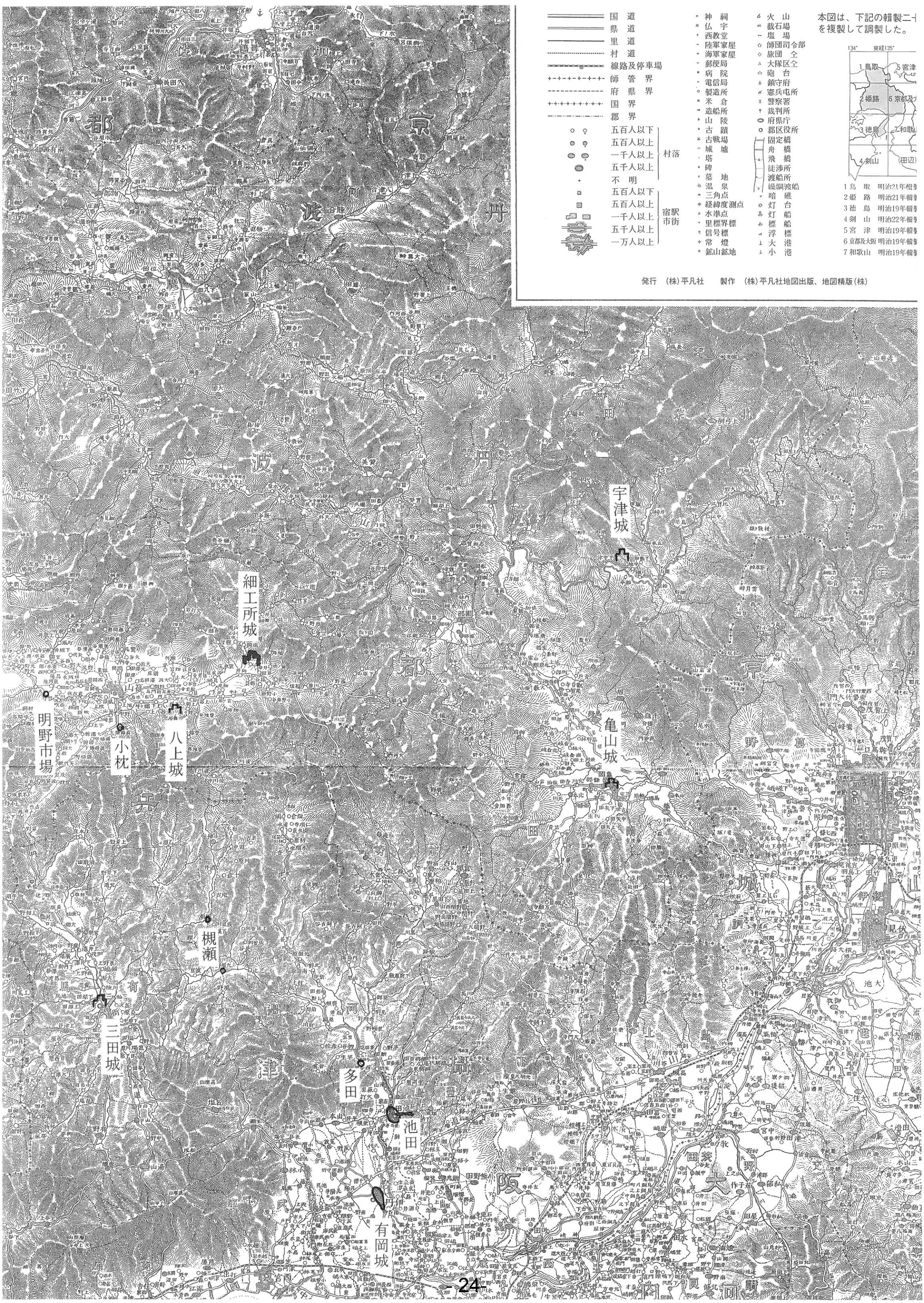
⑰【明智光秀書状】（小畠文書）

昨日酉刻の御状、今朝辰刻京都に至りて到来、披見候。飛脚油断無く、祝着に候。
一、摂州の儀、大略相破るべく候。その意を得られ、そこもと普請以下油断有るまじく候。
（一ヵ条略）
一、摂津守（荒木村重）逆心に極まり候はば、かの国に上様御座所を拵え候か。（後略）
一、所々付城等、何れも堅固に覚悟有るべく候。荒平太（荒木重堅）の類、山越えに自然来候とも、指したる義これ有るべからず候。何の取出成りとも、もし取り詰め候はば一騎懸け聞かせ候。まず弥平治（明智秀満）をば亀山へ越し候。我々も一両日中に越すべく候。
（一ヵ条略）
（天正六年）　　惟日
十一月朔日　　光秀（花押）
越前守殿（小畠永明）　御返報

⑱【小早川隆景書状案】（毛利家文書）

態と御意を得候。上辺の趣、この間中方々より申し来たり候といえども、直左右到来無く候間、申し上げず候。然らば夜前岡山より実左右候条、富平・下刑法（下間刑部法眼）注進状、まず御披見に入れ候。
一、去る六日、木津に至り諸警固乗り入れ、大坂衆と申し談じ候。敵船も罷り出で候といえども、舟軍等勿論こなた勝利を得候。
一、荒木摂津守ならびに同名志摩守（元清）・河原林越後守、実子を人質として渡し置き、大坂付城悉く破却せしめ、血判の神文指し出し、無二に公儀に対し忠儀致すべきの覚悟比類無きの由、到来候。まことに御大慶これに過ぐべからず候。
一、大和・河内・和泉、調略数多これ在るの条、色立ち次第申し下すべきの由候。
一、信長事、京都に至り物数二万ばかりにて罷り上られ、摂州へ相動くべきの由候。然る間、荒木端城、井原木（茨木）を始めとして堅固に覚悟せしめ、大坂と申し談じ、雑賀衆已下相加わり、諸城手強く覚悟致すの由候。
一、播州の儀、御着の小寺（政職）、姫路、野間有田、志潟（方）、三木、宇野（祐清）へ申し合わせ、悉く一味仕り候。龍野（赤松広英）・置塩（赤松則房）、直家（宇喜多）存分候て許容致さず候。一両日に龍野に至り備（備前）・作（美作）相催し、宇喜泉（直家）罷り出で候。
一、荒木・大坂・三木三家申し合わせ、手先緩み無く候条、追々御後詰め肝要たるべきの由申し候。
一、御出勢の御評議肝要候。先ず以て覚え候あいだ、御分国早々御触れを廻され、御出張の御催し専一に候。御警固等も追々五艘三艘も差し上げらるべき事肝心の由申し下し候。何篇、この刻御由断無く引き立てられ、この御弓矢一とおりの御隙明けられ候様、御短束この時候。重畳申し上ぐべく候。恐惶謹言。
（天正六年）
霜月十四日　　隆景
粟蔵（粟屋元種）　御申


出石城
八木城下
高田町
梁瀬市場
竹田
三里坂越
小倉町
芦田
氷上城
黒井城
国領城
金山越
追入
清水寺
志方城
御着城
神吉城
高砂城
野口城
三木城
淡河城
氷ノ山越
英賀


国道
県道
里道
村道
線路及停車場
師管界
府県界
国界
郡界
五百人以下
五百人以上
一千人以上
五千人以上
不明
村落
五百人以下
五百人以上
一千人以上
五千人以上
一万人以上
宿駅市街
神祠
仏宇
西教堂
陸軍家屋
海軍家屋
郵便局
病院
電信局
製造所
米倉
造船所
山陵
古蹟
古戦場
城墟
塔
碑
墓地
温泉
三角点
経緯度測点
水準点
里標界標
信号標
常燈
鉱山鉱地
火山
截石場
塩場
師団司令部
旅団
大隊区
砲台
鎮守府
憲兵屯所
警察署
裁判所
府県庁
郡区役所
固定橋
舟橋
飛橋
徒渉所
渡船所
繰綱渡船
暗礁
灯台
灯船
標船
浮標
大港
小港
本図は、下記の輯製二十
を複製して調製した。
134°
東経135°
1 鳥取
5 宮津
2 姫路
6 京都及大
3 徳島
7 和歌山
4 剣山
(田辺)
1 鳥取 明治21年輯製
2 姫路 明治21年輯製
3 徳島 明治19年輯製
4 剣山 明治22年輯製
5 宮津 明治19年輯製
6 京都及大阪 明治19年輯製
7 和歌山 明治19年輯製
発行 (株)平凡社 製作 (株)平凡社地図出版、地図精版(株)
宇津城
細工所城
亀山城
八上城
小枕
明野市場
槻瀬
三田城
多田
池田
有岡城

第２回
大坂の陣と真田丸
― 丹波の武将たちの活躍 ―

（株）歴史と文化の研究所代表取締役
歴史学者　渡邊　大門

はじめに

本日の話のタイトルは「大坂の陣と真田丸ー丹波の武将たちの活躍ー」。今、ちょうど大河ドラマで放映している真田信繁・昌幸親子の活躍、そしてその時代の丹波の武将たちがどのような働きをしていたのかについて話を進めていきたい。

まず、真田信繁について話すと、昔から「真田信繁」のことを「真田幸村」と呼んでいた。信繁というと、誰のことかわからない方が多いと思う。実は、幸村というのが間違いであるというのは、４０～５０年前からわかっていた。

講談や軍記物語にも出てくる幸村の名前は、影響が大きかったのだろうと思われる。また、真田家の系図や『寛政重修諸家譜』という江戸時代に各藩から提出された系図にも、幸村の名が出てきていたことから、幸村の名前が一人歩きしたものと思われる。しかし、自らが書いた手紙に「幸村」と署名した物はない。すべて「信繁」とある。ところが、出版物などでも信繁では誰のことかわからないので売れない可能性が高い。そうしたことから幸村という名が定着してきたのだろうが、今回の大河ドラマでは信繁で放送しているので、今後は信繁の名が定着するだろう（以下、信繁で表記を統一）。

ところで今回の大河ドラマの脚本は三谷幸喜氏だが、これまでの武将・信繁のイメージとはずいぶん違ったキャラクターの信繁で、ちょっとおふざけが過ぎないかとも思う。

私は今、毎週、洋泉社という出版社のホームページに「真田丸」の批評を記事として書いている。結構厳しい批評をするのだが、やはり、熱狂的な信繁ファンからも、おふざけが過ぎるとの声もよく聞く。「おもしろい、おもしろくない」は、それぞれの自由だが・・・。この大河ドラマの前半部分で信繁が秀吉あるいは三成の側に仕えていて、軍議などの際に「ああしたらよい、こうすべき」などとアドバイスをしている場面がある。私が住んでいるマンションの隣の方に「あのようなことは本当ですか」とよく聞かれるが、実は「うそ」だと言っている。そう言うと怒る方がいるが、信繁に関してわかっているのは、次回の大河ドラマ（第３８回）くらいからである。つまり、信繁の史料は九度山に行った頃から多くなるが、手紙はわずか１０通くらいしか残っていない。ましてや真田十勇士などといったものは事実ではない。

大河ドラマの効用としては、たくさん本が出て研究が進むことがある。私も４冊出版したが、書店に行くといっぱい真田丸関係の本が積まれていて、「まずいな」と思っていたら案の定売れなかった（苦笑）。共倒れ現象である。

確かに大河ドラマが放映されている時は、関係地域の経済は潤う。大河ドラマ「官兵衛」が放映されていた時は、姫路も賑わった。「官兵衛が歩いた道」、「官兵衛まんじゅう」、「官兵衛定食」などいろいろな取組がなされた。さぞや儲かったことだろう。しかし、普通は放映終了とともに誰も来なくなる。今、勘兵衛などとは誰も言わない。この辺りでいうと、春日の局がそうである。当時は幟もたくさん立っていたが、今では誰も来ない。

先日７月に姫路に行ったら別の人物の幟が立っている。次はこれだという。誰だかわかるだろうか。「千姫」。「千姫と本多忠刻」だそうだ。これでもう一度大河ドラマをやってほしいというわけである。「官兵衛は？」と新聞記者に聞くと、「今頃官兵衛などと言っているのはあなたくらいですよ」と言われた。ちょっと冗談めかして言ってしまったが、本当にそういった状況になりやすいのは事実である。

次に丹波の土地柄についてちょっとふれておきたい。

中世つまり鎌倉時代以降の丹波は、重要な地域であった。鎌倉幕府の執権である北条一族が代々丹波守護を務めていた。丹波は京都が近くて山陰にぬける道筋にあり、交通の便がよい。公家、天皇、寺社の荘園も多く点在していて、京都の経済基盤としての一角を占めていた。

その後、南北町時代には山名氏の山名時氏、氏清が守護を務めていた。山名氏といえば幕府の重鎮である。当時の将軍の側近といえば、三管四職である。将軍を補佐する管領は、斯波、細川、畠山の三家に限られていた。また、侍所の長官である四職は、山名、赤松、一色、京極（土岐氏を加えることもある）といった家柄が職務を担っていた。つまり二流三流の大名ではない、幕府の重鎮が丹波を治めていたわけである。

明徳３年の明徳の乱で１１ヵ国守護の山名氏が没落したため、代わりに管領の細川氏が入ってきた。そのくらい丹波は重要地域とみなされており、その配下と

して活躍したのが波多野氏、荻野氏などの諸氏である。

元々、丹波というのは、京都と兵庫にまたがった地域で研究が難しい地域でもある。同じ兵庫県であっても、私のような三木市出身の人間から言うと、丹波は福知山などとはちょっと違う感じがする。反対に京都から兵庫丹波を見ると、またどうかな、と思われるのではないか。このように二つにまたがった地域であるために複雑で研究が難しい部分もあるが、地域的には丹波といえば兵庫と京都の両方をさす。また、兵庫県には『兵庫県史』があり、史料が広く公開されているが、京都は乏しいので史料を探すのに苦労する。

戦国期には、八上城の波多野氏が力をつけていく。最初、波多野氏は信長と友好的だったが。後半は離反したため天正７年に八上城は落城し、以降丹波の支配者はめまぐるしく替わっていく。その間の状況については史料が乏しく、詳しい事がわかりづらい。

１　関ヶ原合戦について

関ヶ原合戦は、午前中で終わった短い戦いである。俗説も数多くあるが、合戦直前までの多数派工作の結果で、戦う前に決着がついていたともいえる。

小早川秀秋は松尾山に陣取っていたが動かず、両軍様子見の中、業を煮やした家康が鉄砲を撃ち、「ただちに西軍に攻めかかれ」と合図したので慌てて小早川が西軍を攻撃したといわれている。これも「うそ」である。これは「問鉄砲」という江戸時代に創作された逸話であり、間違いである。

戦いは９月１５日であったが、最近の研究ではすでに８月から手紙により東軍から「味方になれ」と秀秋に要請していた。前日には起請文を交わしており、当日、秀秋は早朝から西軍を攻撃している。白峰旬さんも論文にも書かれているように、こちらの方が事実である。

司馬遼太郎氏が書いているのは小説であり、おもしろいけれども事実ではない。後に明治時代にドイツから来たメッケルという軍人に関ヶ原の戦いの布陣図を見せたところ、「明らかに西軍の勝ち」と言ったという話が小説の中に出てくる。この話も司馬遼太郎氏の創作であり、白峰旬さんがいろいろと史料を集めて調べたが、そのような根拠となるような史料はなかった。もちろんメッケルというドイツ軍人は、実在の人物ではあるのだが・・・。

この関ヶ原合戦にはいろいろ謎がある。このドラマにも「直江状」というのが出てくる。直江兼続が家康配下の政僧・西笑承兌に送った手紙がある。家康に対して挑戦的かつ過激な文言の内容である。しかしこれはあくまでも写しであり、原本は残ってない。非常に美文であり、江戸時代に手を加えたような後世の影響が窺える物である。本物ではないが元々こういう物があったのだという人もいるが、私はこれも「うそ」だと思う。

「小山評定」はあったのかということも問題となっている。家康が会津征伐に向かう途上で、石田三成決起の報に接して小山で軍議を開いた。すると、即座に福島正則が「家康様に従います」と言ったので、次々に従う者が出てきたという話が残っている。これも真偽のほどは疑わしい。このように関ヶ原合戦にまつわる逸話はいろいろある。

２　丹後田辺城攻めについて

丹波の大名は関ヶ原合戦の本戦には参加しておらず、丹後田辺の細川幽斎を攻めている。この幽斎というのは間違いで、実は「玄旨」が正しいのだが、ここでは幽斎とする。幽斎が西軍に属さない態度を鮮明にしたため、京都府舞鶴市の丹後田辺城に慶長５年７月１９日から９月６日まで籠城。最終的には降参する。幽斎は古今伝授の継承者であり、『古今和歌集』の解釈・注釈ができる第一人者である。当時は『古今集』などは一子相伝で伝授され、基本的に一対一で伝える秘伝であった。幽斎の死を惜しんだ後陽成天皇は、仲介に入ろうとする。

丹波・但馬の諸大名、小野木重次、前田重勝、織田信包、谷衞友、藤掛永勝、川勝秀氏の率いる約一万五千の軍勢が田辺城攻めへ急行している。伊勢方面、丹後の二つの方面を同時に攻撃しているが、丹波勢は丹後に近いという理由から但馬勢とともに田辺攻めを命じられたのだろう。しかし、実のところ、丹波・但馬の大名のうち「何人が西軍に心を寄せていたのか」といわれている。

丹後田辺城を攻撃した丹波の武将・小野木重次は、もともと秀吉の家人で、本能寺の変以後、山城の淀城主、そして文禄３年丹波福知山城主になる。ところが関ヶ原合戦のあと、福知山城に戻るが細川忠興の軍勢に取り囲まれ、落城とともに自刃する。たぶん西軍の方にだいぶん肩入れをしていたのではないか。

そして御当地には織田信包という人がいる。この講座の４回目にその子孫の方がいらっしゃると聞いているが、この信包という人は織田信長の弟で、伊勢・上野城主であったが、ずっと信長に従って各地を転戦している。本能寺の変以後は秀吉に属し、伊勢の津城主になる。その後、小田原攻めの時に秀吉の機嫌を損ね、領地を没収されたので、「老犬斎」と名乗り出家する。いったん失脚するが、そののち許されて、お伽衆、つまり武辺咄の相手もしくは和歌・連歌の相手を務める

ことになる。慶長３年に秀吉が亡くなった後、柏原に３万６０００石を与えられ、旧領安堵となっている。

そのほかに森衞友であるが、三木城攻めの時に父親が亡くなっている。私は三木市出身なので、多少土地勘があるが、三木市の平田小学校の裏山に谷大膳の墓がある。大村坂の戦いという激戦があり、そこで亡くなっている。三木城攻めの功により６２００石が加増され、文禄３年以降、谷家は京都の綾部１万６０００石を拝領している。彼も織田信包達とともに西軍に属し、丹後田辺城を攻撃しているのだが、早くから東軍に寝返る意志を示していたためであろう、本領安堵となっている。

余談ながら、谷家に伝わる古文書の中に信長や秀吉の書いた文書が２～３入っているが、すべて偽物である。信長や秀吉の書いたとされる朱印状などを写真で確認すると、みんな同じ筆跡である。また、日付が天正６年や７年となっていて、この時期に秀吉が朱印を押すわけがない。したがって偽物だとわかる。

藤掛永勝は織田氏の一族であり、信長の配下で小谷城攻めの時に、お市の方や浅井三姉妹を救出したとされる。天正７年、信長の四男秀勝（のちに秀吉の養子となる）の補佐役になり、信長の死後、氷上郡に６０００石を与えられている。この人の史料はほとんど残っておらず、天正１３年に秀勝が亡くなった後、河鹿郡で１万３０００石、その後１万５０００石を与えられている。最初は大坂城に詰めていたが、田辺城攻めにも参加したため、のちに６０００石まで減らされるが、存続した武将の一人である。

川勝秀氏という人がいる。京都の右京区に所領していて、信長に従い紀州征伐に参陣する。その後、秀吉の馬廻つまり親衛隊のようなものを務め、河鹿郡３５００石、のちに１万石を拝領している。関ヶ原合戦の時には、田辺城攻めに加わり、家康の赦免を受けて福知山城を攻撃。そのおかげで厳しい改易を免れて最後の黒井城主となった。彼も助かった一人である。

関ヶ原合戦の後には、新しい城主が誕生している。福知山城主には有馬豊氏、亀山城主には岡部長盛、八上城主には前田重勝が配置される。この前田重勝については昨年の講座で少し触れたが、狂乱のあげく家臣を無理矢理切腹に追い込み、改易処分を受けている。

また、丹波には、古くなった山城の八上城から平城の篠山に移った松平康重、柏原には織田信包、山家には谷衞友が配置された。

３　関ヶ原合戦と真田一族について

真田氏は現在の上田市真田町に本拠を構えており、長谷寺が真田家の菩提寺である。

真田氏については謎が多い。系図の上では清和天皇を先祖としているが、どこまでが正しいのかわからない。１５世紀半ばから史料に出てくる。ここに示している系図もあるが、実質的な祖というのは真田幸綱で、ドラマの草刈正雄が扮する昌幸の父に当たる人である。幸隆といわれてきたが、正しくは幸綱である。

信繁の父である昌幸は幸綱の三男として生まれ、武田氏の配下である武藤家に養子に入り武藤を名乗っていた頃もあった。天正３年の長篠の戦いで上の兄の二人が亡くなったために、繰り上げで真田家の当主になった。天正１０年以降、北条、上杉、徳川の強豪の大名を相手に生き残り策を探り、天正１３年の第一次上田合戦で家康に勝利し、天正１８年の北条氏滅亡後は秀吉のもとで活躍した。人間としては表裏があり、なかなかの策略家との評価がある。

真偽のほどは定かではないが、一説によると信繁が長男であるという説もある。しかし、これは信幸の母親の方が信繁の母親より身分が上ということから、信繁が家督を継ぐことを憚ったのではないか、と推測する向きもある。信繁については記録等もあまり残っていないので本当のことはよくわからない。発給文書も十数通しか残っておらず、今ひとつよくわからない人物といえる。

ドラマでは上田城合戦についてはあっさりと流していたが、関ヶ原合戦前夜の９月２日～１１日まで親子で徳川勢を食い止めた。さまざまな奇策を駆使して徳川軍を苦しめたので、徳川方の『三河物語』などにもずいぶん苦戦した様子が述べられている。後世に編纂された徳川方の史料であるにもかかわらず、苦戦したと正直に記述されるというのはかなり信憑性が高い。その後、反抗した昌幸・信繁親子に対して、長男の信幸が自分の恩賞を返上して助命嘆願したため、昌幸・信繁親子は死罪を免れて高野山・九度山に逼塞することになった。

しかし、この高野山というところは、豊臣秀次が切腹を命じられる前に訪れていたり、そのほかでも高野山を訪れた後に亡くなっている人が多く、大変厳しい状況であることを親子共々感じたであろう。私も昔訪れたことがあるが、大阪と奈良の県境にあり、田舎であるが、今は真田ミュージアムなどができ、大変な賑わいと聞いている。毎年、真田まつりが行われており、武者行列なども行われている。

真田紐は昌幸・信繁親子が作り、真田十勇士に命じて各地に行商に廻らせたという逸話がある。また、単に行商に廻らせるだけでなく、各地でいろんな情報を収集させていたという話もあるがこれも怪しい。そもそも真田十勇士などは存在しないし、本当に親子が真

田紐を作っていたかどうかもわからない。一番ひどいのは、真田の抜け穴が大坂城まで繋がっていて、信繁が戦場まで駆けつけていたというものである。

戦後、地元の教育委員会が調べたところ、実際はこの穴は古墳時代後期の古墳であることが判明した。今は真田古墳と書いてあるらしい。常識的に考えれば、九度山から大坂城まで穴が掘れるわけがないが、大阪では各地で真田の抜け穴という話が伝わっている。実際、家康が大坂の陣で甲斐の金山を掘っていた金掘師に命じて、戦場で穴を掘らせたという事があったが、結局は途中で止めたらしい。

九度山時代の昌幸は金に困り、かなり困窮していたようである。講談などでは打倒家康をめざし、毎夜ごと親子で策を練っていたと演じられていることが多いが、これは軍記物に書かれていることであって、誇張が甚だしい。

実際、昌幸は人を介して家康に赦免を請うており、年齢的なことや慣れない土地での苦労から望郷の念が募っていたという。これは信繁も同様で髪の毛が白くなり、歯が抜けてしまう状態であったという。ドラマでどういうふうに演じるか知らないが、真相は打倒家康どころか、一刻も早く上田に帰りたい一心であったようだ。

元々、信繁は焼酎が好きで、手紙の中で焼酎を壺に入れ、こぼれないようにちゃんとふたをして送ってくれるように頼んでいる。その焼酎を飲みながら連歌にふけるのが楽しみだったようである。

ところで、そもそも家康は真田をどの程度憎んでいたのだろうか。考えてみれば、関八州、今で言えば南関東一円を治める家康からみて、関ヶ原合戦の時点での真田家１０数万石などそれほどの相手ではなかったはずである。九度山に付き従った従者は１６名であり、たったこれだけの供回りで打倒家康など考えられない。

慶長１９年、信繁は秀頼の勧誘に応じて九度山を出て大坂城に入る決意をする。九度山脱出に関しては荒唐無稽な話が多くて信用できない事が多い。村人に酒を飲ませて、寝込んだところを密かに脱出したなどと言われているが、そんなことはないであろう。

４　天下普請と丹波の大名の配置

ふたたび丹波の武将に話をもどすと、関ヶ原合戦のあと、征夷大将軍になった家康は各地に城を築くが、その工事を各大名たちに手伝わせる、いわゆる「お手伝い普請」を命じる。そのことによって自分たちの力を誇示し、他の大名たちを威圧する側面があった。慶長１２年、駿河城の改築を命じる。そして家康は駿府に移り家忠は江戸にいる。「大御所時代」いわゆる二頭体制が始まる。

丹波においても篠山城を築き、亀山城を配置し、大坂城を取り囲む形にするなど、豊臣方を牽制する意図を持って造られている。これを見てもいかに丹波が戦略的に重要視されていた地域であるかがわかる。

丹波においては、慶長１５年に岡部長盛が亀山城主になると、藤堂高虎に担当させて築かせている。これは現在では大本教の所有物になっているようだが、石垣もしっかりとした造りである。明治５年まで天守閣も残っていて、豊臣政権下から戦に備えて造られた城であることがわかる。

篠山城築城以前から八上城があったが、時代とともに山城より平城ということで重要拠点としての篠山城が築かれた。慶長１０年春頃から築城開始。築城名人の藤堂高虎に命じて造らせている。この城は天守閣や櫓はもはや不要とし、より実践的な造りにした。大書院などを設けていて、公式行事や藩主の住まいとしている。絵図が残っているが、敵の侵攻を阻止するために巧妙に防御ゾーンを設けたり、身分によって城下町の地割りを行っている。これはどこの城下町でもよく行われているものであるが、城を中心に武家そして商工業者、そのまわりに農民を配置している。町家は八上城下から移し、経済の発展と戦争に備えた防御構造の城下町になっている。

５　大坂の陣と丹波の大名

慶長１９年になると暗雲が漂い始める。関ヶ原合戦に負けたからといって急激に豊臣方の勢いが衰えたわけではない。官職からいうと関白である秀頼の方が家康より上位にある。

しかし、慶長８年に家康が征夷大将軍になり、幕府を開いた頃から形勢が逆転し始める。最近の研究では最初から徳川家が豊臣家を滅ぼそうと思っていたかというと、そうではなかったという見解が有力になってきており、私もそう思う。ただ、豊臣家というのは、他の大名のように大坂から別の場所に移封するようなわけにはいかない。豊臣家は特別な存在であり、徳川家のコントロール下には入らない存在であった。

そうした時に起こったのが方広寺の鐘銘事件である。豊臣家を滅ぼす事が前提と言われているがそうではないであろう。元々、方広寺は豊臣家と縁の深い寺院であり、鐘を造営するときに入れた「国家安康」「君臣豊楽」という文言が問題となる。「『国家安康』とは家康の諱つまり名前を二つに裂いて呪って、『君臣豊楽』といって豊臣家の安泰を祈念しているのがけしからん」というものである。

これは本来、長い漢詩文で四段ずっと続いているも

のであり、その中の一節を取り出して問題にしたわけである。この方広寺の鐘銘事件で林羅山と金地院崇伝が関わっていたといわれるのだが、最近では違っているのではないかと言われている。

この「国家安康」と「君臣豊楽」を考案したのは、文英清韓である。あまり知られていない人物だが、南禅寺の住持で非常に学問に優れた高僧である。これだけの漢詩文を依頼するには、相当の高僧でなければならないはずである。ちなみに、この人は後に大坂方に与して、大坂城に籠城している。その後、五山の僧が家康から「国家安康、君臣豊楽についてどう思うか」と問われる。

それに対する答えは「諱つまり名前を二つに書き分けるのは避けるべきエチケットであり、好ましい事ではない」というものだった。決して家康を呪うなどと言っていないのだが、それを逆手にとるわけである。

これに対して文英清韓は、「『国家安康』とは、つまり隠し題である。縁語とも言うが、徳川家と豊臣家の繁栄を祈って、日本国の平和を祈る内容である。悪意があったわけではない。助けてくれたら生前死後の大幸になりましょう」と謝罪している。

ところが家康は文英清韓の経歴に目を向ける。紫衣の許可を得ているのかなどと、いろいろと都合の悪いことはないかなどと探ったが、実際には何も無かった。その他にもいろいろある。たとえば、棟札に棟梁の名前を書いていなかった、などと因縁をつけようとするのだが、これは大工の中井正清の手落ちであった、ということがわかる。

次に、「右僕射」という文言に目をつける。たとえば、水戸黄門という場合の黄門とは中納言の唐名であるが、この「右僕射」というのは右大臣の唐名である。林羅山という人は「『右僕射』とは家康を射る」などと解釈し、「けしからん」と言うわけである。

また、崇伝が背後にいたのではないかと言われているが、崇伝が積極的に関与したという形跡はない。林羅山にもここまでの影響力はなかったのではないか。林羅山というのは徳川家の儒学指導者であるが、あまりいい話はない。方広寺鐘銘事件は家康の謀略説と言われているが、実際には違うのではないか。

元々の原因としては、鐘ができたときの供養の日をいつにするか、が問題になった。また、天台宗と真言宗の間でどちらが上座になるか、むしろそっちの方で揉めたようである。しかし、実際には誤った謀略説の方が伝わってしまっている。

その間、片桐且元が奔走して解決にあたったが、うまくいかず大坂の陣が始まった。片桐且元というのは、豊臣家と徳川家両方に仕え、豊臣家の付家老のような形で両者の間を保つ役割を果たしていた。ポルトガルに伝わる史料によると、実は且元と家康が結託して鐘銘事件を起こしたとも書かれている。

結局、大坂方にはほとんどの大名が味方につかず、後藤又兵衛などの有力武将の名が見られるのはまだいい方で、仕官に困っていた牢人達に金を与えて傭兵として雇う状態であったために、果たしてどこまで豊臣家のために戦うかというと疑問であった。

長宗我部盛親や千石秀範などは、京で寺子屋を開いて再起を図っていた。信繁には信濃一国を与える、長宗我部盛親は土佐一国を与えるなどと言われている。いざ戦いとなれば、全国の大名相手に戦うことになるので、一国与えるくらいどうということはない。それくらいの条件を与えてでも、味方になってもらおうということである。

大坂冬の陣において豊臣方の作戦が籠城派と積極派に分かれて揉めたりしたと、軍記物で書かれているが実際がどうかはわからない。大野治長の無能ぶりも強調されているが、実際はそうではなかろう。

一方、丹波の武将達の活躍については、谷衞友が１１月２５日に家康に謁見し、その後、秀忠の率いる酒井忠世の軍勢に混じって戦いに参加している。ただ、誰と戦ったかなどという姿は、冬の陣においては浮かび上がってこない。

また、織田信包については戦いの前に亡くなっている。次男の信則が長男と家督相続で争っていて、自分の事で精一杯で大坂冬の陣どころではない。それゆえ出陣していない。

岡部長盛は天満口に陣を構えた。また、松平康重は最初、別府川付近に陣を敷いていたが、のちに天満口の方に移動してきている。その配下の者は家康より陣羽織を拝領している。この二人については記録が残っているので多少はわかる。康重や長盛そして有馬豊氏など丹波の大名達は天満口付近に陣を敷いている。ここに仕寄といって付城を造り、そして橋などを壊したりしている。康重配下の者が敵の小屋を焼き払って番の者を打ち果たした、という記録が残っている。冬の陣はすぐに終わってしまったので、この程度の戦いの記録しか残っていないが、夏の陣になれば三人共もう少し活躍している。

６　大坂の陣と真田丸の攻防

東京で地下鉄に乗っているとわかるが、江戸城の石垣などを見ても惣構えは相当広く、当時の大坂城の惣構えも広範囲である。時代とともに城ばかりが中心にあっても仕方ないので、徐々に縮小傾向になったが、大坂の陣の頃には真田丸を需要地点において広い範囲

で展開しているのがわかる。真田丸という城は急遽作られたと言われているが、残った絵図からしっかりとした城であることがわかる。

真田丸の攻防について述べると、井伊、前田は真田丸に対して位置していた。しかし、丹波の武将達はどこに位置していたかというと、反対側にいたために、冬の陣に関してはあまり活躍していない。

一方で、信繁が前田方を盛んに挑発して隙に乗じて勝利したと言われているが、挑発するのにはかなりのリスクが伴うのでこれはちょっと考えにくい。これも信繁という存在を際立たせるために、大げさに誇張された表現ではないか。

実は、この戦いで井伊、前田の兵卒は、手柄を立てるのにかなり焦っていたのではないかと言われている。この戦いで、大名たちは一生懸命戦っても、よその大名の領地を分け与えてもらえないので、あまりやる気がない。それに比べれば、配下の兵卒達は何とか手柄を立てて恩賞を得るべく、必死になって戦っている。

しかし、こうした戦場においては、軍令で先駆けが禁止されている。たとえば戦いの布陣では備えといって一列目二列目は敵に一番近く、三列目はその後ろになる。ところが、その三番目が先駆けて攻めようとすると、布陣がめちゃくちゃになり混乱が生じてしまう。そのために先駆けを禁止しているにもかかわらず、戦いの当日、前田勢が攻撃開始の合図を待たずに攻撃したため、負けじと井伊氏の軍勢が攻め入った。それを冷静に見ていた真田勢が待ち構えていて、掘などにうずくまっていた敵に上から鉄砲で打ちかけて勝利したというのが実態である。したがって、何も奇策を講じて勝利したわけではないのである。

こうしたことがなぜわかったかというと、前田家・井伊家が後日調査をしている。先ほども言ったように前田家・井伊家などの大名当主は、この戦いに勝ったからといって恩賞が与えられるわけではない。しかし、家臣達には恩賞を与える必要がある。ごく限られた恩賞しか与えられないので、戦果について証人を立てて報告させ、精査するという過程においてなぜ負けたのかが明らかになったわけである。

家康・秀忠は敗北したので焦るが、この戦いによって和睦の機運が高まってくる。この間にいろいろと交渉があるのだが、大砲を大坂城内に撃ち込んで淀君が震え上がったというような逸話も伝わっている。また、信繁の活躍には諸説あり、怪しい話が多いが、この戦いを勝利に導いたのは間違いない。

やがて和睦交渉が始まるのだが、二の丸、三の丸の掘を埋めたり、惣構えを取り壊したり、淀殿の代わりに織田有楽や大野治長の子息を江戸に送る事で和睦が成立する。

ここで徳川方が一方的に堀を埋めたという話があるが、それは元々の合意事項である。豊臣方にも埋め立て工事の分担があったのだが、徳川方がお節介にも豊臣方の分の二の丸まで埋めたことに対して抗議した、というのが真相である。徳川方の策略によって埋め立てられたわけではない。翌年、慶長２０年に工事は終わるが、大名たちの書状を見ると、これで戦いは終わると思って国元へ帰っているようである。したがって後に家康が堀を埋め、城を丸裸にして攻略したという説は疑わしい。

しかし、非常に大きな面積の堀を埋められたり、二の丸、三の丸が取り壊されたりしたことで、より真っ平らになり、さらに真田丸が取り壊されたために大坂城の防御性は著しく低下した事は事実である。ちなみに、取り壊された真田丸の廃材を秀忠が取ろうと思っていたところが、信繁に取られて機嫌を損なったという話も残っている。

また、木村重成が和睦交渉にあたったのだが、血判が薄いと言って押し直させたという逸話が伝わっている。しかし、家康の場合は起請文などには花押か印を押していることが多いので、本当に指を切って血判を押したのかどうか疑問である。

慶長２０年春頃から、大坂方に不穏な動きがみられるようになる。牢人衆が集められ、物資がどんどん大坂城に運び込まれるようになる。そうした動きに対して、家康から秀頼に対して、大和あるいは和泉に移るようにとか、牢人達を大坂城から退去させるように説得するがいずれも拒否する。こうして、大坂夏の陣が始まるわけである。

そのような状況下で、牢人達の心情をうかがわせる手紙が残っている。たとえば、信繁の場合は「いつまで平和が続くのか」「息子の大助に武士らしい事を何もさせていなかったので非常に不憫だ」「もし戦いが始まれば息の続く限り戦う」などとともに、和睦か戦争継続か意見がなかなかまとまらない困難さが吐露されていて、悲壮感が漂う内容である

そして、大坂城の南の方で戦いが展開されるが、徳川方は１５万の大軍で包囲し、豊臣方は大坂城に立て籠もる事は難しくなったので、積極的に打って出る作戦を取る。４月２６日以降、大坂方は大和郡山、堺・岸和田方面を転戦するが、道明寺の戦いで後藤又兵衛、薄田兼相など有力武将が相次いで戦死する。５月６日八尾・若江の戦いでは木村重成が敗れて亡くなり、長宗我部盛親は戦場離脱する。こうして豊臣方はどんどん窮地に追い込まれる。５月７日に天王寺・岡山の戦いがあって、これが最後の戦いになる。このときに信

繁は息子の大助を大坂城に返そうとするが、最初、大助は拒否したという逸話が残っている。この間、信繁は何回も家康の本陣に攻め入っているが、ついに討ち果たすことができなかった。その直後、大坂城は落城し、豊臣秀頼・淀殿母子は切腹した。こうして、２年にわたった大坂の陣は終結した。

　その後、大きな戦争は起こることなく、平和な時代が到来した。以後、丹波の大名たちは、それぞれの領国支配の進展に腐心するのである。

【第２回 渡邊 大門 氏 資料】

大坂の陣と真田丸―丹波の武将たちの活躍―

日　時：2016 年 9 月 24 日（土）13：30～
場　所：丹波の森公苑
講　師：渡邊　大門

1　関ヶ原合戦と丹波の大名　―丹後田辺城の攻防戦―
2　関ヶ原合戦と真田一族　―第２次上田城合戦―
3　天下普請と丹波の大名の配置
4　大坂の陣と丹波の大名
5　大坂の陣と真田丸の攻防

1　はじめに

・関ヶ原合戦以降から説き起こして、真田家の動向と搦めつつ、丹波の武将の活躍を取り上げる。
・関ヶ原合戦のさまざまな謎を取り上げて考える。
　→　丹波の大名は、丹後田辺城攻撃に参加した。
・九度山時代の真田昌幸・信繁父子の苦難の生活を検討する。
・関ヶ原合戦後の丹波の大名配置とその意義について検証する。
・大坂の陣における真田氏および丹波の武将の活躍を取り上げる。

2　主な丹波の大名

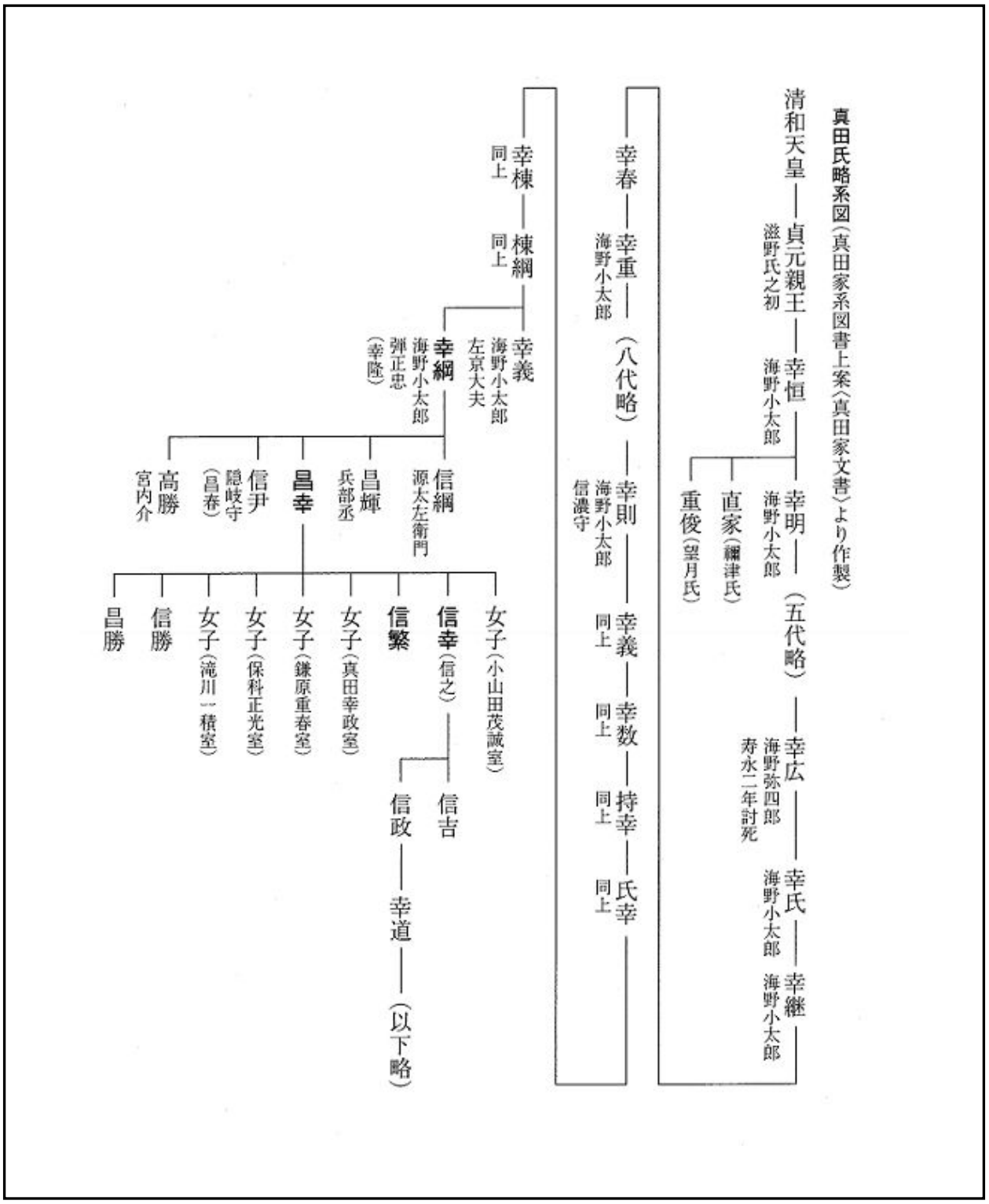
①関ヶ原合戦時

＊福知山城主・小野木重勝（1563～1600）　→　西軍に与して自刃。
＊亀山城主・前田玄以（1582～1621）　→　西軍に与したが安堵。
＊柏原・織田信包（1543?～1614）　→　西軍に与したが安堵。
＊山家・谷衛友（1563～1628）　→　西軍に与したが安堵。
＊上林・藤掛永勝（1557～1617）　→　西軍に与したが減封。
＊静原・川勝秀氏（1555～1607）　→　西軍に与したが減封。

②関ヶ原合戦後～大坂の陣時

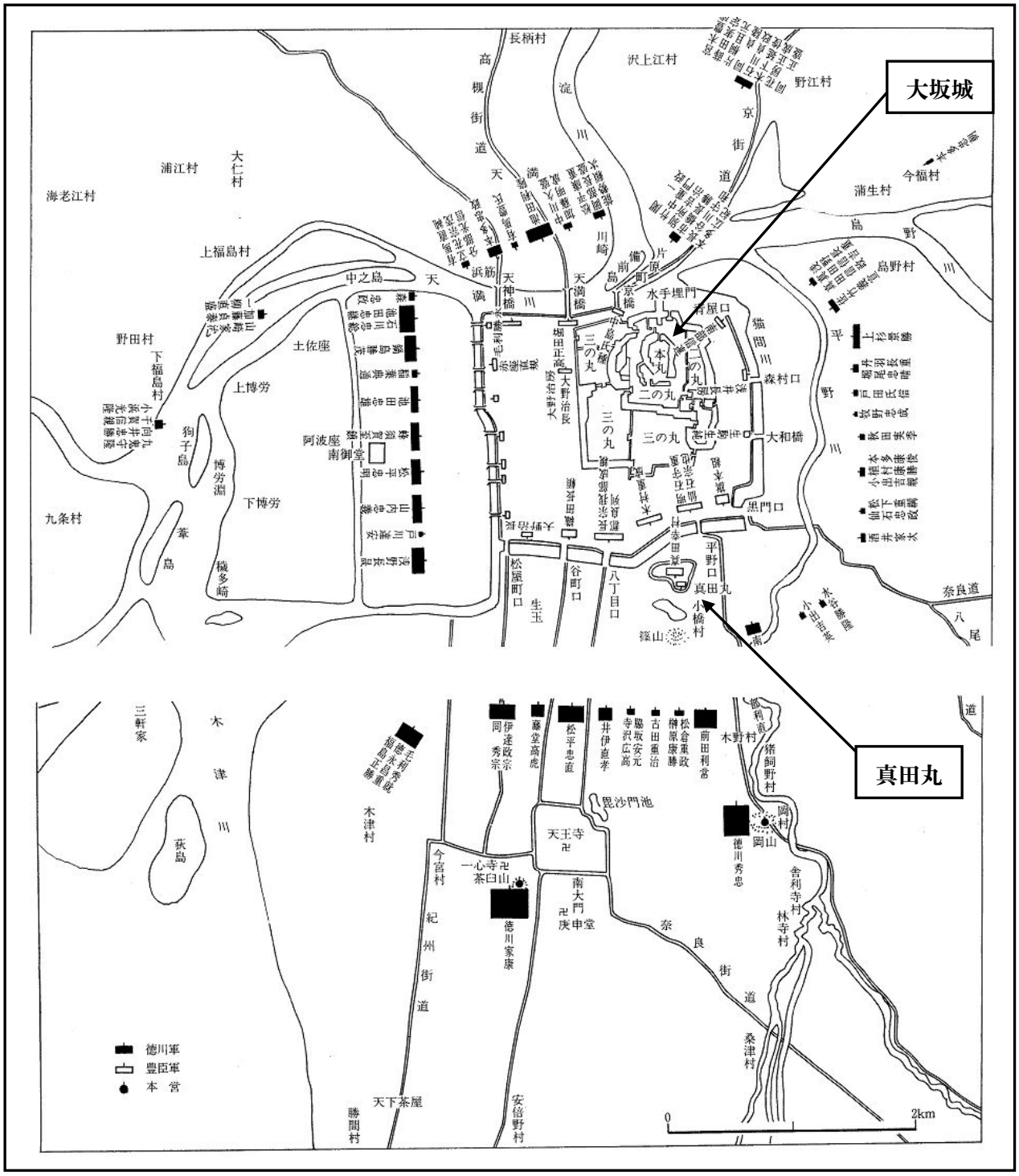
＊福知山城主・有馬豊氏（1569～1642）
＊亀山城主・岡部長盛（1568～1632）　※慶長 14 年（1609）から。
＊八上城主・前田茂勝（1539～1602）　※慶長 7 年（1602）から慶長 13 年（1608）まで。
＊篠山城主・松平康重（1568～1640）　※慶長 14 年（1609）から（それまでは八上城主）。
＊柏原・織田信包（1543?～1614）
＊山家・谷衛友（1563～1628）

3　真田一族の系図



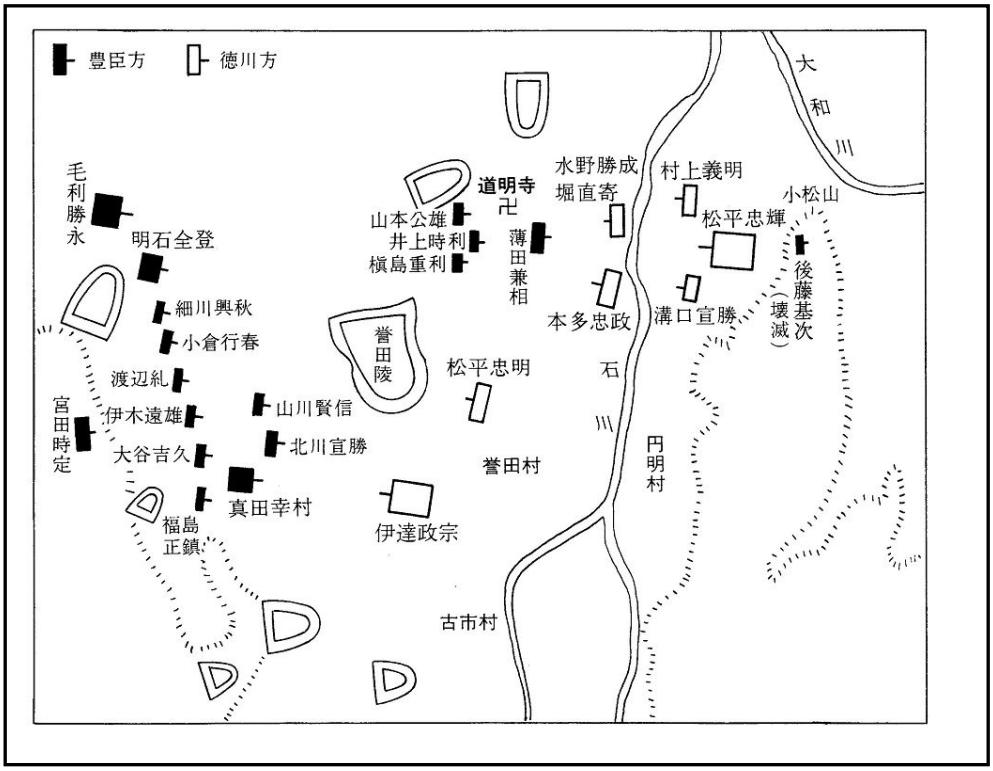
※柴辻俊六『真田幸綱・昌幸・信幸・信繁』（岩田書院、2015 年）より。

4　大坂冬の陣の武将配置図



※笠谷和比古『戦争の日本史 17　関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館、2007 年）より。

5　道明寺の戦い



【関連年表】

和暦（西暦）	内容
慶長 5 年（1600）	関ヶ原合戦において、柏原藩主・織田信包らが西軍に属する。
慶長 7 年（1602）	亀山藩主・前田茂勝が八上藩主になる。
慶長 13 年（1608）	八上藩主・前田茂勝が改易される。
同上	常陸国笠間藩主・松平康重が八上藩主になる。
慶長 14 年（1609）	岡部長盛が亀山城主になる。
同上	八上藩主・松平康重が篠山藩主になる（八上藩は消滅）。
同年	篠山城が手伝普請により築城なる。
慶長 20 年（1615）	大坂の陣に伴い、丹波国で一揆が勃発する（松平康重らが鎮圧に）。

【主要参考文献】

笠谷和比古『戦争の日本史 17　関ヶ原合戦と大坂の陣』（吉川弘文館、2007 年）

柴辻俊六『真田幸綱・昌幸・信幸・信繁』（岩田書院、2015 年）

拙著『真田幸村のすべて　大坂城決戦！　真田丸への道』（毎日新聞出版、2015 年）

拙著『真田幸村と真田丸の真実　家康が恐れた名将』（光文社新書、2015 年）

拙著『【猛】列伝　真田幸村と大坂の陣』（ＫＫロングセラーズ・ロング新書、2015 年）

拙著『真田幸村と真田丸　大坂の陣の虚像と実像』（河出ブックス、2015 年）

拙著『大坂落城　戦国終焉の舞台』（角川学芸出版、2012 年）

以上

第３回
中世荘園の遺産－丹波国大山荘を中心に－

大手前大学教授　　小林　基伸

はじめに

荘園は、明確でわかりやすい政治制度などとは異なり、多くの複雑な要素があるため、わかりにくいといわれます。基本的には、天皇家を含めた京都の上流の公家や大寺社が支配している土地のことを荘園といいます。特定の公家なり寺院なり神社が、一定の地域の土地と人を支配する権利を持っているということです。

荘園の成立とは、荘園領主がその地域を支配する権利を持つようになったことをいいます。荘園の滅亡とは、現地が荒れ果てて人が住めなくなるというイメージがしますが、そうではなく、荘園領主がその地域を支配できなくなることをいいます。つまり、荘園の滅亡は、現地にとってみれば、支配者が変わるということになるわけです。

丹波国大山荘は、丹南町大山地区（現在の篠山市）にあり、京都の東寺の荘園でした。東寺にはたくさんの文書が残っており、その大部分は京都府立総合資料館が所蔵しています。それらの文書により、大山荘でどんなことがあったのかがよくわかるわけです。

場所のイメージを持つために、「旧大山村域の地図」（資料）を見てください。太い線で囲まれているのが、明治22年にできた大山村の村域です。丹波国大山荘も、ほぼ大山村域と同じぐらいの範囲で、中世では篠山川までが大山荘だっただろうと考えられています。

大山荘は、大山川に沿った谷筋一帯と、地図の右下にある西田井村を含んだ地域です。西田井村は、宮田川から用水を引いて稲作を行わなければならず、常に水不足に悩むたいへんな所でした。

同じく地図の真ん中辺りに一印谷があります。中世の頃は「一井谷」として出てきます。また、左上に大山谷があります。この二つがこの講義によく出てくる地名です。

鎌倉時代や室町時代には、荘園が日本各地にありました。しかし、当時、現地でどんなことがあったのかがよくわくわかる荘園はあまりありません。関係する史料がよく残っていないからです。その点、大山荘は多くの文書が残っており、いろいろなことがわかります。特に大山荘の場合は、日本の政治上の大きな変化が、現地にどのような形で影響したかというのが非常によくわかります。そういう意味で、たいへん特徴のある地域です。また、荘園の遺産がいろいろな形で現地に残っています。この二つの意味で、日本中を見ても貴重な荘園があった場所ということになります。

１　大山荘の歴史

(1) 平安時代

大山荘は平安時代の承和12年（845）に、東寺が多紀郡の土地を購入したことによって成立します。購入したのは、「旧大山村域の地図」（資料）の範囲全部ではなく、墾田９町余りと林野３５町と池が１ヶ所だけでした。大山荘の範囲は一応決められていて、その中の一部が東寺の土地になったということです。東寺の土地としてはごく一部しか認められていないという状態が、12世紀の初めぐらいまで続きます。

国衙（こくが）という国の役所に、税金の免除を決める権限がありました。東寺の収入になる土地は、国衙が税の免除を認めた土地で、本来は国衙に入る税金が東寺に入るというわけです。国衙が、どこの田んぼが何反というように、免除する土地を細かく書き上げています。国衙としては、たくさん免除を認めると収入が減るので、あまり認めたくありません。そこで、国司（国の役人）が代わる度に、免除を認めたり、取り消したりということがずっと繰り返されます。取り消される度に、東寺は、朝廷などに免除について働きかけを行います。そういうことを200年余り繰り返します。そして、永久２年（1144）になり、ようやく大山荘の全域で税の免除が認められます。それと同時に、現地で起こる犯罪の処罰や取り締まりなども、国衙ではなく東寺が行う権限が与えられます。この段階でようやく東寺がこの地域全体を支配するという関係ができあがります。しかし、鎌倉時代になると状況が大きく変わることになります。

(2) 鎌倉時代

a 地頭中沢氏の登場

源頼朝が鎌倉幕府を開き、鎌倉時代となります。頼朝が行ったことの中で、特に重要なことは守護と地頭の設置です。もともと、現地を支配する在地有力者を地頭と呼んでいました。それを頼朝が、御家人を地頭にして、現地の支配権を武士に与えていくようになります。最初は、東日本を中心に地頭が置かれていましたが、承久の乱により一気に西日本にも拡大することになります。承久の乱は、京都の後鳥羽上皇方と鎌倉幕府との戦いであり、結果的に幕府が勝利します。勝利した幕府は、上皇方についていた武士の所領を没収し、自分に味方した御家人たちに与えました。全国各

地に幕府が任命した御家人が入ることになり、地頭が一気に西日本の方にも広まっていくきかっけとなりました。そうした中で、この大山荘にも地頭が現れることになるわけです。それは中沢基政という人物で、もともとは武蔵国(埼玉県)を本拠とする御家人ですが、大山荘の地頭というポストも得ました。本拠は武蔵国であるため、最初は武蔵国にいて、大山荘には代官を派遣して支配させます。代官はいろいろな形で、東寺が本来持っている権益を侵害するようになります。例えば年貢を抑留したり、大山荘の農民たちを酷使したりするようになるなど、東寺としてはたいへん困ったことになります。そこで、東寺は次のように対応していくことになります。

まず、仁治2年(1241)に地頭請が成立します。年貢の徴収を地頭に請け負わせるのが地頭請です。この地頭請が成立した頃に、基政が大山荘に拠点を設けるようになります。地頭請とは契約関係ですが、それをきちんと守るかというと、なかなかそうはいきません。東寺に対して、決められた年貢がきちんと納められないということが頻繁に起こるようになってきます。

そこで、次に地頭との関係で形成される仕組みとして、下地中分が成立します。地頭は年貢を全く納めてくれない、いっそのこと、東寺が支配する土地と地頭が支配する土地に切り分けてしまおうというのが下地中分です。下地は現地のこと、中分は分け合うということです。つまり、東寺が支配する土地以外のところは、中沢氏が支配するということになります。本来自分の支配権が及ぶはずだった土地を地頭に譲渡してしまうわけですから、東寺にしてみれば大幅な譲歩です。

このときの下地中分で、どこが東寺の土地になったかということを「旧大山村域」の地図（資料）で確認しましょう。まず、一印谷（中世では一井谷）と西田井村です。それと池尻谷の下に長安寺があり、そこから宮田の方に抜けていく道路がありますが、その道沿いに賀茂茎谷（かもがくきだに）があります。ここで、もう一枚の「大山荘東部」の地図（資料）を見てみます。右側の真ん中よりやや下に山陰道がありますが、そこから少し左に賀茂茎谷という小さな谷があります。ここも東寺の土地として残ります。つまり、東寺の土地として残ったのは、一井谷と賀茂茎谷と西田井村だけです。これは、全体の３分の１ぐらいで、残りの３分の２は地頭中沢氏が支配することになってしまったわけです。

このため、今の私たちからすると少し困ったことになりました。大山荘は当時の歴史がよくわかると述べましたが、よくわかるのは東寺に文書が残っているからです。しかし、東寺に文書が残るのは、東寺が支配する所だけです。地頭が支配する地域のことは、東寺が関与できないため文書が残らず、よくわかりません。この下地中分以降、大山荘としてわかるのは、東寺領として残った所だけとなるわけです。それも、賀茂茎はほとんど資料がなく、西田井村もしょっちゅう荒廃しているため、あまり資料がありません。一番よくわかるのは一井谷だけとなります。そのため、これから述べることは、一井谷が中心となります。

b 一井谷百姓の活動

鎌倉時代に一井谷の百姓たちは、下地中分の後、どんな活動をしていたのかということで、二つだけ例をあげてみます。

・預所との対決

一つは、預所との対決です。荘園領主から任命されて、現地経営を担当する者を預所といいます。文保 2 年、鎌倉時代の終わりの方になりますが、重舜という人物が預所として現地支配を行っていました。重舜は僧ですが、東寺の僧ではないようです。この重舜も、東寺から見てそんな真面目に現地経営をやっていたわけではありません。まず、百姓から集めた年貢を東寺に納めず、自分のところにため込みます。また、当時は百姓から年貢を受け取ると、年貢を払った証拠になる年貢請取状（領収書みたいなもの）を渡していました。ところがこの重舜は、一旦渡した請取状を強引に取り返し、未納であるといってさらに取り立てるという、無茶苦茶なことをします。そこで、一井谷の百姓は、重舜はこんなにひどいことをしているということを東寺に訴えます。そうすると、東寺は、重舜と百姓たちを京都の東寺に呼び出し、お互いの言い分を聞くことを決めます。東寺で重舜と百姓がお互いに主張し合ったところ、分が悪くなった重舜が、百姓たちにいきなり刀で斬りつけようとすることまで起きました。そんなこともあって、結果的に重舜は罷免となります。

・百姓請の成立

この動きと平行して、百姓請が行われるようになります。東寺にすると、重舜が不正をするので、なかなか思うように年貢が集まりません。百姓たちにしても、自分たちが納めた年貢を東寺に納めない、あるいは一旦納めたのに請取状を奪われ、もっと納めろなどといわれます。その辺りで、お互いの利害が一致して、取り決めを行うことになります。それまでは、一律に一反当たり一石の年貢というふうに決めていました。収穫高が悪いと、東寺から僧がやってきて調査を行い、今年の年貢はこれだけにするというように決めていま

した。ところが、それでは面倒だということで、田を上中下の三つの等級に分け、上の田んぼは一反当たりいくら、中の田んぼは一反当たりいくらというように決めることにしました。そうすると全体の年貢高が決まります。そして、百姓たちは、この年貢高は、たとえ災害があろうと不作であろうと、必ず東寺に納めるということを取り決めます。これが百姓請です。一反当たり一石の時に比べれば、年貢の総額は６２％まで減っています。総額を減らすことによって、百姓たちの負担は軽くなりますが、その代わりどんなことがあっても納めますという約束をします。東寺にしてみれば、計算上の数字は減りますが、確実に納入するという約束を百姓たちと直接交わしたことになります。

このようなことを決められるということは、村の中がきちんとまとまっていたということです。村の中で相談をし、リーダーとなる者を決め、「誰かれのこの田んぼの年貢いくら、誰かれはいくら」というようにきちんと管理をして、村としての年貢を全部揃えて東寺に納めます。集団としてのきちんとした意志決定や運営ができないと、こういうことはできません。村としてのまとまりが、この段階にはしっかりとできていたわけです。

(3) 南北朝・室町時代

・南北朝時代

室町幕府ができてからの大きな変化は、守護の役割がものすごく大きくなったことです。鎌倉時代の守護は、それぞれの国に置かれていますが、その国の御家人の取りまとめや重大な犯罪の取り締まりくらいであり、大きな権限は持っていませんでした。室町幕府ができた南北朝時代は、室町幕府の北朝勢力と、後醍醐天皇とその系統を引く南朝勢力の争いが 60 年ぐらい続く時代であり、戦乱の中で室町幕府の支配体制ができていきます。そういった戦時体制下で、さまざまな状況に対応するために守護の権限が拡大していきます。

このように、守護の支配力が大きくなっていく南北朝から室町にかけての時代に、大山荘ではその影響がどのような形で現れてくるかというと、守護が「あれ払え、これ払え」といろいろなことを要求するようになってきます。例えば、京都へ行くから荷物運びとして何人出せとか、合戦をやるから兵粮米を出せとか、大きな事業を行うときにかけられる税である段銭（たんせん）を払えなどというようになります。実は、身分の高い公家とか大きな寺院とか、国にとって重要な役割を持っている所が荘園領主である場合は、人夫役とか段銭とかは払わなくてもいいという特権が与えられており、東寺の荘園である大山荘も、本来こういう税や負担はしなくてもいいということになっています。現在であれば、そのような所は課税の対象にしないことになりますが、当時はそうはいきません。守護がこのようにいろいろ要求してくるようになると、農民たちは年貢を払う他にそれを払わなければならなくなってしまうわけです。農民たちは、全てを自分たちで負担することはかなわないので、東寺も負担してくれるように交渉します。その結果、東寺と地元の農民とが半分ずつ負担することになります。東寺にしてみれば、余分に負担する分だけ収入が減るわけであり、百姓たちにしてみれば東寺に払っているものの他にさらに払わなければいけないわけです。ですから、このような守護の影響力をいかに緩和するかということが大きな課題となっていきます。

・請負代官制

そこでとられた制度が、請負代官制です。守護に縁がある者を代官に任命して、現地の支配を任せるのです。なぜ守護に縁ある者、近い者を代官にするかというと、要するに守護に対して口利きができるからです。例えば、兵粮米を取り立てに来た時に、守護に対して「少しまけてくれ」というような交渉ができる、そんな力を持っている人を現地の支配者にして、守護勢力の圧迫をできるだけ緩和しようとしたわけです。

最初は、守護の知り合いの人を代官にしていましたが、やがては守護の被官（家来）を代官にするようになっていきます。代官になると、年貢の五分の一が自分の得分となります。仮に百石の年貢を現地から取り立てたとすれば、２０石は自分の得分、８０石を東寺に納めるという契約をします。しかし、代官はその通りにはせず、年貢の決算書をごまかすようになります。年貢は、取り立てたものをそのまま東寺に納めるわけではなく、現地で使うものもいろいろあります。決算書で、現地で使う分をごまかして、自分の取り分を増やそうとします。年貢の額も、全体の額を少ないようにしておいて、その五分の四を東寺に納めれば、実際に手元に残るものが増えます。そういうごまかしをするわけです。

また、天候不順などによって不作となった場合、年貢を減免するかどうかを決める権限は東寺にありました。例えば、東寺が、今年は天気が悪かったから年貢の三分の一を免除すると決めたとすると、代官が年貢を取り立てるときには、百姓に「今年の年貢の免除額は四分の一だ」などといって、余分に取り立てたりします。さらに、段銭や人夫役、接待費など、いろいろなものをどんどんかけてくるようになります。こういう不正が代官によってずっと行われていました。

そこで、一井谷の百姓たちは、あまりにもひどい代官がいると、東寺に対してやめさせてくれと訴えるようになります。その時に、一井谷の百姓がとった戦略というのが、逃散です。どういうことかといいますと、いっせいに村から逃げ出すわけです。逃げ出すといっても二度と戻らないというのではなく、耕作を放棄して村からみんな立ち去り、どこかに行ってしまうということです。近くの地域へ行ったり、あるいは山の中に小屋みたいなものをつくってかくれたりして、ある種のストライキを行います。百姓が農業を放棄するということは、刈り取りの時期が間に合わなくなるなど、いろいろな問題が生じます。大山荘は、猿やら鹿やら猪の被害が多く、毎日きちんと見張りをしないと農作物が被害に遭います。いつまでも逃散していると作物がたいへんなことになるということを東寺に対していうのです。つまり逃散はしていても、東寺とはやりとりをしているわけです。ストライキをしながら労使交渉をするように、仕事である農作業はしてなくても、東寺と交渉をして、「悪代官を止めさせてくれないと、年貢も何も納められなくなる。」というような交渉をします。その結果、応永 14 年には守護に近い人物であった代官喜阿弥、それから 10 年後の応永 24 年には守護細川氏の被官であった稲毛公辰、この二人が逃散戦略によって罷免になっています。

一方、東寺に対してはどうであったのか。場合によっては、代官を支持して東寺に敵対することもありました。東寺が要求を受け入れないのであれば、代官のいうことだけを聞いて、東寺のいうことは聞かないようにするというようなことを主張して、自分たちの要求を認めさせようとする行動をとることもあります。

この時期の特徴的な百姓たちの行動として、大雨が降ったとか、今年は日照りであったとか、何かと理由をつけて年貢を減らすよう、毎年のように東寺に要求します。もちろん実際に被害があり不作になる場合もありますが、いかに東寺に納める年貢を減らすかというかけ引きをします。そういうことをして、自分たちの生活を守ろうとします。やはりこの時代も村としてきちんと団結して、不法な代官を追い払ったり、あるいはできるだけ自分たちの労働成果を手元に残したりするような活動、そういうことを主体的にやっていたということがわかります。

これがだいたい 15 世紀の前半くらいまでの大山荘です。南北朝から室町にかけての動きというものをざっと見てきましたが、地頭による支配、そして室町・南北朝の頃から守護がいろいろな負担をかけてくるという、そういう流れの中で東寺による支配がだんだんと後退するようになっていきます。

(4) 大山荘の滅亡

嘉吉 3 年(1443)、これまで代官に支配を任せていた大山荘に、東寺から直接僧を派遣して支配しようとするようになります。これを直務代官といいますが、それまでは守護の被官のような武家に支配を任せていたのを、東寺による直接支配にしようとしたわけです。もう一度大山荘を再建しようという意志からでした。そして、特に西田井村の再開発に尽力しますが、これも結局は失敗してしまいます。西田井村というのは本当に水不足で、それに北側にある宮田荘との争いなどもあり、安定的に田んぼを維持することが困難であったため、結局失敗してしまいます。そして、11 年後の享徳 3 年(1454)に、再び武家を代官に起用するようになります。しかし、これも武家がなかなか契約通りに年貢を納めません。そこでとった次の手段が、長禄 4 年(1460)の請切代官です。守護の細川氏の被官である進藤利貞を代官に任命します。これはどういうことかというと、年にいくらというように額を限って、代官に年貢を納めさせるという契約です。決まった額をきちんと納めれば、後は現地で何をしてもよく、東寺は現地支配に関与しないという契約です。つまり、東寺は、この段階になると、現地支配を放棄してしまったわけです。ただ単に、請切代官から契約した額だけもらえればいいというわけです。

ところが、代官もなかなかその通りには納めません。そこで、東寺はこの進藤利貞を罷免して、中沢元基を代官に任命します。皮肉な話ですが、地頭の流れをくむ中沢氏が今度は代官になります。しかし、これもなかなかいうことを聞きません。そして、永正 5 年(1508)、この中沢元基の次の代の元綱が、丹波であった大きな合戦で討ち死します。京都の細川氏の内紛と絡んで、丹波でも二つの勢力に分かれて戦いが行われます。一方についたのが八上城の波多野氏、反対側の勢力についたのが中沢元綱であったわけですが、中沢元綱はその丹波での合戦で討ち死します。中沢元綱が討ち死した後は、大山荘の代官職は空白になってしまいます。そこに波多野氏が乗り込んできて、勝手に大山荘を支配するようになります。この後も東寺はいろいろと悪あがきをしますが、結局、東寺の存在は全く無視され、現地の武家が大山荘の地域を支配するようになります。それが大山荘の滅亡です。つまり東寺が全く支配できなくなってしまったのです。もちろん現地には、庶民がいて、生産し、生活しているわけですが、東寺の支配からは全く離れてしまったということです。

2　大山荘の遺産

このような歴史をたどり、東寺の支配地としての大

山荘は滅亡したわけです。しかし、現地の人びとの生活はずっと続いていくわけであり、その中で受け継がれてきたもの、あるいは滅んでいったもの、そういったものが現地にいろいろな形で遺っています。

ここからは、「大山荘東部の地図」（資料）をもとに、大山荘の現地の様子をスライドで見ていきます。

（スライド）

① 大山荘の航空写真

直務代官の時期、乗善という僧がやって来て、西田井村の開発に尽力します。その時に、この地域を上町、中町、下町、池内などの区域に分けます。それが今でも「上ン町（かみんちょ）、中ン町（なかんちょ）、下ン町（しもんちょ）」という地名で残っています。

② 西田井村の地図（鎌倉時代の終わり頃）

西田井村の北側には宮田荘があります。宮田川は深いため、西田井村に水を持ってこようとすると、上流に堰を造り、宮田荘を通って水路を引かなければなりません。そのために宮田荘と西田井村に対立が生じ、宮田荘は西田井村に水が行かないように溝を掘るなどの妨害をしたりします。西田井村は常に水不足であったため、結局、中世を通じて安定的に水田が維持されることはありませんでした。

③ 大山谷

大山谷が大山荘の発祥の地です。今はすっかりほ場整備できれいになっていますが、もともとここに、奈良時代には須恵器を作る人たちがいて、須恵器窯や建物があり、それがこの谷の開発の始まりになるのだろうと考えられています。東寺がこの地を買った時もこの辺りから開発が始まり、奥に見える黒頭峰か夏栗山にちなんで「大山里」という地名がつき、それが荘園全体の名前になったのだろうと考えられています。

④ 地頭屋敷跡

一帯が殿垣内（トノガイチ）という通称地名で呼ばれており、地頭屋敷があったと考えられています。池尻谷にある山の上に池尻神社があり、人形芝居でよく知られていますが、そのふもとにあります。

⑤ 西紀・丹南町（現篠山市）教育委員会の説明板

大山荘の調査が終わり、３～４年経った９３年頃に整備されました。地元の人にも、大山荘についてよく知ってもらえるようにと考えて説明板が設置されました。

⑥ 長安寺跡

この一帯に、堂前（どうのまえ）、下馬場（げばばし）というような地名が残っています。また、釣鐘堂の跡といわれている場所もあります。長安寺が地頭中沢氏の氏寺（菩提寺）であったことは、文書からわかります。この一帯の大字名が長安寺であることから、中沢氏の菩提寺がここにあったと考えられています。

⑦ 大山城跡

南北朝時代くらいから、中沢氏は、地頭屋敷のところから大山城に本拠地を移したと考えられています。その城跡が今でも遺っています。城の北と東と南をぐるっと川が蛇行しており、その川に囲まれた台地上に城がありました。

⑧ 市場橋

大阪街道と呼ばれる、大阪方面に通じる、大山川沿いにずっと続く街道です。そこにどこにでもあるような橋があります。「市場橋」という名前の橋です。鎌倉時代の終わりぐらいに、大山荘に市場があったと史料に出てきます。そこには既に住人がおり、大山荘だけではなく、隣の宮田荘の人たちも来て、いろいろな取引をやっていました。結構金持ちの百姓もいたということが史料からわかっています。

中世の市場は、だいたい川沿いの河原みたいなところに立ちます。中世でよくあることですが、中沢氏の住んでいるお城があり、そのすぐ近くに市場があります。中沢氏のように現地を支配する領主は、交易や流通の中心である市場をおさえるということも大事なことでした。南北朝の頃には、中沢氏が市場を管理、支配していたんだろうと考えられています。

⑨ 若宮社旧跡の石碑

以前、若宮神社という神社があったことを示す石碑です。室町時代にはあったことが確認されている神社です。

⑩ 八幡神社

一印谷全体の神社です。本来、蛭子神社が祭られており、八幡神社は別の所にありました。それが明治41年にここに移され、蛭子神社などと合祀されました。それから、若宮神社も合祀されて、全体として八幡神社という呼び方をされています。八幡神社も、室町時代には大山荘の一印谷にあったことがわかっています。神社の中にも、中世からの流れを引き継ぐものがあるわけです。

⑪ 阿弥陀堂

若宮神社のすぐ横に大師堂がありました。弘法大師の像も若宮神社などと一緒に移されて、祭られています。大師堂も、室町時代にはあったことがわかっているお堂です。八幡神社も阿弥陀堂も、建物自体は新しいですが、中世以来の歴史を引き継いでいます。

⑫ 星丸池

一見何の変哲もない、どこにでもありそうな池ですが、実は鎌倉時代からずっと使われている池です。上

の方から集まってくる水をためて、池の下流の水田に水を供給しています。池尻池も同じ仕組みです。谷の真ん中辺りに池を造り、上の水を集めて下に流しています。

星丸池の奥の方には、今はもうほとんど家はありませんが、中世には人が住んでいたと考えられる場所がいくつか遺っています。

⑬　堀田と呼ばれる谷

堀田という地名も、鎌倉時代の史料には既に出てきている地名です。

⑭　イモ谷

鎌倉時代の史料に「芋谷」という地名が出てきます。水田から一段高くなった所に平らな場所があり、そこが「イモ谷の畑」といわれています。こういう所に、中世の百姓たちの家があったのではないかといわれています。鎌倉時代や室町時代の史料を見ると、「芋谷太夫」とか「堀田宮内」とか、地名と名前を組み合わせた人名がたくさん出てきます。イモ谷に住んでいる太夫さんというように、住んでいる所を示していると考えられ、そういう人が住む家があった場所だと考えられています。そんな場所が星丸池から上流にいくつもあります。

⑮　ドリガイチ

地元で呼ばれている地名です。一番低い水田から、階段状に少し高くなった所に平地があり、昔屋敷があったということが、江戸時代などの史料からもわかっています。室町時代くらいから、こういう所に人が住んでいたのだろうと考えられています。

⑯　猫谷

一番低い田んぼよりも一段高い平地があって、そこに家があります。今は「猫谷」といいますが、中世の史料には「レコ谷」とか「レンコウ谷」などと出てきます。それが「ネコ谷」に訛ったのだろうと考えられます。中世の一井谷では、田んぼよりも少し高い所に家があって、そこに百姓が住んでいたことを彷彿とさせる場所です。

⑰　高蔵寺

後ろに黒頭峰を臨む場所に、高蔵寺の山門があります。いかにもいい場所です。この奥に小さな川が流れています。最初に開発が始まった大山谷にあり、おそらく、水源の山と関わるようなお寺だったと思われます。鎌倉時代の史料には既に出てきています。

⑱　観音堂

高蔵寺の本堂です。鎌倉時代以来の歴史を持つ寺です。天文 17 年という、1548 年の銘のある中世の鰐口が伝わっています。少なくとも鎌倉以前からある由緒あるお寺です。

⑲　二宮神社

林の中のうっそうとした所にあります。これも鎌倉時代の史料に出てきます。大山二宮は、大山一宮と同じ日にお祭りをしています。一宮と二宮が一緒になってお祭りをしているということが鎌倉時代の史料からわかります。

⑳　神田神社（こうだじんじゃ）

大山上という所にあります。大山川沿いの谷のちょうど真ん中ぐらいにあります。中世では大山一宮と呼ばれていた神社です。大山一宮も鎌倉時代の史料に出てきます。二宮と一緒に、９月９日に祭礼が行われていました。

今でも、この神田神社の氏子の範囲は、大山荘の範囲と全く同じです。東はかつて西田井村（現在は、西田井という地名はない）であった東河地や明野から、奥は大山谷の大山川の一番上流にある追入までの旧大山村の範囲、つまり大山荘の範囲全体の神様です。今でも、10 月にここでお祭りが行われ、かつては御神輿が、ある年は東河地まで行き、次の年は追入まで行くというように、荘園の端から端まで１年おきに御神輿が行っていました。今はもうそこまではしていませんが、かつてはそういうお祭りがありました。一宮と二宮が揃って同じ日にお祭りをするという鎌倉時代以来の伝統が今でも生き残っているわけです。

そして、この神田神社、つまり大山一宮は、大山荘全体の神様であったわけですが、そういうまとまり、つまり大山荘というまとまりが、近世には篠山藩の支配の中で、大山組十七箇村という一つのまとまった地域をなしていました。それが明治 22 年に町村制が敷かれたときに、大山村という村になります。それが 1955 年に丹南町ができた時には丹南町大山地区となり、荘園の時にできた地域のまとまりが、ずっと近代に受け継がれ、維持されてきたということになります。その中心にあるのがこの神田神社なのです。

おわりに

荘園は、消滅してからもう 500 年以上も経過しており、当時の歴史を伝えるものとしては、殿垣内や長安寺などのように、既に失われたものとして名前だけが残っているものもあります。一方で、例えば池尻池や星丸池のように、今でも使われ続けているものもあります。それから、一宮の祭は今でもずっと続いています。何も知らずに大山荘に行けば、どこにでもあるような中山間村のような感じがします。しかし、実はそこに、中世の人たち以来、営々と受け継がれてきたものがたくさんあるのだということを少しでもご理解いただけたら有り難いと思います。

今回の全体の趣旨「丹波を形づくったもの」でいうと、丹波を形づくったものは庶民である。現地を守り続けてきたのは、大山荘に住んでいた百姓とその子孫たちであるということを申し上げて、終わりといたします。

講座「丹波学」　　2016年10月1日

中世荘園の遺産

－丹波国大山荘を中心に－

大手前大学　小林基伸

はじめに

・荘園　公家や大寺社（荘園領主）の所領　荘園領主に支配権　人々の生活の場

・丹波国大山荘（篠山市）　東寺領　東寺百合文書など史料豊富

　歴史　時代の変化が現地に与えた影響　人びとの活動

　遺産　地名　水利　信仰　地域のまとまり

1．大山荘の歴史

(1) 平安時代

・承和12年（845）　東寺が多紀郡内の土地買得　墾田９町余　林野35町　池１所

・11世紀～12世紀初　国衙（国の役所）による税の免除と否定（収公）の繰り返し

・永久２年（1114）　税免除と国衙の使排除の確定＝荘園の確立

　荘域：旧大山村域に近い範囲　田畠・山野432町余　現作田45町

・荘名の由来　発足当初は大山谷中心　夏栗山か黒頭峰が「大山峯」（承和12年文書）

(2) 鎌倉時代

ａ．地頭中沢氏の登場

・承久の乱（1221）　後鳥羽上皇方と鎌倉幕府の戦い　幕府勝利

　幕府　上皇方武士の所領を没収し御家人に与える

・中沢基政　武蔵国の御家人　大山荘の地頭となる　代官派遣　東寺の権益侵害

・仁治２年（1241）　地頭請成立　中沢基政による年貢請負　その後基政本拠移転

・永仁３年（1295）　中沢氏による年貢滞納　東寺と地頭による土地の分割＝下地中分

　東寺領　一井谷（一印谷）・加茂茎谷（長安寺地区東部）・西田井（東河地、明野）

　　全体の約３分の１　地頭領の実態は不明に

ｂ．一井谷百姓の活動

・預所（現地経営担当者）重舜との対決　文保２年（1318）百姓が重舜を東寺に訴える

　重舜の非法　年貢を東寺に納めない　百姓から年貢請取状を取り上げ未納と責める

　東寺で百姓と重舜が対決　重舜は百姓に刀で切りかかる

・百姓請の成立　年貢：一反当一石　災害のとき東寺から使者下向、現地調査で高決定

　文保２年　東寺と交渉　田を上中下に分け反当年貢高設定　合計額62%に減少

　どんな災害があっても必ず11月に年貢を納入することを誓約

(3) 南北朝・室町時代

a．武家代官の非法

・南北朝時代　守護勢力の進出　人夫役・兵粮米・段銭の賦課　東寺・農民の負担増加

・永徳２年（1382）　請負代官制始まる　年貢五分の一を得分として経営請負

守護勢力の圧迫緩和が目的　守護有縁の者

・応永５年（1398）～嘉吉３年（1443）　武家を代官に任用

代官の非法　年貢算用状（決算書）のごまかし

東寺が認めた年貢減免のごまかし

人夫役・段銭・守護の使者の接待費などの賦課

b．一井谷百姓の行動

・対武家代官　罷免を求め逃散　応永 14 年代官喜阿弥　応永 24 年代官稲毛公辰

いずれも代官改替実現

・対東寺　百姓が代官を支持し、東寺に敵対する場合も

年貢減免要求　大雨・日照りを理由に年貢の減免を要求

(4) 大山荘の滅亡

・嘉吉３年（1443）　東寺僧乗善代官就任（直務代官）　西田井村の開発に尽力

・享徳３年（1454）　再び武家代官起用

・長禄４年（1460）　請切代官として進藤利貞補任

東寺へ定額年貢納入　現地は代官が支配＝東寺は現地支配を放棄

・文明 14 年（1482）　進藤罷免　中沢元基を代官に補任

・永正５年（1508）　代官中沢元綱討死　波多野氏が大山荘支配

東寺に関係なく武家が現地を支配＝大山荘の滅亡

2. 大山荘の遺産

(1) 地頭中沢氏の遺跡

・「殿垣内」（町之田池尻神社南）　地頭屋敷跡

・長安寺跡　地頭屋敷跡の東　中沢氏菩提寺の伝承

・大山城跡（大山下）　中世後期の中沢氏の拠点　天正６年（1578）落城の伝承

・市場橋（大山下）　鎌倉時代大山荘に市場　中世後期には中沢氏の支配下か

(2) 開発の証人

・池尻池（町之田）　11 世紀には存在　池尻谷南部の用水源

・星丸池（一印谷）　鎌倉時代に築造　一印谷南部の用水源

・百姓居住の跡（一印谷）　鎌倉・室町時代以来の小さな地名　百姓の家の所在地

・上ン町・中ン町・下ン町」（大山下東部・東河地）　嘉吉２年（1442）設定の区画

(3) 信仰

・高蔵寺（高倉）　1241 年には存在

・神田神社（大山上）　大山一宮　1241 年には存在　9 月 9 日に祭礼

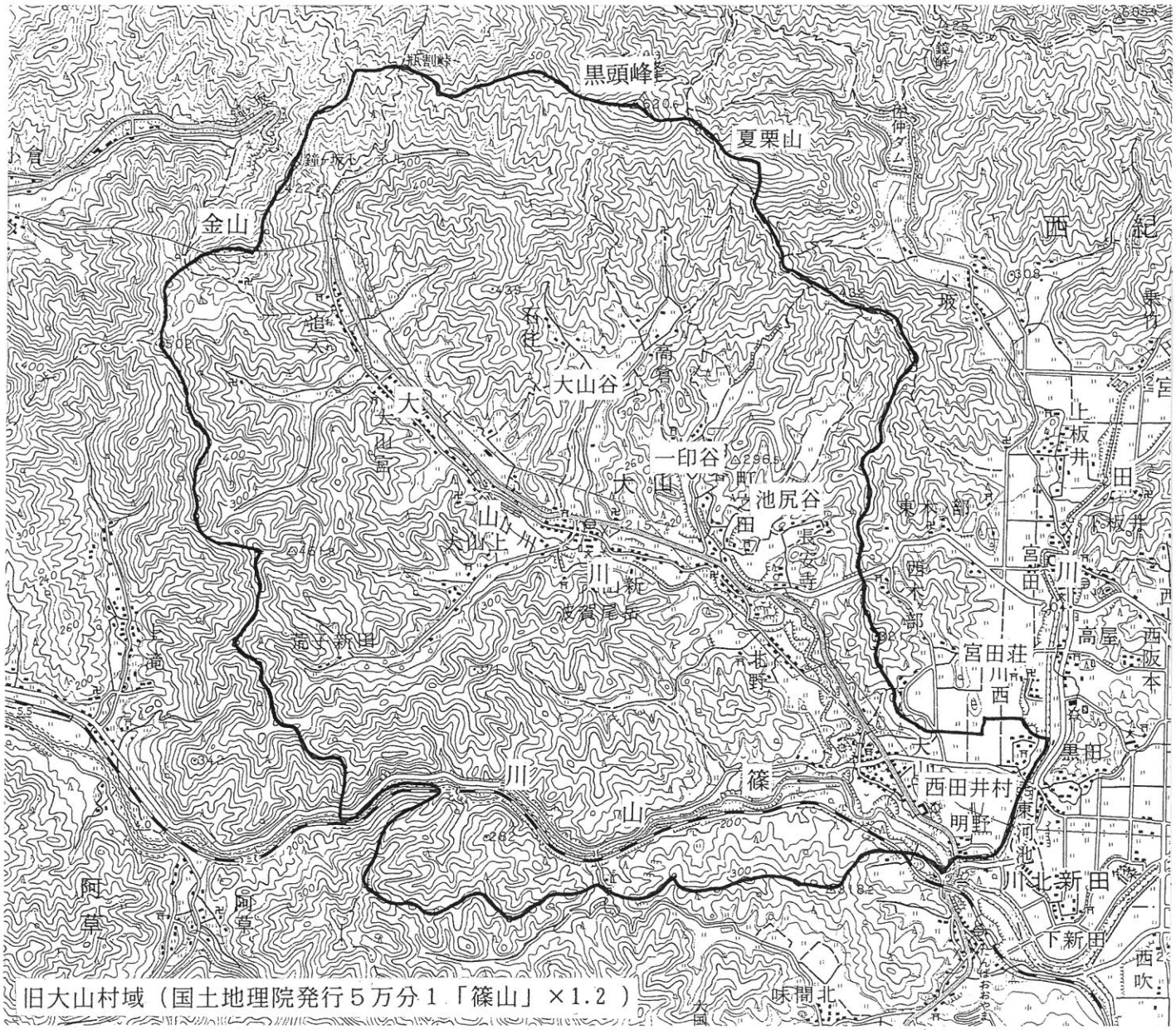
　伝承ではかつて大山谷に鎮座　旧大山村全域の氏神

・二宮神社（大山新）　一宮とともに 1241 年には存在　9 月 9 日に祭礼

(4) 地域のまとまり

・中世：大山荘→江戸時代：大山組（17 ヵ村）→明治 22 年（1889）：大山村

　→昭和 30 年（1955）丹南町大山地区



旧大山村域（国土地理院発行５万分１「篠山」×1.2 ）

大山荘東部
観音堂
高蔵寺
高倉
センリョウバタ
トゲ
神田神社旧趾
大山谷
星丸池
一印谷
池尻池
池尻谷
ナゴチ
神田神社
二宮神社
地頭屋敷跡
長安寺跡
長安寺
山陰道
賀茂茎谷
北野新田
坂
街道
北野
波賀尾岳
下池
上池
念仏寺
市場橋
大山城跡
西田井村
西紀町

第４回
丹波柏原の織田家から見る信長評価

文筆家、旧・柏原藩織田家 19 代当主
織田　信孝

はじめに

私の家は、明治維新の前まで柏原藩の藩主でした。明治維新で官軍方について爵位をいただき、東京に移って、それで今に至ります。もともとは、織田信長の次男の信雄からつながる家です。私は、歴史学者でもないし、研究者でもないので、織田家について語るというのも、歴史学的にそんなに細かく語れるわけではありません。ただ、織田家に生まれたものですから、何かと感じることは多くあります。その感じることが多いというのは、同じ歴史上の人物の評価でも、随分時代によって変化するものだということです。それはあまり歴史学者の方は発言していないことだと思います。実際に歴史上の家に生まれた人間は、そういうことはあまり外で発言していないはずなので、あまり他で聞けない貴重な話じゃないかと勝手に思っています。それから、せっかくだからその話を聞いて、柏原・丹波を一層好きになっていただきたいと思います。みなさんは、もともと丹波地域にお住まいの方々がほとんどですから、地元に対する愛情というのはあると思いますが、また違った見方が出てくるといいなと期待しています。他の講師の方の話を聞かれている方もたくさんいらっしゃると思うので、ちょっと角度が違う話ができればと思っています。

１　織田一族について

まず、私の家が織田信長と、どのようにつながっているのかということについて話をします。資料の「織田一族家系図（信長以降）」をもとに、簡単に説明します。この家系図で、私がどこにいるかというと、右下に「信弘」という方がいます。「信弘」というのは、天童藩で、私の四つ下で、友人でもあり、東京に住んでいます。今、ある大手の精密機器メーカーでシステムエンジニアのような仕事をしています。信弘君から、家系図をずっと上に上がっていくと、「信雄」というのがあります。家系図の右上に「信長」があり、その左下にある「信雄」のことです。ここからつながっています。

私の家はどこかというと、信弘君の筋からもう一つ左側に「高長」というのがあります。そこからずっと下にいくと「信孝」というのがあります。「（後期）柏原藩」と書いてあり、そこの「①信休」が柏原藩のスタートです。

家系図の左上に「信包」というのがありますが、江たち浅井三姉妹を保護していたあの信包のことです。信包から三代が、前期の柏原藩といわれている藩です。三代続いた後、跡継ぎがいなくて途切れ、そのままになっていました。一方、家系図で、高長－長頼－信武のところに、大和松山藩（宇陀）と書いてあります。これは奈良になります。確か、最近、柏原と宇陀と交流があるらしいので、ご存知の方もあるのではないでしょうか。最初はそもそも奈良に領地を持っていたのが、途中でお家騒動みたいな形になって、幕府から柏原に行きなさいと言われるわけです。それで信休のところから、柏原に移動してつながるということです。これが後期の柏原藩ですね。少しややこしいですが、信包の代で三代、信雄から続く代で十何代続いて、私がいるという仕組みになっています。

信長が死んだ後、織田家の子孫はどうなったのかとたまに聞かれますが、もし信長に長男がいて、そこが続いていれば、それが宗家ということになります。家系図でいうと、それが一番右の線です。織田信長がいて、信忠という長男がいます。本能寺の変の時、信忠は二条城で亡くなります。亡くなった信忠の嫡子は三法師として有名な秀信です。大河ドラマでは、清洲会議で秀吉がちゃっかりと抱き上げて、「三法師様が後見役ぞ」と言って天下をとるというのがありましたが、この三法師というのが育って秀信になります。秀信が岐阜城の城主であった時、関ヶ原の戦いの前哨戦で、池田輝政、福島正則らの強い武将とぶち当たって、当然のように負けて、切腹するしかないという状況にまでなります。その時に家来達は、「殿様逃げてください」といって、切腹して、殿様を逃がすということになります。家来達が切腹して血みどろになった床板というのが、岐阜城のふもとにある崇福寺で供養のために天井板として使われています。今は木の板にちょっとしみがあるかなあという程度にしか見えませんが、そこのお寺に行くと、血天井といって、そういう板があります。そんな形で家臣たちが亡くなり、その犠牲のもとに、彼は投降するわけです。家臣にしてみれば、信長のお孫さんだから、血を絶やしてしまうというのは忍びないということもあったのだろうと推測します。それで、秀信は高野山に送られます。よくあるパターンで、大河ドラマの真田丸でも、真田信繁の父である昌幸も高野山にやられて、そこで亡くなります。だか

ら、高野山にはやたらといろいろな武将のお墓があるわけです。この秀信も、高野山に行って、そこで亡くなります。これだけ話していると、それまでに紆余曲折あって、大変だったんじゃないかと思えるのですが、秀信が亡くなったのはわずか26歳のときです。秀信が亡くなってしまうので、長男の直系はいないわけです。

そんなわけで、次男のつながり、つまり、柏原藩の私の家と天童藩の信弘君の家が、信長に一番近い血筋ということになります。大名家ではつながりがあるのは、この二家だけです。この二家以外で、「織田家の子孫です」と出てくる人は、結構あやしい人だと思ってください。家系図を見ていうと、信長の下に、信忠ー信雄ー信孝、三男坊の信孝は、秀吉とぶつかって死んでしまう人です。その隣に、旗本二千石というのがあります。旗本二千石の信高を下に辿っていくと、「・・・？」と書いてあります。フィギュアスケートの信成君は、ここの子孫だと称しています。大名家ではなく、旗本の子孫ですね。私は信成君に会ったこともないし、それを検証した話も聞いたことはありませんが、報道では明治に入ってから三代ぐらいは不明だということも伝え聞きました。不明となると、誰でも子孫だといえることになってしまいますよね。メディアはいちいちチェックしないし、私どもも手間暇かけて調べたりはしません。そしてテレビは面白ければ、成り立ってしまうのです。あやしいけれども、どっちとも言えないので、私は彼の家系については、語らないようにしています。ただ、ちゃんと下調べして取材にくるメディアは、私か信弘君のところにたどりつくようです。

面白いのは、テレビで以前、信成君のお母さんが「キキョウの花がタブーで、家にはキキョウの花が飾れない」ことをお姑さんから教えられたといっていましたが、私の家も、天童藩の信弘君の家も、キキョウのタブーなんてないのです。

ところがキキョウのタブーがある大名織田家もあります。家系図の一番左側の二家、信長の兄弟を左の方にいくと、「味舌（ました）藩」というところに「長益」というのがあります。「織田有楽斎」といって、信長の末弟で、茶道で有名になった方です。東京の有楽町というのはこの人の名前から取っているということでよく知られていますけども、ここの信長の末弟からずっと真っ直ぐ下に行ったところに二家残っています。お茶の二家といわれています。片方は女性で裕美子さん。この方は、お茶の有楽流の宗家です。それから、家系図の一番左。長功さんがずっとご当主でいらっしゃったのですが、この間の10月にお亡くなりになったので、たぶん今の当主は、養子で来られた息子さんになると思います。このお茶の二家にはキキョウのタブーがあるのです。歴史的にどういうことなのかはわかりませんが、茶花を使う時にキキョウを避けるということが起こったのかも知れないと私は推測しています。私や信弘君の家は、茶道と関係ないのでキキョウのタブーがないのかもしれません。スケートの信成君の家はどうでしょうか。本当の子孫だとすれば高家ですから、これは微妙なところです。高家は「しきたり」を司る家ですから、そういうことがあったのかもしれないとも思います。しかし織田家でも引き継がれているのかどうかあいまいなしきたりと、幕府の作法とは関係ない気もします。いずれにせよ、私どもから見ると、いろいろ謎の多い家ですね。

２　柏原藩織田家のその後

さて、織田家はその後どうなったのかですが、戦国時代を過ぎてしまうと、めざましい話はあまりありません。江戸時代に入って、奈良へ行ったり、柏原へ行ったり、天童だったりということがあって、変化はありますが、江戸時代に入って戦があるわけではなく、静かな歴史を積み重ねていくことになります。歴史小説とかお読みになるかもしれませんが、例えてみれば、司馬遼太郎的な英雄の出てくる世界から、藤沢周平的な静かな世界に入ったのだろうと思います。

私自身のことを話すと、生まれが神奈川で、東京で育っています。織田家だからといって、特別なことはあまり感じないで生きてきました。名前が名前なので、時々言われることがありましたが、その程度です。柏原に崇広小学校というのがありますね。崇広小学校は私の曽祖父が作った学校だったので、何周年記念だったかの時に、私と父がうかがいました。私は小学２年生ぐらいですかね、学校に行ったら、ブラスバンドの演奏で学校中が歓迎してくれました。あの時は本当にびっくりしました。そういう時代があったのですね。そういうこともありましたが、今はそういうことはなくて、普通の生活をしています。じゃあそういうなごりがありますかと聞かれますが、柏原にお墓はあります。廟所があって、そこにいっぱい並んでいるお墓は、私のご先祖が並んでいるわけです。東京の家に何があるかと言えば、紋が付いている箪笥があるとか、そういうことはありますが、別に鎧甲があるわけではなく、名刀もなく、たいていの古い品々は柏原の倉庫にずっと入っていました。ずっと以前にふるさと創生事業というのがありました。竹下首相の時代、まだ日本にお金があった時代です。各市区町村に１億円ずつ配る地方助成があって、柏原にそのお金がきた時に、それを生かして記念館を作るので、寄付していただけませんかという話がありました。こちらとしても、願ったり

かなったりで、家にあったものをほぼ全部寄付し、いくらかはお預けしました。その後に、田ステ女の関係のものが附設されるような形になったと思います。だから、あそこにあるものって、ほとんどがもともと当家にあったものです。もちろんその後、収蔵品を集めたりもしているので、バランスは多少変わっていると思います。

それで、東京の私の家に何か歴史的なものはないかと聞かれることが多いので、探してみました。それであったのが、資料にある位牌と過去帳です。あまり他の家にはないだろうというので資料に入れたのですが、これが歴史の名残です。資料にある位牌は、こんな大きな位牌が仏壇にありますということで理解してください。

次は、過去帳についてです。仏壇に過去帳を置いてある方は多いと思いますが、要は戒名がずらっと日付で並んでいるわけです。資料の過去帳の上の方の写真で、一番右を見ると、「総見院殿」と書いてあります。これが信長です。「天正10年６月」、それで一番上の方にページが「二」と書いています。「天正10年６月２日」といえば、本能寺の変です。だから、うちの過去帳の６月２日のところには、信長さんの戒名があります。さすがに偉いだけあって、これだけ戒名が長いです。私は別に織田信長の戒名が家の過去帳に出ていても、普通のことだったので、何とも思いませんが、人に言うと「ああ、すごいですね」という話になります。ご存知だと思いますが、過去帳というのは書き継いでいきますので、資料の過去帳が昔からあるのではありません。古くなれば、また次の新しい過去帳を買って書き写すわけです。達筆な方に書き写していただきますので、こういう形でソフトだけが移動しているので、紙が茶色くなっていますが、物自体はそんなに古くはありません。

さらに資料のもう一つの過去帳を見てみます。二人だけの戒名が出ていますが、そこに「養華院」とありますね。「養華院」とは女性で、濃姫さんのことです。濃姫さんは謎が多く、明智光秀のいとこだと言われる時もあるし、信長に早く離縁されたのではないかとか、いろいろなことを言われている人です。私は歴史学者ではないので、証拠を示してお話できませんが、我が家の話では、この「養華院」というのが濃姫さんで、資料の過去帳を見ると、亡くなったのが慶長１７年７月で、このページの一番上の方に「九」と書いてありますので、７月９日ということです。資料の続きを見ますと、総見院は本能寺の変で死んだのですが、養華院さんは30年後、江戸時代に入ってから亡くなっています。よくドラマで、濃姫さんが薙刀か何かを持って戦い、信長と一緒に本能寺で死んでしまう、昔はそういうシーンがあったりしましたが、今ではめったにそういうのはやりません。信長と濃姫が本能寺で一緒に死んだというのは嘘だというのが、だいたい常識になってきたからでしょう。それでも先程、歴史好きな方と話をしていたら、「えっ、そうなんですか」とおっしゃるから、濃姫は信長と一緒に死んだと思っている人はそこそこいらっしゃるのですね。少なくとも、私の家の記録では、濃姫さんはもう少し長生きされたということです。

先程、血天井の話をしました。少し記憶があやふやなところがありますが、血の天井が貼ってあるお寺のご住職に聞いたら、そこのお寺の古文書みたいなものにも養華院さんらしき人が話をしているというのが出てきていて、それが濃姫さんではないかといわれています。我が家に残っているものといえば、その程度です。

３　信長の評価

もう一つ、ここで話すのは、信長の評価です。その評価が徐々に変化しているという話をします。信長は、歴史上の人物の中でも、坂本龍馬と並び、人気ナンバー１です。柏原はラッキーですよね。どんどん利用していただきたいと思います。名古屋市は、ものすごく利用しようとしています。私は名古屋市にも呼ばれることがありますけど、名古屋は商売がうまいですね。岐阜は前からそうです。岐阜は、信長が美濃から切り替えて名前を付けています。岐阜という県名の命名者が信長なので、岐阜は信長を持ち上げてくれています。柏原とか天童は小さい町なので、派手なことをするのは、おそらく予算的にも難しく、なかなか大変だと思いますが、もっとアピールしてくださったらいいなという気はします。

織田家の大名家は、江戸時代に小さな藩になった時から、信長の子孫ではあったけれども、時の政権に影響を与えるような存在ではありませんでした。それはどうしてなのでしょうか。信長の子孫が江戸時代にもう少し存在感があってもよかったのではないかと思えますよね。例えば、石高ってありますね。石高が大きい藩の方が影響力が強いというのがあります。島津とか毛利とかいうのは大きいですから、徳川もうかつに手は出せないというのはあります。しかし、徳川家康と信長の関係とか、秀吉の関係とかを見たら、丹波柏原藩でも有楽斎の方の藩でもいいのですが、もう少し織田家に存在感があってもいいんじゃないかという気がしませんか。ところが、それは、ほとんどない。それはどうしてなのかと考えていって、評価の変遷にた

どりつきました。

資料に「信長評価はどこから始まったのか」とあります。先にいってしまうと、今、信長は歴史的にはすごい人気者で、ドラマで扱われたりコマーシャルで扱われたりしていますが、江戸時代を調べると人気はあまりありません。何でなんだろうと思って調べてみると、どうも、平和な時代になってしまったことに原因があるようです。家康が天下を取って、江戸時代になって、平和がやってきます。段々平和になってきた時に、信長的な、革命児であり、攻撃的な、世の中を変えていこうという、抵抗勢力があったら、焼き討ちにしてでも自分のしたいようにしてしまうとか、犠牲を問わないで前へ進むというこういうやり方は、忘れられていったのでしょう。

私は昭和34年生まれで、今年で５７歳になりますが、私の親より上の世代には、猛々しいパワフルな感じというのが残っていましたね。だけど、戦争が終わったら、みんなそんなことすっかり忘れるわけです。すっかり忘れて、価値観が全然変わってしまうことは、身近な例を考えても、そうなんです。この間、電通の女の子が社屋から飛び降りて自殺するといういたましい事件がありました。あの後で話題になった「鬼十則」というのがありましたよね。あんなのは、自分が小さい時に父親たちを見ていたら、別に不思議ではないですよ。昭和一桁的価値観って、たぶんみなさんはご存知だと思いますが、風邪ひいて会社休むなんて考えられなかったはずです。槍がふってでも会社出てこいといったような、そんな時代です。しかし、そういう成長期の雰囲気を、平和になり、子どもの数が減り、みんなが豊かになるにつれ、人は忘れるんですね。

江戸時代になって、そういうことがもっと大きな規模で起きていたのではないかというのが私の仮説です。実際、だから人は戦争を繰り返すという説もあります。戦争で、あんなひどい目に合ったのに、人は忘れるんですね。

バブルが起こるのも、同じ理由だとも言われます。人はバブルに踊って、それがはじけて悲劇が生まれるというのを伝え聞いてはいても、30 年ぐらい経つと、直接的な体験として知っている人は、全部死んでしまっていなくなるので、忘れてしまう。忘れたところに儲け話がくると、みんなで盛り上がって、またバブルが起こるということが起こりうるという話です。

江戸時代は、どんどん平和になっていきます。しかし、家光の時代ぐらいまでは、根切りがあったと言われています。根切りというのは、皆殺しです。一揆とか反乱とかがあれば、一つの村や一族郎党皆殺し。これが、家光の頃ぐらいまではあったということです。ここで信長を弁護すると、信長は焼き討ちなど、むちゃくちゃひどいことをやったと言われていますが、家康も秀吉も似たようなことをやっているわけです。

信長が、江戸時代にあまり評判がよくなかったのは、おそらく非常に激しい戦闘的な時代の人という象徴的な扱われ方をしたからだと思います。そして、そういう物語を書かれたからです。当時は、家康は神君で、家康絶対の世界ですから、家康は非常に持ち上げられます。相対的に信長みたいな、天才的で、常人から見て、何を考えているのかわからない人は評価が下がります。一方、秀吉は、警戒されました。秀吉の評価が上がってしまうと、家康の評価に響くので、大阪では特に人気が高かったらしいのですが、秀吉の人気が出すぎないように、どうしたか知りませんが、徳川幕府は警戒をしたらしいです。そういうこともあって、時代の空気がより平和になる中で、信長は、残虐性とか、たくさんの人を殺めたとか、光秀の恨みを買うような身勝手さ、性格的な粗暴さみたいなところが強調されてしまいました。

しかも江戸時代は儒教の価値観が浸透します。儒教というのは、ご存知だと思いますが、儀とか礼とか、そういう価値を重んじるがゆえに、信長はそれに欠けているといわれます。戦国時代に、あんまり儀とか礼とか重んじているとあの世行きなので、そもそもその時代の価値で戦国時代をはかるということ自体に無理があると思うのですが、そういう流れになっていたため、信長の評価は低かったようです。

そうした中で、信長の評価を最初に見直したといわれているのが資料にある頼山陽です。頼山陽は、学者というより、今でいう評論家や作家に近い人です。作家でありながら、ちょっと歴史学者のような人とか、今でもそういう人いますね。歴史小説書いていた人に、そういう人はたくさんいらっしゃると思います。頼山陽は、そのことを抜きにしても、日本の歴史の研究にとって、出発点みたいな人です。その頼山陽が書いたのが「日本外史」です。これは歴史の本ですが、この本で日本史の出発点を信長に据えました。これは、どこに据えてもよかったと思います。中大兄皇子にしようが、平清盛にしようが、かまわなかったと思うのですが、頼山陽は江戸時代に、近代のスタートを信長に置きました。ある種の見直しですよね。大絶賛したわけではありません。信長の欠点についてはいろいろ述べていますが、頼山陽という人が初めて大衆的な人気が低迷していた信長を再評価したということです。

そうはいっても、その後もなかなか信長の評価というのは高くなりませんでした。ところが今度は明治時代に入り、徳富蘇峰という人が出てきます。明治時代

の大ジャーナリストですが、徳富蘇峰は頼山陽のことを相当に意識していたようで、彼も歴史を書きます。ジャーナリストは、現代史を書いているうちに、今伝えられている歴史ではない本当の歴史を書きたくなるという傾向があるようですね。徳富蘇峰は「近世日本国民史」を書き、信長を非常に高く評価します。頼山陽以上に評価します。安土城址に行くと、入り口のところに「安土城址」と書かれた石碑があります。駐車場があり、階段があって、上の方に安土城の址がありますが、道路側の入り口の石碑に「安土城址」と書いてあります。その石碑の文字の元は、徳富蘇峰が書いたそうです。徳富蘇峰はジャーナリストですし、頼山陽もポピュラーな、一般の人が読むようなものを書いていますから、歴史学者とは言いづらいところがあります。歴史学者じゃなくて、歴史家といっておいた方がいいぐらいの感じだと思います。

そういう人が昭和にもいます。司馬遼太郎さんです。司馬さんは、資料をものすごく集めてお書きになって、作家でありながら、司馬史観という言葉ができてしまうぐらい歴史家的な色彩の強い方です。ただ、そのことは結構問題をはらんでいると私は思っています。歴史を好きになったり、歴史が広まったりして、国民の良識みたいになっていくという上では、こういう人たちがいるのはすごく大事なことですが、下手すると、間違ったものが伝言ゲームのように伝わってしまうという危険があります。これはある程度作られた面白いものなので、さっきの濃姫と信長の話ではないですが、もしああいう話が広まると、それが物語になったり、ドラマ化されます。すると、それが本当だと思う人がたくさん出てきます。そうすると、やがてそれが常識として広がってしまいます。作り話だと思って楽しんでいればいいのですが、時間が経つとそれが本物みたいになってしまって、どこまでが真実で、どこまでが嘘かわからないということが出てくるわけです。

今回は織田家の話だから関係ありませんが、「竜馬がゆく」という作品がありますね。「竜馬がゆく」には、非常に魅力的な龍馬が書かれています。けれども、歴史学者が分析した龍馬とは、たぶん結構ずれがあると思います。それで、それを司馬さんはわかっているから、「竜馬がゆく」って、「龍」ではありません。略字を使っているというのは、お話っていう部分を相当含んでいますよというサインなんだろうという話があります。実際に、「竜馬がゆく」のネタ本というのがあって、「汗血千里駒」という講談本みたいな本です。司馬さんは、講談本のヒーローみたいな部分を巧みに取り入れて書いているんです。だから面白いんですね。また、作家は自由だから、内面も書きますよね。「この時、竜馬は思った」って、誰がそれを確認したんだ？という話ですよね。このように作家が書いた作品を歴史的な事実だと思っていると、ちょっと誤ることがあります。

信長は、最近では漫画やＣＭで扱われ、大河ドラマでは、ほんのワンショットでも出てくることが多いですね。出てくると、マントをはおり、ワインを飲んでいたりするので、おいおい本当か？という感じですが、現代的なかっこいいイメージがあるのでしょう。

さっき申し上げたように、江戸時代の不人気－再評価、明治時代の徳富蘇峰の評価というのがあって、現代に至ります。現代からの話は、私は昭和３４年生まれなので、自分の記憶を含めて思うのは、昭和に入っても信長の人気はそれ程高いものではなかったということです。昭和に入ってからも、人気が高かったのは、三英傑でいうと家康と秀吉でした。それはたぶん、年配の方は感じておられるのではないかと思います。かつて山岡荘八が徳川家康を書いて、大ベストセラーになりましたね。今、中国でも山岡荘八の徳川家康の翻訳本がすごく売れているそうなんです。きっと経済の成長期に、我慢して、苦難を乗り越えて、長い時間をかけて成功するといった物語というのは、国の違いを問わず受けるのではないかと思います。秀吉に関しては、朝鮮に出兵したり、そのうち明を征服したいなどといっていましたので、中国では扱いにくいのかもしれませんが、秀吉の話だって、うまくやれば中国で受けたりするのかなと思います。秀吉の場合はもっとわかりやすくて、田中角栄が政権を取った頃っていうのは、今太閤と言われて、学歴もないのに、頂点を極めた人というのが、秀吉的な成功物語として受け入れられました。高度成長期には、自分でもやればできるんだと、普通の人が秀吉と自分を重ねやすいのですね。秀吉は何もないところから、あそこまで駆け上がったわけですから。だから、どんな人にも夢を抱かせる存在という意味では、私は秀吉が好きです。秀吉というのは、非常に庶民の共感を得やすい人だったと思います。それは、大河ドラマを見ていても感じます。最初に信長の人気が出たのは、太閤記の高橋幸治さんがやった信長です。しかし主人公はあくまで緒形拳さんがやっていた秀吉でした。信長は、懸命になって努力する人のものすごく厳しい上司だったんですよね。その人の力を認めてくれる上司としての魅力というのが、高度成長期の信長のイメージだったと思います。それこそ、今だったら過労死してしまうのではないかというような働き方をしても、それを正当に評価する上司だったわけです。

「下天は夢か」という小説がありました。津本陽さ

んが日経新聞に連載しました。日経新聞が事前に、津本さんにどういうものを書いてほしいかというようなことを判断するために、読者アンケートとして戦国武将の人気ランキングというのを取ったそうです。その時は1970年代ぐらいですが、1位は徳川家康、まだ徳川家康です。2位は豊臣秀吉、それで、信長は25位です。25位ということは、その間にいっぱいいろいろな人が入っているわけで、どういう人がいたか結果を直接見ていないのでわかりませんが、要するにそんなレベルです。だから、日経の編集者にも、「信長本は売れないしねえ。津本さん止めた方がいいですよ。」といわれたというんですよ。今だったら考えられないですよね。作家は、書く前に資料を調べますよね。津本さんがいろいろ目を通したら、彼は先見の明があったと思うのですが、「やっぱり信長は面白い。」といって、日経の人はちょっと危惧したんだけども、信長のことを小説にしました。それが「下天は夢か」です。連載の最初はあまり感触がよくなかったようです。それが、段々回を重ねるにつれて、反応がすごくよくなってきたそうです。予想外ですよね。

「下天は夢か」が出てきたのは、80年代の終わり頃だったと思います。これは、たぶん時代がその辺りで変わっているからだと私は思っています。秀吉的な「努力すれば夢は必ず叶う」とか、家康みたいに「苦難があってもじっと我慢していたら上手くいく」といったような、同じ場所でじっと我慢して何かする、しかも凡人でも努力すれば必ず夢は叶うみたいな、もちろんみんな努力するので、半分真実で半分幻想なのですが、そういう価値観をみんながだんだん疑い始めたのです。それを証明するというか、支えるデータが、資料のグラフです。そんなに複雑なグラフではありません。「日本における人口態動の変化」の「生産年齢人口」というのは、15歳～64歳の人数です。昔は中卒で働いた人も非常に多かったので、こういうことになったと思うのですが、バリバリ働く元気な若い体力のある人たちの人数です。その成長率とか比率を見てみると、80年代から 90 年代をピークに落ちていきます。真ん中の「生産年齢人口比率」のグラフを見ますと、山が二つあって、下がっていますね。明らかに若く元気な人の数って減っているわけです。一方で、一番右にある「65歳人口比率」のグラフを見ますと、これはうなぎ登りに上がっていく。そういうのをまとめたのが下にある「年齢3区分別人口の推移」のグラフです。生産年齢人口のピークは1990年代の半ばです。だから、バブルを少し過ぎたぐらいから、落ちていくわけですね。それで、65歳以上の人口が段々上がっていって、子どもの人数が下がっています。何でこうなってしまったのかと感じる方もいらっしゃると思いますが、結婚しない人やお子さんを持たない人が増えてきています。生産年齢人口は、15歳～65歳になっていますが、今は少なくても 20 歳ぐらいから働き始める方がほとんどですよね。だから、生産年齢人口のグラフは、もう少し人数が減るので下がります。それから、老年人口も、65 歳以上で老年というのはちょっとお気の毒だなあという感じもありますから、少しずれると思いますので、実際には老年人口と年少人口が交わるのが80年代半ばぐらいだと思います。きっちり統計を出したわけではありませんが、この頃におそらく日本の国としての豊かさというのがある程度完成されたと思います。集団就職していたような人たちが、みんな一戸建てを持って、車1台何とか買って、お子さんを育てて、豊かさのピークが来た頃に、秀吉的な価値は失われたという気がしています。つまり、このままやっていってもだめだということですね。同じことやっていてもだめだろうという感じがあったと思います。そういうのが潜在意識として溜まっていて、信長の人気に変わっていったのではないでしょうか。秀吉は、信長の引いた設計図を完成させたといういい方をされます。それから家康は、信長的な新しいことを一からやるというよりも、司馬さんの言葉を借りれば、村の庄屋さんみたいな、懐が深くて、みんなのいうことを聞いて、三河の侍というのはものすごく忠義だから、「家康様のためなら」といって一生懸命してくれる。そういう、村落的な価値観でいっていた人だから、なおのことこういう成熟して完成された社会の次というのは見えないですよね。そういうのが潜在していたが故に、現在の信長の人気につながったのだろうなあと思うのです。

最近で言うと、私は似ているなと思うのは、トランプ現象です。隠れトランプと言うのをご存知ですか。アメリカの大統領選で、トランプが何で勝ったかというのは、それこそ政治学のプロが分析しないとわからないですが、今のままじゃダメだと思っていて、でも、それを表には出してない人はいっぱいいるのですね。表には出してないけど、何かのはずみでそういうのがエネルギーになって溢れ出すということがあるわけですよ。だぶん80年代以降って、日本は表面的には豊かなままでいるんだけど、不満とか変革しなきゃいけないという思いが、見えないエネルギーとして溜まっていった時期なのではないかなと思うわけです。それが、結果として信長人気のようなところにつながったのではないかと思います。だから、江戸時代以降、始めてこんなに人気が出た時代がきたのではないか。

そのせいか最近、私への取材の依頼が増えました。私の父のときはそれほどでもなかったと思います。し

かも、評価の内容が、強い武将とかそういうのではないのです。横文字使うと、イノベーターみたいな、変革者としての信長について聞かれます。あえて言うとスティーブ・ジョブズみたいなイメージです。新しいことをいきなり始めて、周りはすごく迷惑なのですが、いつの間にか世の中を変えてしまう。しかも、損得というより、美学で動いている。美学に沿わない人にはたまったものではないが、しかしその人の美学が大衆の潜在的な要求を捉えたりするから、ちょっと努力だけでは到達できないところまで行ってしまうということもあるのだと思います。そういうことが、若い人にも受けるのでしょう。芸術的なセンスがあり、今の世の中を変えてしまえる可能性が感じられるからです。

だから、なぜ人気者かというところに戻りますけど、漫画などに扱われるのは、家康でもなければ秀吉でもありません。一昔前だったら、秀吉的な、サラリーマン成功物語みたいな物語が出てきて、大衆に支持されたと思いますが、今は「信長協奏曲」です。「信長協奏曲」は、たまたま信長と顔がそっくりだった三郎君という現代の普通の高校生が、タイムスリップして過去に行ってしまいます。信長というのは、あまり覇気がある方ではなかったので、「お前、俺の代わりになってくれ」といって、身代わりになります。ここには、信長は、現代の人と入れ替わっても違和感がないであろうというのがもとにあるわけですね。現代人がタイムスリップしたというふうに思われるような新しさが、彼からは感じられたということなのだと思います。その他諸々、作品は本当にいっぱいあります。この間お会いした志野さんという作家の方は、信長についての小説を書いて、朝日新聞の歴史小説の賞をお取りになりました。この作品では芸術の目利きとしての信長が描かれています。また彼はかつて、信長を総理大臣にした漫画を描いて、最初はそれで漫画家としてデビューしたのです。その作品は「内閣総理大臣織田信長」といいますが、今の停滞している政治ではなくて、ばっさり新しいことをやってくれないかなというような願望があって、そういう漫画になったのではないかというふうに思います。

秀吉はやっぱり努力の人です。家康は辛抱の人です。辛抱の人も努力の人も、普通の人ができることです。信長は変革の人です。変革の人というのは、普通の人には真似できないのですよ。そういう魅力があるのだろうと思います。秀吉、家康の時代というのは、普通の人が一生懸命やっていたら、自然に給料が上がる時代なんです。所得倍増です。若い人に、所得倍増の時代があって、池田勇人という首相がいて、知恵袋になったのが下村治という経済学者ですけど、所得を倍増しますと世の中に宣言して、２年かそこらで本当に倍になったという話をすると、「えっ、そんな時代があったんですか」と言いますからね。やっぱり仰天するような話なんです。仰天するような話なんですけど、そういうことがあれば、辛抱もするし、努力もします。だけど、現代では辛抱して努力しても、下手すれば体壊すし給料は上がらないみたいなことになっています。だから、若い人を、「今の子はちゃんと働かない」みたいに批判する人は、時代の見方を誤っているなと思います。それからもう一つ、成長期は、給料は上がらなくても、ポストがあるんですね。よくおわかりだと思いますけど、昔は課長さんがもっといました。係長さんもいました。資料のグラフを見ればわかると思いますが、生産年齢人口が増えていくということは、その生産年齢人口が上がっていった時に、みんながヒラということはありません。みんなが、課長さんになったり、部長さんになったりできたのです。少々給料が上がらなくても、それだけで働く気が起こる。ところが、生産年齢人口が下がるにつれて、どんどんポストが無くなっていきます。私は仕事柄、いろいろな会社に行って、話を聞きますから、いろいろなところから名刺をもらいます。名刺の役職をみても、今はわけがわかりません。何とかチームリーダーとか、何とかマネージャーとか、何とかコンサルタントとか、これ何する仕事ですか。複数の人に会うと、こっちの役職とこっちの役職ではどっちが偉いのですか、という感じになります。ポストがないから、いろいろな役職名を付けているのですね。しかし日本は専門職の国じゃないから、そんなのいくら付けたって、本当の専門職じゃないわけです。何とかコンサルタントとかいっても、どの程度ですかという話ですね。そういうことに象徴される時代の変化があって、信長の人気というのが、今、上昇しているのだと思います。

４　歴史家の功罪

頼山陽、徳富蘇峰、司馬遼太郎と代表的な人を出しましたが、歴史家というのは、先程申し上げましたように、史実と虚構を巧みにない交ぜにして魅力的な物語を紡ぐ人たちです。これにはいいこともたくさんあって、特に織田家は、有り難いことに信長のことを、例えば司馬さんなんて、とてもよく書いてくれています。資料の「歴史家の功罪」のところに例をあげています。「新史　太閤記」に書いてあるのですが、「(尾張一のすずやかな美男にまします)と、信長の国中でもまれな容貌を猿はうらやましく思うのだが、当の信長は･･･」とありますね。これは、キリシタンバテレンの音楽をやっている時に、信長がそれを聞いている時の

シーンですが、「信長はもとより音楽をこのみ、よき笛師や鼓師をかかえていたが、かれもこの世でこれほど微妙な階律をきいたのはむろんはじめてであったであろう。信長はそのオルガンに寄りかかり･･･」と書いてあって、「藤吉郎のおどろいたのは、その横顔のうつくしさであった。藤吉郎は信長につかえて二十年、これほど美しい貌をみせた信長をみたことがなく、人としてこれほど美しい容貌もこの地上でみたことがない。」とここまで書きますからね。おそらく、客観的な事実というよりも、司馬さんは、木下藤吉郎にとって信長は神のごとくに見えたというふうに思って書いたのだと思います。容貌的に美しくない、ただ実力と気が利くというようなところで役に立とうと思った人を使ってくれたわけです。それこそ、高度成長的なチャンスが転がっているような時代だったわけです。「(このひとは、神だ)と、このとき、理も非もなくおもった。」

司馬さんは、藤吉郎の目を通したにせよ、信長のことを非常に美しく書いてくださっているし、あまり悪く書かないですね。一方でなぜか家康に対しての見方が厳しいですね。私の推測ですが、司馬さんは、世の中を変えてしまうような人が、単純に好きなんだと思います。龍馬がそうですよね。龍馬は、史実では、あれ程の人だったというふうには思えませんが、あれはやっぱり司馬さんの願望というか憧憬が込められているのだと思います。だけども、これが真実かと思ったら、そうではないというところに大問題があります。資料の一番下に「お松の話」を書いています。お松は加賀百万石の前田利家の妻で、「百万石の半分はお松のおかげで得た」という、それだけの内助の功があったという人です。それで、前田利家の家と木下藤吉郎の家は隣同士だったのですが、塀がなくて、間に木槿の木があって、「奥さん、おはようございます」というように寧々さんとお松さんが話していたということになっています。「ご主人はお元気？」というような世界だったのだろうということなのですが、歴史の研究家からいわせると、こんなことはありませんという話です。それは、前田利家の家といわれる跡地と、木下藤吉郎が住んでいたであろう場所とが、確かに隣り合っているが、間の木槿というのは当てにならないし、たぶんこの二人の嫁御同士がここで出会って立ち話をしたであろうという想像のもとに書いているのです。この木槿の木というのが、私はやっぱり作家ってすごいなあと思うのですが、リアリティがありますよね。木があって、春のうららかな陽が差していて、花びらか何かがちらほら散っているところに、大河ドラマの中のきれいな女優さんが二人話しているみたいな雰囲気を思い浮かべるじゃないですか。それで、北政所様と垣根越しに話しているといったような、そういう世界を思い浮かべますよね。だけど、そんな事実の証拠はありません。しかも、木下藤吉郎家跡や前田利家家跡には「伝」とあります。よく歴史展示に「伝」とありますが、「伝」というのは、これは本当にそうだという証拠はありませんよという時に付けるのです。本当だったという証拠はありませんが、嘘という証拠もない。昔からいわれてきているから、博物館とかは「伝」とつける。だけど、これは眉唾なのです。そういう眉唾のことを、非常に巧みに魅力的に伝えるのが、歴史作家の腕の見せ所という感じですよね。だから、事実と小説って、やっぱり切り離さないといけません。大河ドラマは、当然みなさん切り離して観ていらっしゃると思いますが、まさか、大阪城の中で本当にあんなことやっているとは誰も思いませんよね。あれなんか、巧みにいろいろなことを入れているわけです。だから面白いので、それをやっちゃいけないという話ではありません。しかしそれを真実だと思ってしまうとたいへんです。信長については、司馬さんが非常によく書いてくださっているのですが、ちょっとおっかないのは、司馬さんが書いたものは、よく読むと、「何とかの何とか伝典ではこのように書かれている」といったように出典史料が出ていることがあります。でも、全然書いてないところもあります。非常にうまくモザイクになっていて、どこまでが真実で、どこまでが彼の想像力かわからないのです。これがもてはやされて、どんどん伝わって、例えば100年経ったとします。すると、それがすべて真実だというような伝わり方をしかねません。

資料「歴史家の功罪」の一番上のところに、「敵は本能寺にあり」とあります。みなさんは、たぶん明智光秀が、どこかの時点で、周りに少し武将がいたか、たくさん武将がいたかわかりませんが、「敵は本能寺にあり」といったと思っているじゃないですか。「敵は本能寺にあり」が、最初にどこに出てきたかご存知ですか。どの史料にもこんなことは書いてありません。私も「信長公記」を読みましたが、「信長公記」にもありません。「信長公記」を書いた太田牛一が、光秀の軍に入っていたはずはないので当然ですね。これは、何に出てきたかというと、頼山陽の書いた「日本楽府」です。「楽府」という言葉からわかるように、これは一種の歌です。節を付けて歌うもの。頼山陽は、歴史的な物語に節を付けて歌うような歌集を作ったのです。これが「日本楽府」で、そこに「敵は本能寺」という言葉が出てきます。それを、その後世の人が使ったわけです。それで、本能寺の変から400年以上経った今では、みんな、明智光秀はどこかで「敵は本能寺にあり」といっ

たと思いこんでいるじゃないですか。でも、よく考えてみたら、「敵は本能寺にあり」って、誰が聞いたのかという話です。明智光秀の軍にいた誰かが、どこかで「敵は本能寺にあり」と日向守がいったとかって書いているのではありません。要するに、一番のもとは「日本楽府」で、頼山陽の想像が普及してしまっただけの話なのです。ですから、そういうふうに、歴史を読むときは気をつけましょうということです。

おわりに

私がいろいろな歴史学者の人に会ったり、自分で調べたり、評判を聞いて気がついたことは、歴史というのは、わからないことがまだいっぱいあって、あたかも相当なところまでわかっているように見えても、手紙一本発見されるとひっくり返る世界であることです。

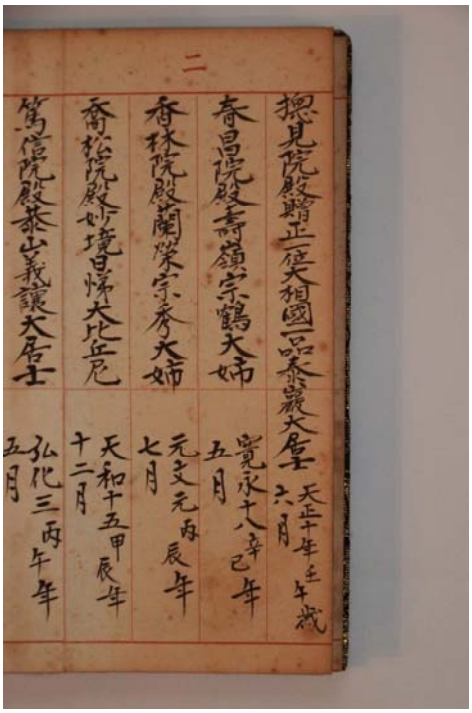
歴史が川のようなものだとすれば、我々が読んだり見たりしているものは、いわば、川面に頭をだしている部分だけなんです。そこを見て、この岩とこの岩がこうつながっているのだろうとか、水底の形はこうだろうとか、そうやって判断しているだけなのだろうと思うわけです。ましてや、人の気持ちは記録にほとんど残らないので、明智光秀が何で信長を本能寺で殺したのか、何であそこで裏切ったのかといった時に、みんながいろいろなことを言います。しかし人の気持ちはわからない。いろいろな説がありますが、明智光秀に聞いたら、「いやいや、俺そんなこと考えてないよ」というかもしれません。だから、そういうことを踏まえて歴史を見るべきだろうなというふうに思います。そんなことが、丹波の柏原藩織田家に生まれた私が、信長についていろいろと考えたことのまとめです。

【第４回 織田 信孝 氏 資料】

織田一族家系図（信長以降）

織田信秀
- 信長
  - 信忠 — 秀信〔除封〕 岐阜藩
  - a 信雄 松山藩
    - 秀雄〔除封〕 大野藩
    - 信良 ① 小幡藩
      - 信昌 ②
        - 信久 ③
          - 信就 ④
            - 信右 ⑤
              - 信富 ⑥
                - 信邦 高島藩
                - 信浮 ① 天童藩
                - 信美 ②
                - 信学 ③
                - 信敏 ④
                - 寿重丸 ⑤
                - 信敏（再承） 子爵
                - 信恒 同
                - 信正
                - 信弘
    - b 高長 大和松山藩（宇陀）
      - c 長頼
        - d 信武
          - 信休 ①
            - 信朝 ② （後期）柏原藩
              - 信憑 ④
                - 信守 ⑤
                - 信貞 ⑦
                - 信敬 ⑧
                - 信民 ⑨
                - 信親 ⑩
                - 信大 子爵
                - 信和
                - 信孝
            - 信旧 ③
              - 信応
                - 信古 ⑥
                - 鶴姫
  - 高家二千七百石 長政
    - 信明
      - 信栄
        - 信之
          - 信味
            - 信存
              - 信愛
                - 信徳
                - 渠久麻呂
                - 明
                - 久
                - 一磨 ＝ ユキエ
                - 濱子
                - 淳
    - 旗本三百石 信清
      - 信安
        - 信序
  - 岐阜城主 信孝
  - 旗本二千石 信高
    - 高重
      - 一之
        - 信門 高家千五百石
          - 信倉
            - 信直
              - 長孺
              - 長裕 ⇢ ？
        - 旗本五百石 高元
          - 某〔除封〕
  - 高家千石 同七百石 信貞
    - 貞置
      - 長迢
        - 長能
          - 長説
            - 信錦
            - 信由
    - 旗本三百石 貞則
      - 信種
        - 信豊
          - 信尚
            - 信義
    - 旗本三百俵 貞輝
      - 長喬
        - 信尹
          - 信之
            - 信昌
- 勘十郎
  - 信澄
    - 昌澄
      - 信高 旗本二千石
        - 信成 千五百石
          - 信茂
            - 宣居
              - 信尹
              - 信方
              - 信節
        - 旗本五百石 信英
          - 信栄
            - 信温
            - 長義
- （前期）柏原藩 林藩
  - 信重〔除封〕
  - Ⅰ 信包
    - 信則 Ⅲ
      - 信勝〔除封〕
    - 旗本三千石 信當
      - 信相
        - 信政
          - 信義
          - 信彭
- 味舌藩 長益（有楽斎）
  - 長孝 野村藩
    - a 長則〔除封〕 b
  - 戒重藩（のち芝村藩）
    - ① 長政
      - ② 長定
        - ③ 長明
          - ④ 長清
            - ⑤ 長弘
              - ⑥ 長亮
                - ⑦ 輔宣
                - ⑧ 長教
                - ⑨ 長宇
                - ⑩ 長恭
                - ⑪ 長易
                - 長猷 子爵
                - 長純 同
                - 長義 同
                - 長繁
                - 裕美子
    - 旗本三百俵 政時
      - 某〔除封〕
  - 柳本藩
    - ① 尚長
      - ② 長種
        - ③ 秀一
          - ④ 秀親
            - ⑤ 成純
              - ⑥ 秀行
                - ⑦ 信方
                - ⑧ 秀賢
                - ⑨ 長恒
                - ⑩ 秀錦
                - ⑪ 信陽
                - ⑫ 信茂
                - ⑬ 信及 子爵
                - 秀實 同
                - 信一 同
                - 長利 同
                - 長功
                - 高志

歴史の名残り



右の戒名（養華院）とは誰でしょう?

日付を比べてみると、30 年の開きがあります。

総見院　　天正 10 年(1582 年)6 月 2 日

養華院　　慶長 17 年(1612 年)7 月 9 日

信長評価はどこから始まったのか

江戸時代の初期、信長は人気者ではなかった。
それはなぜでしょうか。

歴史学者ではなく「歴史家」の視点が歴史の国民的な認識を形成する。

江戸時代　　頼山陽　　(1780 ~1832)　　「日本外史」

明治時代　　徳富蘇峰　(1863 ~1957)　　「近世日本国民史」

昭和時代　　＿＿＿＿＿＿　(1923 ~1996)

●なぜ人気者なのか

最近では漫画にもよく扱われる織田信長。その人気はいつから?
「信長協奏曲」
「信長のシェフ」

現在の人気はいつ始まったのか?

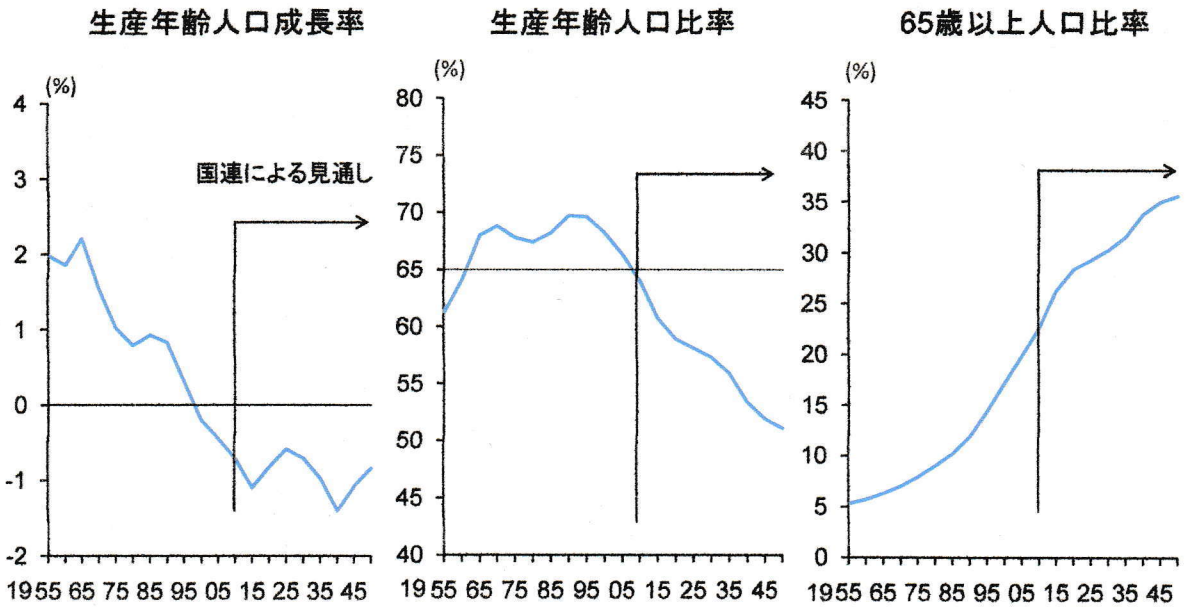
津本陽が「下天は夢か」の執筆を
始める前、日経新聞の読者アンケートで戦国武将の人気ランキングを
聞いたところ、

1 位・・・　徳川家康
2 位・・・　豊臣秀吉

では、
織田信長は何位だったでしょうか?

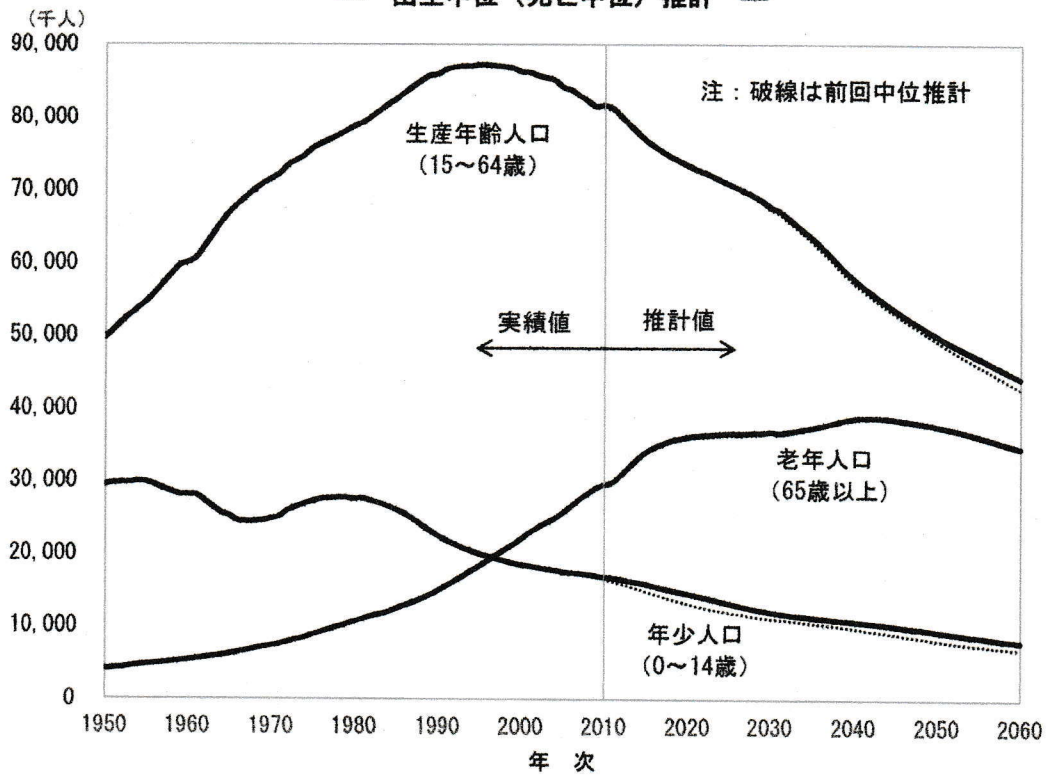
日本銀行
BANK OF JAPAN

日本における人口動態の変化



(注)生産年齢人口は、15～64歳の人口。
(資料)United Nations, *World Population Prospects: The 2010 Revision*

図１－３　年齢３区分別人口の推移
―　出生中位（死亡中位）推計　―



国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成 24 年 1 月推計)

歴史家の功罪

「敵は本能寺にあり」　　（「日本楽府」）

(尾張一のすずやかな美男にします)
と、信長の国中でもまれな容貌を猿はうらやましく思うのだが、当の信長は自分の面など意にも介せず、わらの元結で髪をくくっている。

藤吉郎はその音色の妙なることにおどろいたが、それ以上に
おどろいたのはそれに聴き入っている信長の秀麗な横顔であった。
　信長はもとより音楽をこのみ、よき笛師や鼓師をかかえていたが、
かれもこの世でこれほど微妙な階律をきいたのはむろんはじめてであったであろう。
　信長はそのオルガンに寄りかかり、心持首をかしげ、すべての音を皮膚にまで吸わせたいという姿勢で聴き入っていた。藤吉郎のおどろいたのは、その横顔のうつくしさであった。藤吉郎は信長につかえて二十年、これほど美しい貌をみせた信長をみたことがなく、人としてこれほど美しい容貌もこの地上でみたことがない。その印象の鮮烈さはいまも十分に網膜の奥によみがえらせることができるし、時とともにいよいよあざやかな記憶になってゆくようでもあった。
(このひとは、神だ)
と、このとき、理も非もなくおもった。

　お松も晩年、
「若いころ、太閤さまのお家とは、隣同士であった。塀というようなものはなく、木槿垣ひとつが境で、北政所様とはよく垣根ごしに話をした」
と、このころをなつかしんだ。

(いずれも「新史　太閤記」から)

歴史は川底のようなものである

私たちが見ているのは、川の水面から頭を出した岩だけ。
しかも、たくさんの「伝」がある。
川底の地形を知ることは難しい。

第５回
戦国期丹波の城郭と防御施設

城郭談話会会員　福島　克彦

はじめに

最近、京都府では中世城館の悉皆調査報告書が刊行された。これにより、今まで不明であった京都府側の丹波国の城館の分布や構造が明確になりつつある。すでに兵庫県側は 1980 年代に調査を終えており、民間の調査成果を加えると、図面がほぼ出揃った観がある。ここでは、丹波の山城について紹介し、その構造について明らかにしたい。

１　中世城郭の概略

ここで、簡単に中世山城の概略について紹介したい。日本には数多くの山城跡が残っているが、大半のものが戦国期の築城と言われている。特に近畿地方では、その傾向が強いと考えられる。

基本的に、中世城郭は集落背後の里山の頂に築かれる。自然地形の頂を削平、盛土して、曲輪を形成する。中心部分は主郭（本丸）に相当する。周囲の長細い曲輪を帯曲輪という。曲輪の縁辺部には柵が設けられていたが、なかには、これを補強するため、あるいは城兵が身を守るため、土塁が廻らされた。土塁の中には、固い地盤（地山）や盛土を活用して、櫓台を築く場合があった。曲輪の出入口にあたる場所を虎口と呼ぶ。防御上、もっとも重視された場所であり、クランクさせる、空間をつくるなど、さまざまな工夫が施された。曲輪、あるいは城域の背後に築かれるのが、尾根線を遮断する堀切である。ある意味、城跡を認定する貴重な存在である。これによって、尾根線から侵入しようとする敵兵を遮断しようとした。斜面には横堀や竪堀が築かれ、城域を設定する。横堀は等高線と並行して築かれる堀であり、城域の区画になるとともに、城兵が入る塹壕として敵兵を掃射する場ともなった。竪堀は等高線と直交して築かれる遺構で、斜面を這い上がる敵兵の横移動を封じる施設である。なかには、竪堀が連続する畝状空堀群が見られ、斜面上の敵兵の動きは完全に上下のみとなり、弓・鉄炮の射撃で容易に撃退することが可能となった。

城館の平面構造（縄張り）とは、こうした多様な防御施設の組み合わせで決定していった。こうした平面構造の決定には、築城主体たる地元の国衆らが大きな権限を持っていたと思われる。限られた領域の中で要害堅固な自然地形を読み取り、立地を選択したと考えられる。そして、やはり限られた地元の人員のなかで、築城人夫を徴発し、工夫を凝らした平面構造を生んでいったのである。

２　平地城館跡の様相

丹波国は山地が多いため、山城が多い印象があるが、意外と平地城館跡も残存している。春日盆地（丹波市春日町）には、野村城、国領城、朝日城の平地城館などが残存している。野村城は、矩形の土塁と堀が残る貴重な平地城館である。歴史的経緯は不明であるが、周囲の条里型地割に規制されて築かれている。国領城は京街道沿道にある城で、現在は寺院となっている。向かい側に「市場」と言う地名があり、城の門前に市場があった可能性がある。朝日城は尾根突端の山城であるが、その北麓に矩形の土塁痕跡が、少なくとも二ヶ所残っている。この朝日城は、戦国時代に荻野氏同名中が集住していた集落で、それを示す遺跡といえよう。

平地城館は、村落とは比高差がほとんどなく、同じ生活空間であったと思われる。村落を治めた地元国衆の居館である可能性が高い。ただし、山城の分布と比較すると決して数は多くない。これは丹波のような山国だけでなく、畿内近国の平野部でも同様である。国衆たちは、ふだんは村落と密着した生活をしていたものと思われるが、土塁・堀を築くパターンは決して普遍的な有り方ではなかったようである。では、どのような場合において、こうした土塁・堀が構築されていくのか、各々の城跡でさらに追究していく必要があるだろう。その意味で、春日盆地の平地城館跡は貴重な存在である。

３　単郭山城の展開

こうした平地城館よりも、比較的多く分布するのが、単郭山城である。丹波夜久郷（福知山市夜久野町）の単郭山城は、おもに集落背後の尾根の突端に立地し、主要な曲輪は一つのみのタイプである。そのため 50 メートル四方に収まるような小規模なものである。しかし、虎口や竪堀、あるいは畝状空堀群も築くタイプもあり、防御施設では引けを取らない。集落背後の立地から、これらも村落に密接につながった国衆の城であったと考えられる。特に秋葉城跡では、畝状空堀群なども採用されており、当時の新しい防御施設を使いこなすことができたようである。

こうした単郭山城は、何鹿郡の平山城跡、平山東城跡、梨ヶ岡城跡（綾部市）、春日盆地の長見城跡（丹波市

春日町）にも見られる。集落との比高差は小さいため、きわめて密着した関係であったと思われる。

４　横堀の発達

戦国時代の山城には横堀も築かれ、尾根線のみならず、城域を確定しようとした。ただし、丹波の山城の場合、こうした横堀の発達は抑制気味で、比較的小規模なタイプが多い。淀山城（篠山市）には、堀切と断続的につながる横堀がめぐらされていた。ただし、全て横堀にするのではなく、途中帯曲輪状の施設、あるいは仕切りなども設けながら、区画しようとする姿勢が見える。荻野氏段階の遺構が残る黒井城西ノ丸（氷上郡春日町）には櫓台の傍に横堀を築いている。新庄城跡（福知山市）には、堀切と連続して背後に巨大な横堀をめぐらせており、内縁の曲輪の土塁も、これに沿って築かれている。

丹波で横堀がもっとも発達したものとして、栗城、日置谷城（綾部市）、井内（猪倉）城跡、法貴山城跡（亀岡市）などが挙げられる。ただし、栗城以外は、虎口の発達が見られるため、織豊系城郭の可能性がある。

５　畝状空堀群の構築

こうしたなか、16 世紀中葉と確認できる遺構が畝状空堀群であろう。丹波国では、特に何鹿郡に多く分布している。近年確認された将監城跡（綾部市）は、その最たるもので 100 本近くの竪堀が築かれて構成されている。この城は近畿地方でも有数の畝状空堀群と位置づけられる。逆に畝状空堀群は南桑田郡（亀岡市）や多紀郡（篠山市）では、分布が限定的である。こうした分布にも粗密がある点も、この防御施設の特徴となっている。

さて、何鹿郡の平山城跡は、この畝状空堀群が発掘された貴重な事例である。平山城の場合、畝状空堀群の最上段に横堀を設け、これに横矢が掛けられるよう突起部分が設置されている。この横堀部分は、上の曲輪からは斜面の傾斜が死角となって敵を撃つことができない。そこで、こうした突起部分が設置され、掃射できるような仕組みにしている。つまり、畝状空堀群を這い上がる敵兵が、これを登りきった時の対処も考えていることになる。山城の解説において本当に戦いがあったのか聞かれることがあるが、こうした施設は、実際の戦いがあって初めて考えられるものである。

６　拠点的城郭の肥大化

こうしたなか、実際に 16 世紀後半に攻防戦があったと知られているのが、波多野氏の八上城（篠山市）、荻野・赤井氏の黒井城（丹波市春日町）、内藤氏の八木城（南丹市八木町）である。これらは、16 世紀後半に織豊権力が入部したため、本丸などの主要部は織豊権力によって改修されている。後述するが、側壁の石垣、虎口は、織豊期の構築である。

では、戦国段階の遺構は、どこに残っているだろうか。多紀郡の雄、波多野氏の居城八上城は 16 世紀に何度も籠城戦を経験している。この城の場合、主要部の南東の谷にある朝路池周辺に、波多野時代の構築物が残っている。二つの尾根線に挟まれた谷線に池が見られる。この両側の二つの尾根線とも曲輪とともに堀切を築いているが、堀切は連続するようほぼ同じ標高に位置している。朝路池の井戸曲輪の切岸とも一直線で連続しており、人為的な構築が進められている。この井戸曲輪を守ろうとする強い意志が働いている。

荻野氏の黒井城は、天正 3～4 年と同 7 年に明智光秀に攻められている。前述したように、黒井城西ノ丸部分に荻野氏段階の遺構が残っている。自然地形の尾根を活用して、曲輪の先端に櫓台を設けているが、外側には大堀切、横堀などを取り巻き、防御の要にしている。こうした尾根線防御が強く感じられる遺構である。

さらに内藤氏の丹波八木城（南丹市八木町）は、山頂の主郭から放射状に尾根が広がっているが、各々の尾根に曲輪群が設けられている。重要なことは、やはり重要地点で堀切と接した櫓台を設け尾根線を防衛している。これらの櫓台は、各曲輪において主郭側を守るように配置されている。肥大化する山城のなかで、櫓台が主郭を守るように配置されている点に新しさが見られる。

このように、城は拡張を続けていくが、主郭を守るような防御施設を保持している点に特徴が見られる。なお、これらの大規模城郭には、畝状空堀群がほとんど確認されておらず、これらの城が機能していた時には畝状空堀群の発展はピークを過ぎていたものと考えられる。

７　織豊系城郭の築造

丹波における本格的な織豊権力の介入は、やはり天正 3～7 年の光秀による丹波攻略期が最初であろう。光秀は、従来からの拠点的城郭に入り、これらを拡張している。前述した八上城、黒井城、八木城の主郭部は、基本的に明智、羽柴氏の時代に改修されている。高石垣を用いた側壁と、やはり石垣を伴う虎口が設置されていた。特に黒井城のタイプは南側に張り出した虎口空間があり、主郭と二の丸の間を折れてつないでいた。こうした石垣を伴う虎口に織豊権力の特徴が見られる。

一方、光秀が新規で築城したのが、氷上郡と多紀郡の境界に位置する金山城（柏原町・丹南町）である。こ

れは、氷上郡の荻野・赤井氏と多紀郡の波多野氏を遮断するため、光秀が築いた。岩盤が露出した山頂であるため、現在も石垣と竪土塁が残っている。当時、光秀は丹波衆に金山城を築かせていたが、同時に同じ丹波衆に監督をさせている。

他にも宇津城跡(京北町)、須知城跡(丹波町)、笑路城跡(亀岡市)などが見られる。これらは、基本的に明智時代に留まると思う。一方、岩尾城跡(山南町)、黒井城跡中心部(春日町)、周山城跡(京北町)などは、羽柴氏にも入部した記録が見られる。特に周山城や岩尾城は主要部が、ほぼ総石垣であった。また発達していた虎口も見出され、織豊系城郭の導入を如実に示している。

8　城下町の築造

中世期丹波は首都である京都を背後から支える地域として、数多くの権門寺社の荘園が設置された。こうした様相は室町期も補強され、幕府が保護する禅宗寺院、あるいは幕府の御料所なども設置された。当時丹波守護職は細川京兆家であったが、幕政を司っていたため、在京していた。そのため、守護所などのような政治都市は発展しなかった。さらに参詣者が集う門前町も一部を除き発達していない。また、浄土真宗や法華宗が広がらなかったため、戦国時代に発達した寺内町も展開しなかった。思い切った言い方をすれば、丹波は中世都市が未発達の地域であった。

こうした様相は戦国城下町にも当てはまる。前述した内藤氏の丹波八木、波多野氏の八上(八上では一部市場が見られたが)、あるいは荻野・赤井氏の黒井も、戦国段階の都市の様相はきわめて抑制されている。なお、在地の平地城館では、前述した国領城などのように、城の門前に「市場」地名が見られるものも一部見られる。千原城(福知山市夜久野町)、報恩寺城跡(福知山市)、宍人城跡(南丹市園部町)などにも、城の近辺に市場があり、城の門前が小地域の市場となっていた様相は見られた。

こうしたなか、明智光秀は亀山城、福知山城を築き、後の近世城下町の基盤をつくった。また、明智氏が改修した須知城跡(京丹波町)では、短冊形地割を残す「古市」があり、かつての戦国期城下町の跡地が残っている。稠密性の高い城下町が形成されるのは、早くても明智光秀の時代を待つ必要があった。

おわりに

このように丹波の山城は、比較的残存度が良好であり、多様な防御施設を残している。「はじめに」で述べたように、兵庫県は1980年代に悉皆調査を終えているが、その後確認された城跡も多い。今後は改めて多紀郡、氷上郡の城跡調査を進めていく必要性がある。また、没交渉になりやすい兵庫県側、京都府側の丹波の情報を共有化していくことも課題である。

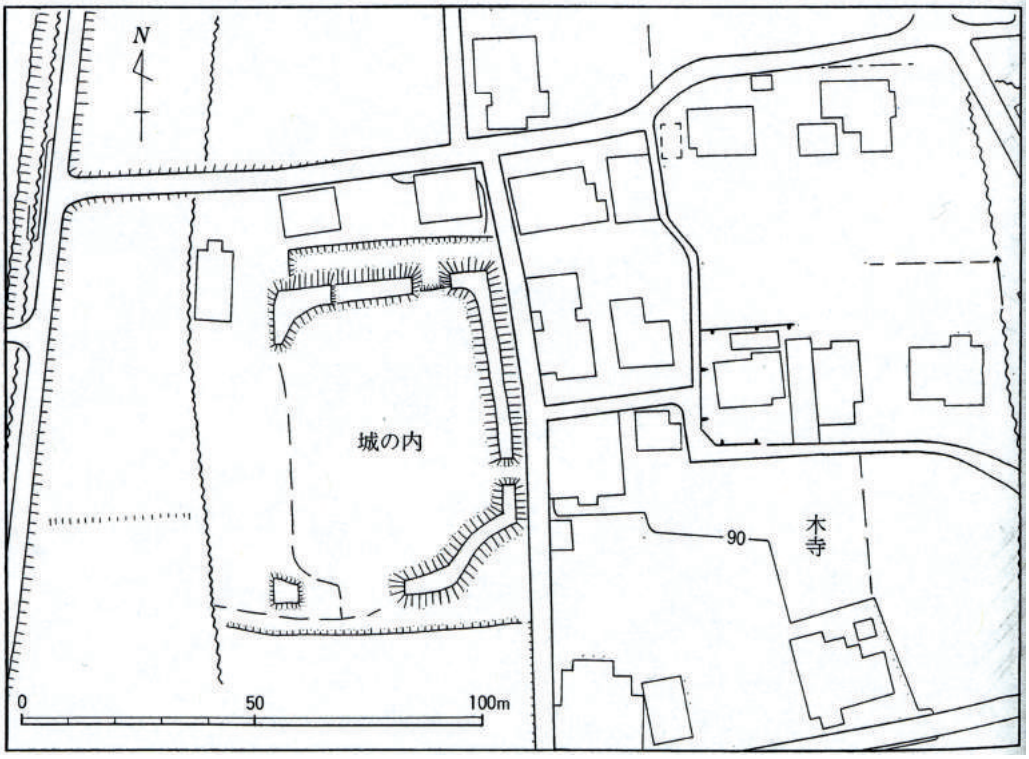


図1 野村城跡

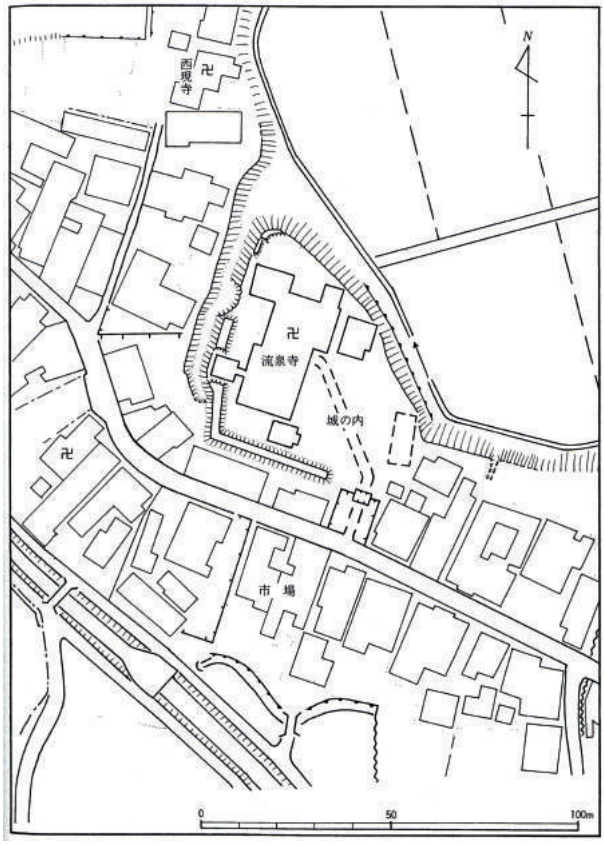


図2 国領城跡

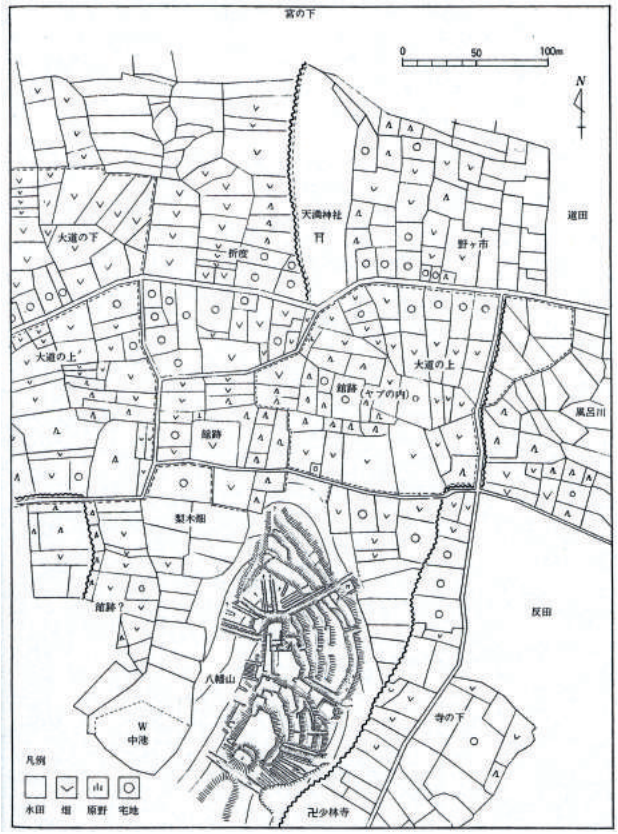


図3 朝日城跡

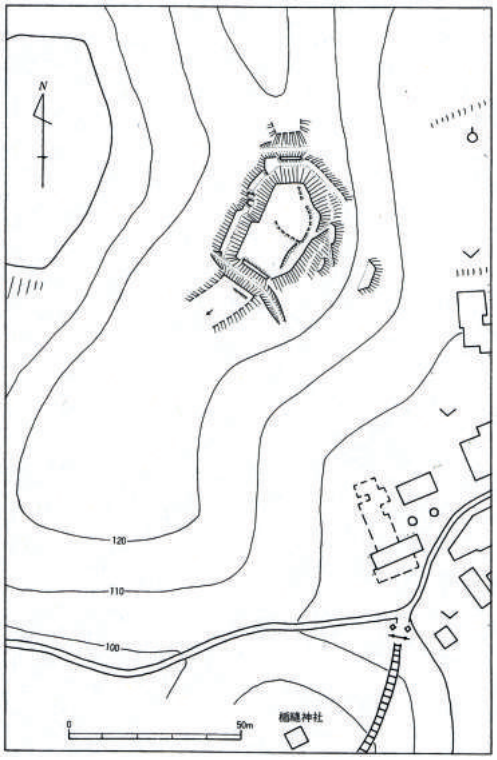


図4 長見城跡

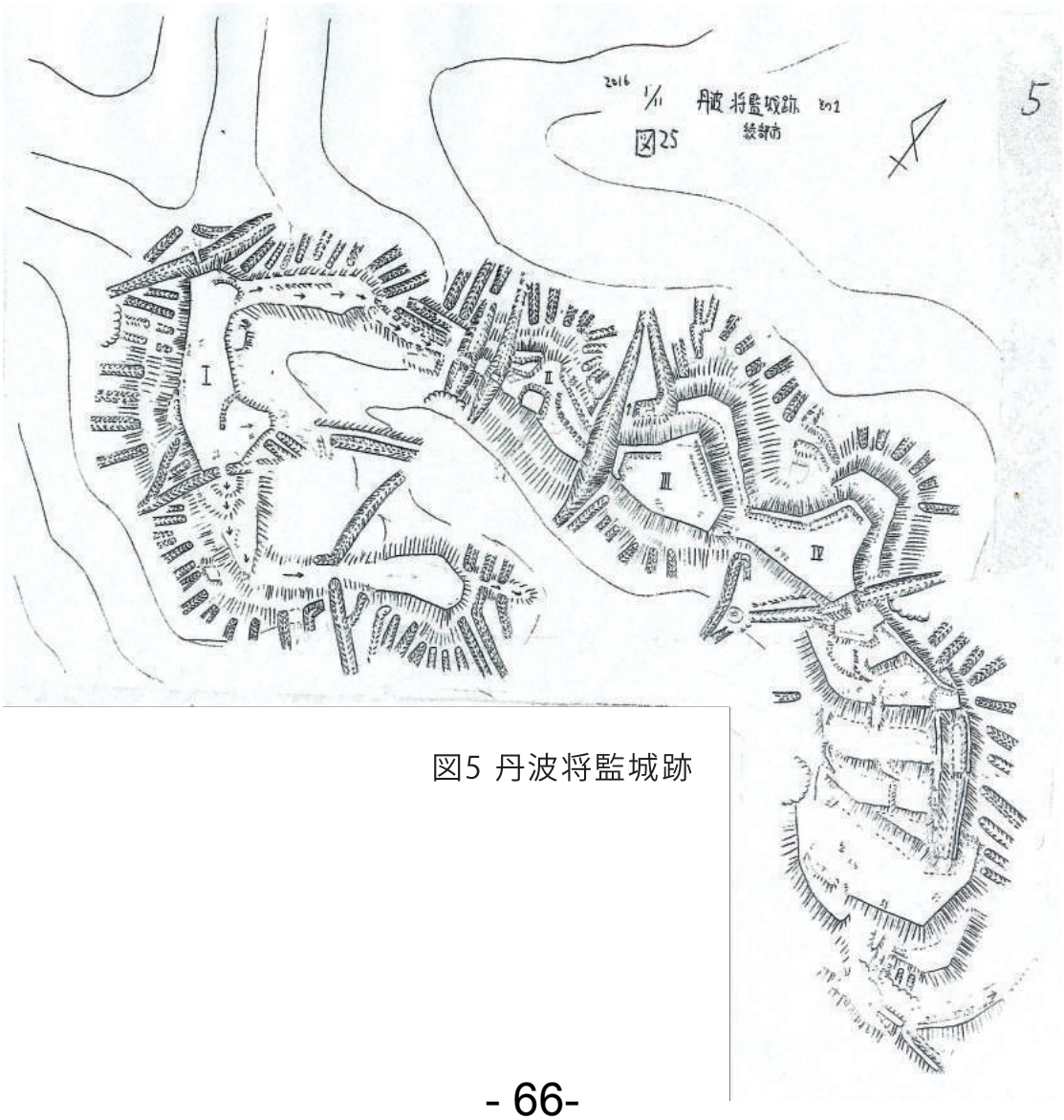


図5 丹波将監城跡

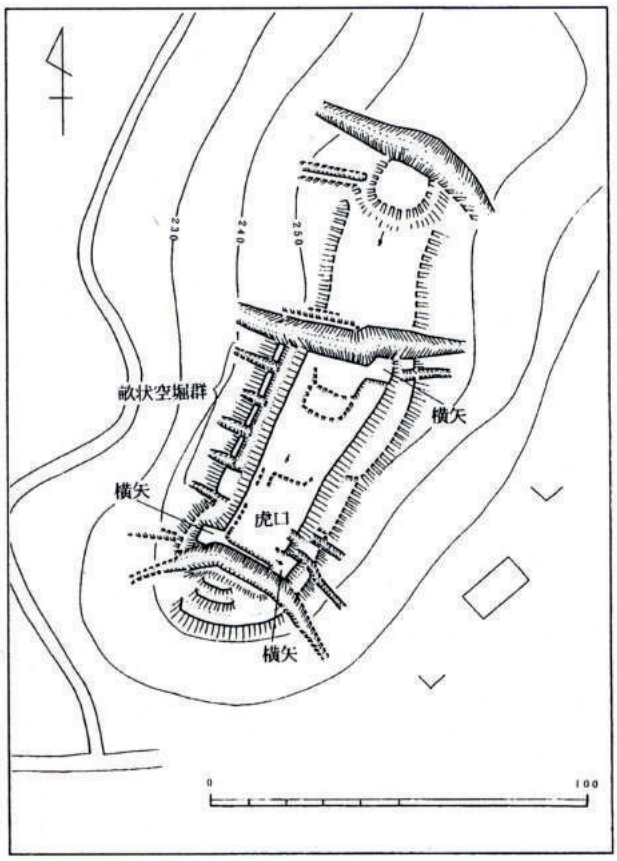


図6 大上西ノ山城跡

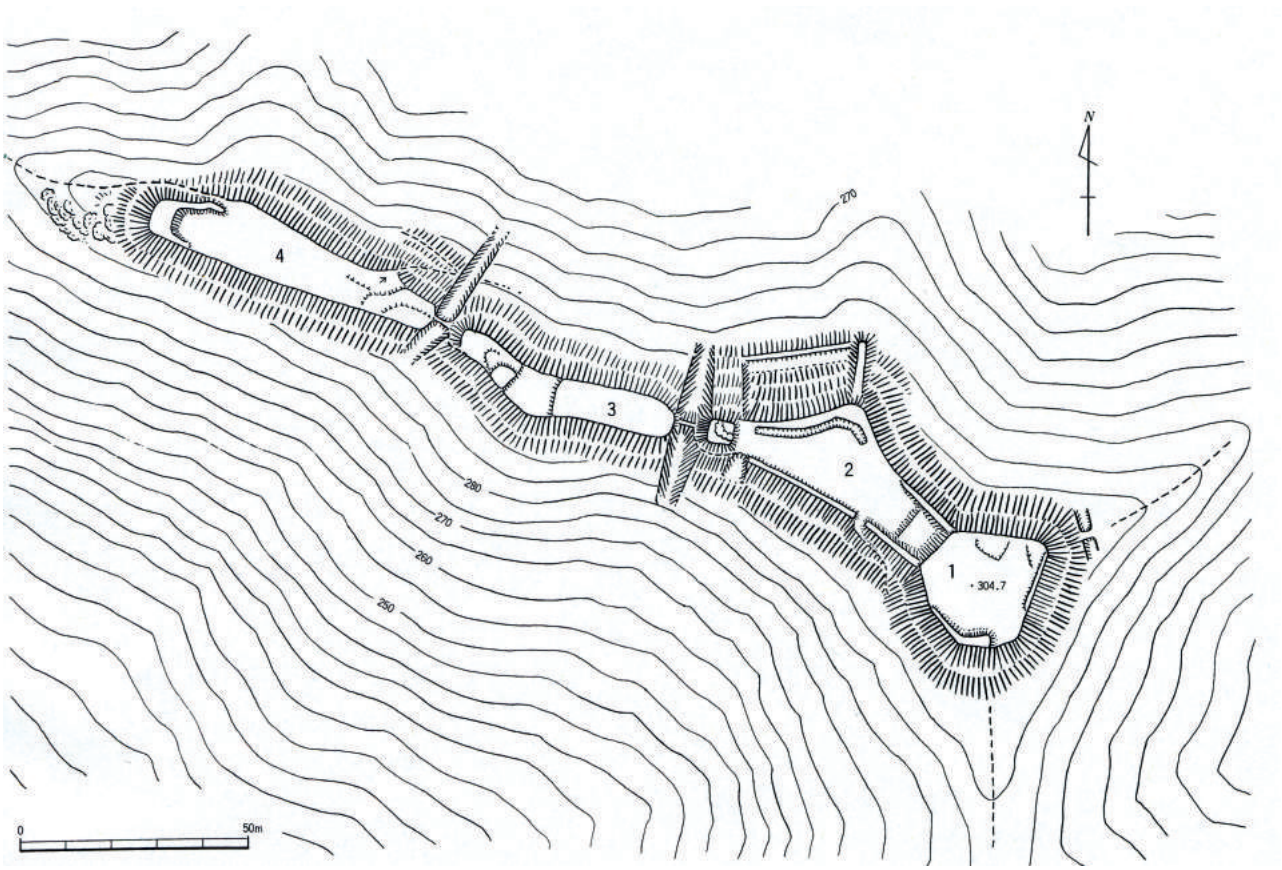


図7 黒井城西ノ丸

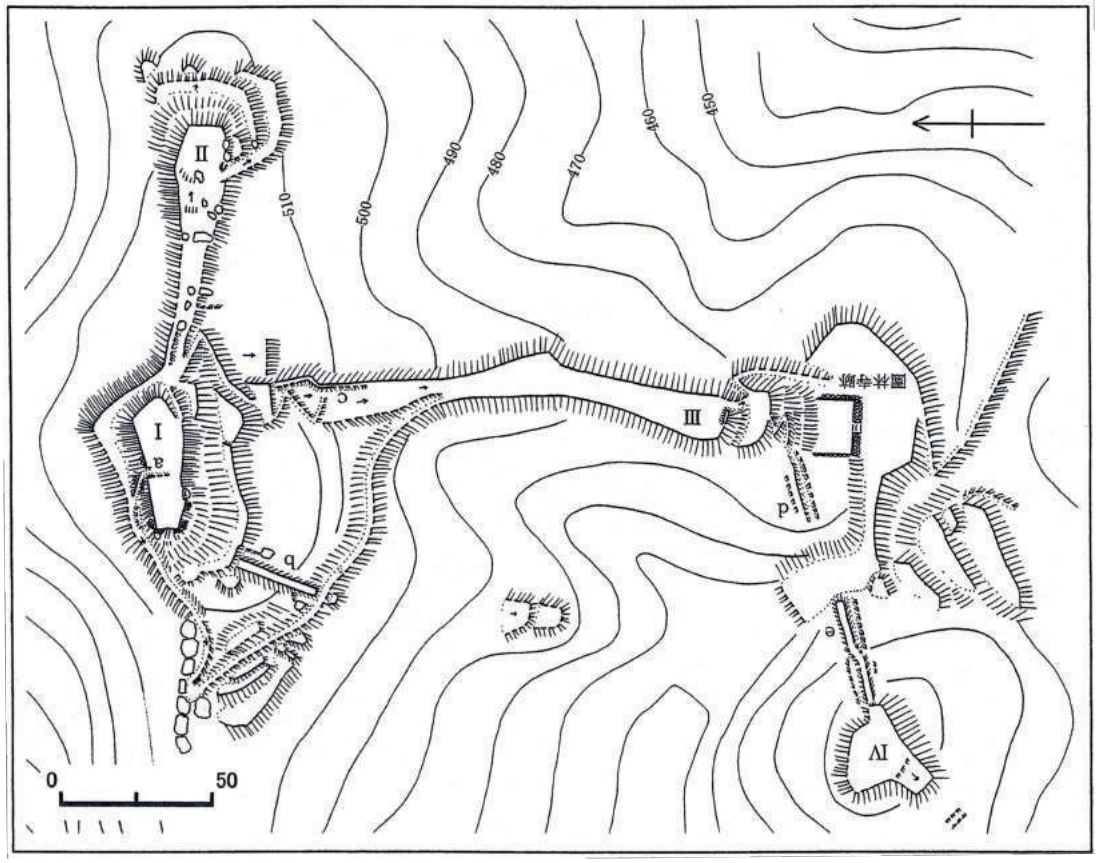


図8 金山城跡

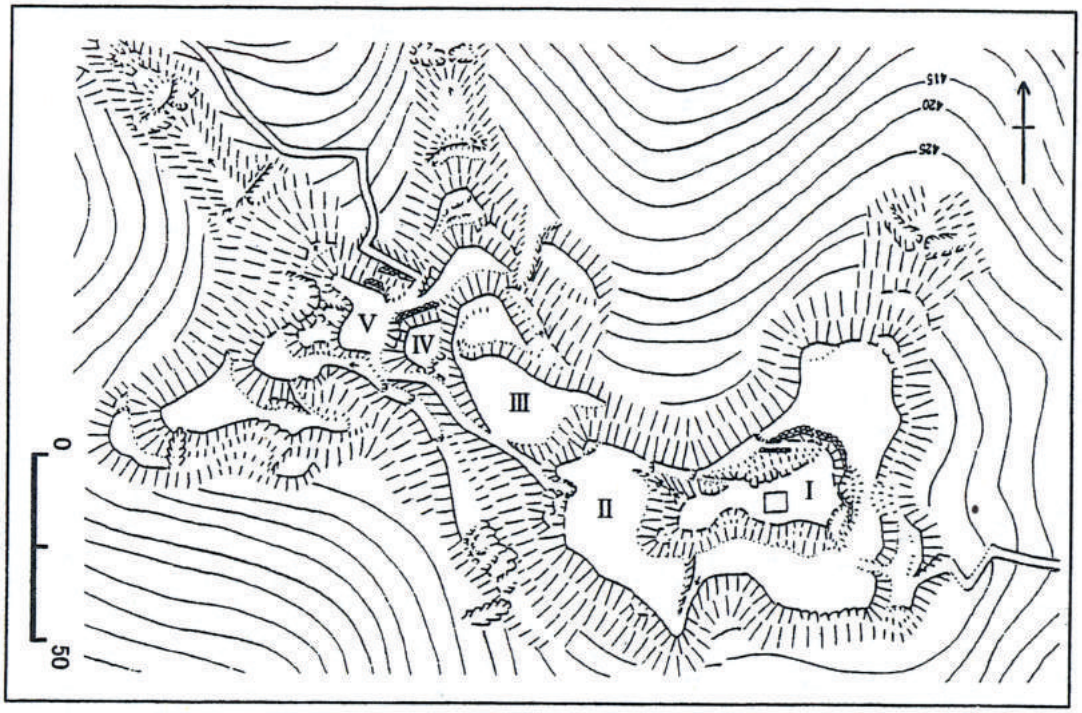


図9 八上城跡

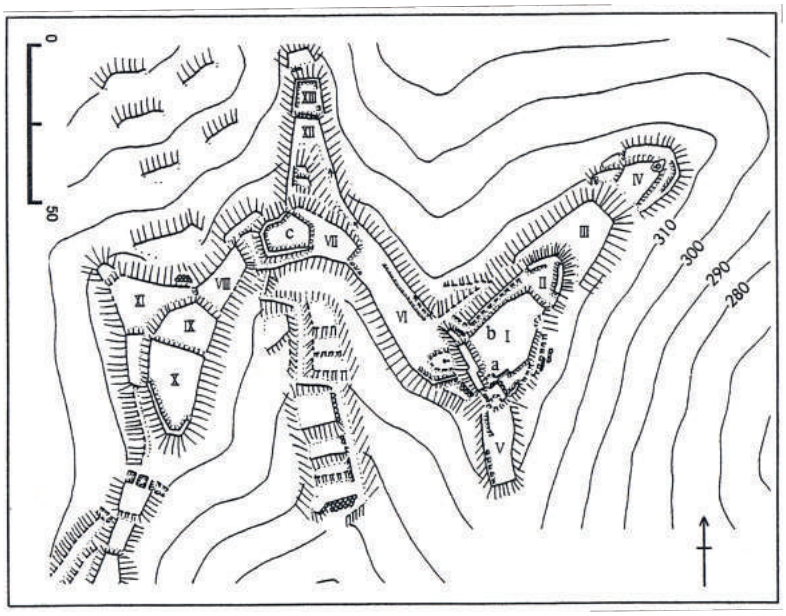


図10 八木城跡

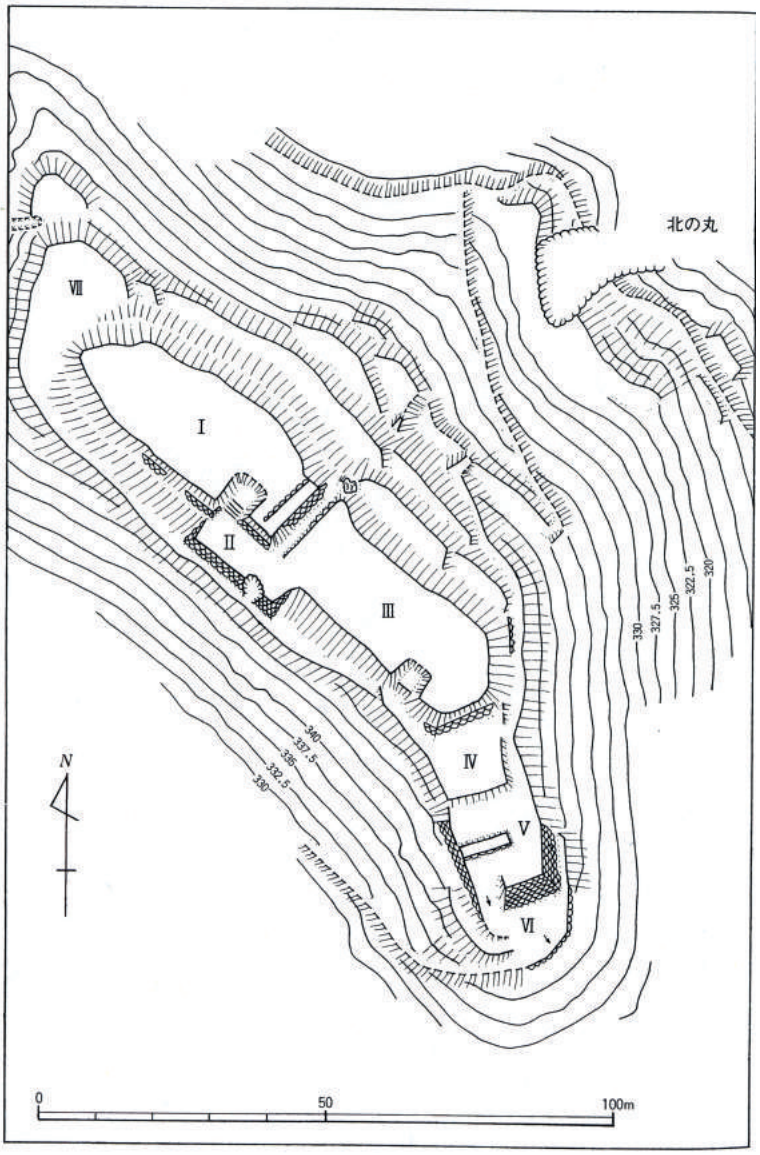


図11 黒井城跡

３　講師紹介

野田 泰三 氏（京都光華女子大学 教授）

1964 年京都市生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。現在、京都光華女子大学人文学部（兼キャリア形成学部）教授。日本中世史、特に、室町・戦国期の幕府・地域権力の研究などを専門とする。『姫路市史』『高砂市史』『小野市史』『新修神戸市史』『三田市史』などの編纂に携わる。著書に『兵庫県の歴史』（共著、山川出版社）、『上賀茂のもり・やしろ・まつり』（共著、思文閣出版）、『大地の肖像－絵図・地図が語る世界』（共著、京都大学学術出版会）、『黒田官兵衛』（共著、宮帯出版社）などがある。

渡邊 大門 氏（株式会社歴史と文化の研究所代表取締役・歴史学者）

神奈川県生まれ。関西学院大学文学部卒業。佛教大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。戦国時代の研究においては、特に赤松氏、山名氏、宇喜多氏を手がけるほか、戦国大名全般にも詳しい。著書に『大坂落城　戦国終焉の舞台』、『真田幸村と真田丸の真実　家康が恐れた名将』、『真田幸村と真田丸　大坂の陣の虚像と実像』、『真田幸村のすべて　大坂城決戦！　真田丸への道』等多数。

小林 基伸 氏（大手前大学 教授）

1953 年北海道に生まれる。1978 年京都大学文学部卒業。兵庫県立歴史博物館学芸員を務めていた 1984～89 年に丹波国大山荘現況調査に参加する。研究テーマは、荘園の景観論的研究、戦国期播磨の赤松氏と地域権力。主な著書に「中世荘園の世界－東寺領丹波国大山荘－」（共著）、「兵庫県の歴史」（共著）、「戦国期の権力と文書」（共著）などがある。現在、大手前大学総合文化学部教授、同学部長。

織田 信孝 氏（文筆家、旧・柏原藩織田家 19 代当主）

1959 年 1 月生まれ。大学法学部（政治学科）卒業後、デザイン事務所、広告制作会社勤務、就職情報誌の制作ディレクターを経て、1989 年よりライター、ジャーナリストとして独立。広報誌、記事広告、記事、書籍などを手がけている。近年では、英文で日本の文化、技術、トレンドを紹介するサイト「IGINTION」にも寄稿している。旧・柏原藩織田家 19 代当主（織田信長から数えて 18 代目）。神奈川県茅ヶ崎市在住。

福島 克彦 氏（城郭談話会会員）

立命館大学文学部卒業。専門は日本中世都市史、城郭史。丹波地域の戦国史および城と城下町を研究する。著書に『畿内・近国の戦国合戦』。共編に『史料で語る戦国史　明智光秀』、主な論文に「織豊期における城郭・城下町の地域的展開」「城郭研究から見た山科寺内町」「丹波波多野氏の基礎的考察」「丹波内藤氏と内藤ジョアン」等がある。

編　集　後　記

平成２８年度の講座「丹波学」は、１６０名の方々に受講していただき開講することができました。受講いただきました皆様、本当にありがとうございました。

本年度は、テーマを「丹波を形づくったもの」として、時代区分を限定せずに丹波の足跡をたどりながら、その変遷について学ぶ講座にしました。著名な講師先生をお迎えし、大山荘が確立した平安時代から丹波の武将が活躍した戦乱の時代、そして柏原藩が置かれた江戸時代についてご講義いただきました。

丹波の成り立ちを探ることは簡単ではありません。多岐にわたる分野と膨大な時間の積み重ねがあり、現在でも語り継がれている史実もあれば、今は史料の中にひっそりと出てくるだけのものもあります。その足跡をたどっていくのはかなり困難を極めることが容易に想像できます。それでも、「丹波を形づくったもの」を学ぶことは、これからの丹波を形づくっていくにあたり、たいへん有効であると考えます。丹波の成り立ちを学ぶことは、現在の丹波をより深く知ることにつながります。さらには丹波に対する新たな見方や考え方を生み出すきっかけとなるはずです。講座「丹波学」では、活力ある丹波地域の創生の一助となれますよう、今後も丹波の成り立ちをテーマとした講座が開設できればと思います。

最後になりましたが、講師先生におかれましては、講義録の作成にあたり惜しみなくご協力いただきましたことに、心からの感謝を申し上げます。

平成２８年度講座「丹波学」講義録

平成２９年３月発行

発行　（公財）兵庫丹波の森協会
丹波の森公苑　文化振興部

〒６６９－３３０９
丹波市柏原町柏原５６００
TEL　０７９５－７２－５１７０